

---

# 帝国臣民ミホ

おっとり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝国臣民ミホ

### 【Nコード】

N2495D

### 【作者名】

おっとり

### 【あらすじ】

一人暮らしの少女ミホ……。ある日、彼女は家に帰る途中、道に倒れている一人の男を見つける。男の名はシャレー・ブルボン五世。マグニテ帝国皇帝だった男である。この物語は、そんなミホとブルボンが織り成す、ドタバタ&ハートフルボツコな日々を綴ったものである。

## 1 ・ふたりぼっちの新国家（前書き）

あなたがいる世界とは違う世界・・・  
遠い遠い、どこか別の世界の物語です。

## 1・ふたりぼっちの新国家

長方形の白い布の上を、墨汁をたつぷりと含んだ筆がシウルシウルと滑っていく。力強い筆さばきで最後の一画が書き上げられると、ミホはそれを読んだ。

『ようこそブルボン帝国へ!』

達筆な字で、そう書かれている。「なかなかの出来だ」と、書いた男は、額の汗をぬぐいながら満足げに笑った。

「よし、この横断幕を表に張ってこい。」

「ええ、嫌ですよ……恥ずかしいじゃないですか、そんなの。」

「黙れ! これは立派な観光事業なんだ!」

「『観光事業』って言われても……こんな所、誰も観光になんか来ないですって。」

来るはずがない。なぜなら、そこは国でもなければ、ましてや町や村ですらない、ただの一軒家なのだから。そこにいるのは、ミホと男の二人だけ。森の小さな一軒家なのだから……

ミホは一人暮らしだった。元々この家には、彼女と彼女の両親の三人が住んでいたのだが、彼女が三才の時に母親が病気で他界し、そして十歳になった時に、父親も突然蒸発してしまった。だからそれから五年間、彼女はずっと一人だった。そう、その男と出会うまでは……

それは、先日のことだった。いつものように、ミホは街での買い物を終えて、自分の家に向って歩いていった。いつもは彼女以外、この道を使う者はほとんどいない。ひとりぼっちの帰り道……それが常だが、その日は違った。

「え……?」

ミホは立ち止まった。道端に男がいたからだ。別にいたからと言って、どうと言うこともないが、その男が道に横たわっていたとし

たら話は別だ。ミホはすぐに男に駆け寄り、声をかけてみた。

「もしもし？　大丈夫ですか？」

「うう……」

死んではいないようだ……ミホはホツと胸を撫で下ろした。しかし、そうは言っても、男はかなりやつれている。着ている服もボロボロ。ただ事でないことは確かだった。

「一体どうしたんですか？」

「ああ……何か、食べる物を……」

そう言つて、男はぐったりとしてしまった。「これは大変だ！」と、どうも行き倒れらしいその男を肩に背負うと、ミホは家路を急いだ。

家に到着すると、ミホは男をベッドに寝かせ、買い物袋を持つて台所に向つた。「スープでも作つてやろう」と、そう思つてミホは野菜やらコンソメやらを取り出して料理を始めた。

「それにしても……」

包丁を動かしながらミホは考えた。あの男は何者だろうか？　緊急事態だったのであまり深く考えないで連れてきてしまったが、見れば風変わりな格好をした男である。ボロボロになつてはいたが、立派な刺繍の入ったズボンとシルクのシャツ、そして威厳漂う赤いマント。装いからすると、西方の国の人間だ……ミホはテレビで見た旅番組を思い出しながらそう考えた。異国から遙々やって来て、行き倒れとは可哀想に……男に同情すると、ミホはなるべく手早くスープを完成させた。

「さあ、スープができましたよ。これを食べて元気を出してください。」

「遅いではないか！……じゃなかった。うああ……ありがとう……」

と、ミホは何か引っかけかりを覚えた。一瞬、すごく元気そうな男が見えた気がしたのだが……しかし、目の前の男は震える手でスプーンを握っている。気のせい……だろう。と、ミホはそう思うこと

にした。

「ありがとう、美味しかったよ……」

「いえいえ、どういたしまして。それにしても、どうして、こんなになるまで食べなかつたんですか？」

「ええ、実は私は国を追われた身でして……ほら！ この顔、新聞とかで見たことない？」

「ああ、言われてみれば……」

男は自分のことを話し始めた。

男の名はシャレー・ブルボン五世。西方の国「マグニテ帝国」の第十五代皇帝である。いや、正しくは「つい、この間までその地位にあった男」と、言った方が良さそう。数日前、マグニテ帝国で大規模なクーデターが起こり、彼は帝位を剥奪されてしまったのである。その後、彼は逮捕され、後は処刑を待つ身だったのだが……「しかし、間一髪逃げ出すことに成功し、追っ手から逃れるために、遠く離れたこの国まで逃げてきたのです。」

「それは大変でしたね……」

そう言えば、『どこの国でクーデターが起きた』という、新聞記事を読んだ気がする……ミホが記憶を整理し始めた時だった。何を思ったかブルボンは、突然ミホに向って土下座をした。

「すみません！ 助けてもらっておいて、こんなお願いするのかもしれませんが、行く当てもないんです！ どうか、ここに置いてもらえないでしょうか？」

ミホは目を丸くした。目の前では、ブルボンが額を床にこすりつけている。この間まで皇帝だった人間がここまで……よほど困っているのだらうと、ミホはますます男に同情し、そして、しばらく考え込むと口を開いた。

「分かりました。こんな小っちゃい家で良ければ、いつまで居ても良いですよ。」

ミホは笑顔で承諾した。そのことがよほど嬉しかったのか、男の顔はどんどん晴れやかなものになっていく。しかし、実際、一番喜

んでいたのはミホだった。母親が逝き、父親もいなくなってしまったこの家に、人が来てくれるのなら、きっとこの寂しい生活にもピリオドが打てるだろうと、そう思ったからだ。

「ヤッファー！ ヤッファー！」

ブルボンは子供の様に飛び跳ねている。にぎやかな同居人が出来て本当に嬉しい……しかし、ミホがそう思えたのはそこまでだった。「それじゃあ、この家はもう私の物だな。」

「はあ？」

突然のことだった。ブルボンは椅子の上にドツカリ腰掛けると、ふんぞり返りながらそう言った。先程までとはまったく態度が違う。ミホは訳が分からなくなってしまうたが、とりあえず一つ一つ確認していくことにした。

「え？ あ、ここは私の家なんですけど……」

「ん、何を言ってるんだ？ 貴様はさつき、『ここに居て良い』と言ったではないか。」

「ええ、言いましたよ。言いましたけど……ええ？」

「何だ？ いちいち説明が必要なのか？ まったく、面倒臭い小娘だ……」

そう言って、ブルボンは椅子から立ち上がると、ミホの前で説明を始めた。

「これから、この家には私と貴様の二人が住む……そうだな？」

「はい。」

「私はこの間まで、マグニテの皇帝だった……一方、貴様は一般市民の小娘……そうだな？」

「うーん……はい。」

「皇帝は一般市民より偉い！ そうだな？」

「まあ……そうですね。」

「そこまで分かっているなら話は早い。一つの家には『偉い者』と『偉くない者』がいる……そうしたら普通、家は『偉い者』の所有物だろう！ つまり、ここは私が再起するための新たな領地！ 皇

帝である私と、臣民である貴様による新国家、『ブルボン帝国』なのだ！ 分かったら、馬鹿面してないで風呂の用意をしる！ ここ何日も湯浴みをしていないのだ。あと、着替えを用意しておけ。服がボロボロなのが見て分かんのか？」

無茶苦茶にも程がある……ミホは言葉が見つからなかった。さっきまで床に額をすりつけていたあの男は、一体どこへ行ってしまったのか？ そこまで考えてようやく、ミホはさっきの『行き倒れ』も、何もかもがブルボンの演技であったことに気が付いた。

どうしよう？ 追い出そうか……？ 一瞬そう考えたミホだったが……

「おい！ 早くしろ、この、ノロマ！ それでもブルボン帝国の臣民か？」

「はいはい……やりますよ。やれば良いんでしょう。」

どうせこの男を追い出しても、『ひとりぼっち』が待っているだけ。それならば、この無茶苦茶な皇帝陛下の臣民になってみるのも悪くないかもしれない……ミホはそう思い直し、風呂を沸かしに向った。

「良く考えたら、どうせ嫌になっても、警察とか呼んで追い出せば済む話だし……」

そんなこんなで、非公式ながら『ブルボン帝国』の歴史は始まった。それは同時に、クーデターを起されるのも領けるほどの、暴君の圧政の始まりであつたが、ミホは当然、この皇帝を失権させることは無いだろう。少なくとも、圧政を受け入れることによって、寂しさが紛らわされ得る限りは……

「早く横断幕張ってこい。」

「やだ。」



続く

## 1・ふたりぼっちの新国家（後書き）

ってことで第1話でした。

一話完結でちよいちよい連載して行きます。

この物語は私のFF小説フリーザ様と灰原さんを元に書きました。  
いや・・・・・・・・だって・・・・・・・・

FF小説なのに、たまにほとんどオリキャラ、オリジナル舞台って  
ことが多々ありまして。

これオリジナルで出来るんじゃないかなあ・・・・・・・・と。

ってことで似たような話になると思います。

ストーリーは新しく考えますけどね。

違いと言えば句読点を使ってることだけです。

実際句読点を使ったほうが楽なんですけどね^^；

あと世界感ですが・・・・・・・・

基本現代風な世界です。

でもたまに未来科学とか魔法とか出てくるかもしれません・・・・

・

つまり、別の世界のお話です^^；

## 2・強制労働カフェ

ブルボンは、ミホの所持していた通帳を見ていた。それなりの金額が入っているが、しかし足りない。ブルボン帝国を大きくし、元居たマグニテ帝国の人間達をアツと言わせるには、その額はあまりに少なすぎた。予想はしていたがこれほどとは……ブルボンは通帳を閉じると、溜息をついてテレビを見た。

「何か、うまい金策はないだろうか？」

テレビ画面では、『北テースト共和国、独裁の実態』と題した番組が放送されている。しかし、今のブルボンにとってはどうでも良い内容だった。ブルボンはテレビを消そうと、リモコンに手を伸ばした。

「私は北テーストで五年間、強制労働をさせられました。」

しかし、その時テレビから聞こえてきた単語が、ブルボンの手を止めた。ブルボンは、その四文字の単語を頭の中で反復すると、ニヤリと怪しい笑みを浮かべた。

「なるほど、『強制労働』か。その手があったか……」

数日後、ミホはなぜか、メイドの格好をさせられていた。

「ふむ、なかなか様になっっているではないか。」

「え？ あの、陛下？ 意味が分からないんですけど……」

彼女は朝早くにブルボンに叩き起こされ、「付いて来い」と言われるまま付いて来ただけで、一切の事情を知らされていなかった。

「お、良いねえ！ 良い感じじゃないの。」

ミホが訳も分からずに呆然としてみると、部屋にひよろつとした男が入ってきた。男の名はメジロ。ここ、『メイド喫茶マツクイン』の店長である。ミホは今日一日、彼の下で働くことになってい

るのだ。

「え、何で？」

「ふむ、帝国の財政を潤すためだ。臣民として、しっかり励めよ。」  
そう言うと、ブルボンはどこかへ行ってしまった。ミホはまだ良く分からなかったが、どうやらブルボン帝国のために、しなくても良い労務を課せられたらしい、ということは理解できた。

嫌だ！ 事情を説明して帰ろう……そう思つて、ミホはメジロの方を見た。しかし、彼はニコニコと嬉しそうに笑っている。

「いや、本当に助かったよ。君が来てくれなかったらどうなっていたことか……」

メジロが言うには、今日、マックイーンに大切なお客が来るらしく、その結果次第では多額の融資を受けることができるらしい。しかし、昨日になって、メイドが一人病気でダウンしてしまったため、お客の要求する『メイド五人』から、一人欠けてしまったのだ。

「うちはまだ開店したばかりで、メイドがギリギリ五人だったから……でも、これで何とかなるよ。良かった、良かった！」

どうやら、帰る訳にはいかないらしい……ミホは諦めて、溜息をついた。

「それじゃあ、仕事の内容を説明するね。難しいことは無いから、大丈夫だよ。」

それから二時間後、ミホはお客を前にしていた。相手をしているその男は、シライシグループ総帥の一人息子。いわゆる御曹司と言う奴である。「失敗は許されない」と言う思いが、逆にミホの緊張を煽る。今もシライシの注文したオムライスに、ケチャップでハートを書いているのだが……案の定、失敗してしまった。

「あゝん！ 失敗しちゃったですう。」

「おお！ 今の80点！」

しかし、心が広いのか、それとも馬鹿なのか、度重なるミスも、適当に可愛い子ぶることで誤魔化すことが出来た。

「コーヒーのおかわり、取って来ます。」

バックヤードに入って、ミホはホッと一息ついた。一時はどうなることかと心配したが、この分なら無事に乗り切ることが出来るだろう……そう考えながら、ミホがコーヒーを淹れていた時だった。

客室の方から、ガシャンという音がしたかと思うと、続いて、バシツと乾いた音が聞こえてきた。何事だろう？ ミホが恐る恐る客室を覗いて見ると、そこには怒り狂った表情のシライシと、その足元で頬を押さえてうずくまる、同僚のユウの姿があった。メジロも気付いたのか、オロオロしながらシライシの元へ歩み寄っていく。

「ど、どうかなさいましたか、シライシ様？」

「どうもこうもあるか！ こいつが俺のことを突き飛ばしやがったんだ！」

「ち、違……だって、セクハラ……」

そう、シライシがユウの体を執拗に触るので、ついつい突き飛ばしてしまったのである。涙目でメジロに助けを求めるユウだったが、しかし、メジロはただペコペコと頭を下げるだけ。さながら蛇に睨まれたカエルと言ったところか。

「セクハラ？ お前らメイドだろ？ ご主人様はなあ、触りてえんだよ！」

そんなメジロの態度を良いことに、シライシはそう言ってまくし立てた。

大変なことになってしまった……他のメイド達も、困った顔をしているだけで何も言わないし、「シライシは大切な客」と言っていたメジロに期待するのは酷だろうし……そうやってミホが困っている時だった。

「何だ？ 何の騒ぎだ？」

「あ、陛下。」

突然現れたブルボン。ミホはハッと振り返って声のした方を見た。「何しに来たんですか？」

「ふむ、貴様がサボっていないか、視察にやって来たのだ。それで

？ あそこで騒いでいる愚民は何だ？」

ミホは、それまでの経緯をブルボンに説明した。すると、ブルボンの表情はみるみる険しいものへと変わっていく。今回の接客を成功させるために、ミホを送り込んだと言うのに……ミホのミスではないが、失敗したとあれば、メジロが報酬を洩る可能性もある。ブルボンは何としても事態を収拾させたかった。

「よし、私があの下郎を黙らせてやる。」

「ええ！ 陛下、あまり余計なことをしない方が……」

「フン、皇帝に不可能はない！ 貴様は黙ってそこで見ているが良  
い。」

意気揚々と、シライシの元に向っていくブルボン。ミホにはその後姿が、なんと頼もしく見えた……が、しかし、それはどうも気のせいだったらしい。最初こそ威風堂々としていたブルボンだったが、シライシに灰皿で頭をド突かれると、威厳も何もアツと言う間に吹き飛んで、無様に床にひれ伏してしまった。

「部外者はすつこんでろ！」

「すみません！ すみません！ どうか殴らないで下さい！ お願  
いします……」

額を床にこすり付けながら懇願するブルボンの姿に、ミホは呆れて言葉も出なかった。何と言うヘタレ……とんだ皇帝陛下である。

「下郎を黙らせる」どころか、逆に、火に油を注ぐ結果となつてしまつた。

「舐めやがつて！ 俺が親父に頼めば、こんな店すぐにでも潰せるんだぜ？」

「そ、それだけは！」

必死に頭を下げるメジロを見て、シライシは下卑た笑みを浮かべた。

「嫌か？ 嫌なら許してやっても良いが、その代わり……おいメイ  
ドども！ お前ら全員、裸になれ！」

「おお！ そんなことで許してくださるのですか！ おいミホ、脱

げ。」

プライドが無いのだろうか？ ミホは、完全にシライシの腰巾着に成り下がってしまったブルボンを睨みつけた。しかし、その視線が気に障ったのか、シライシはツカツカと、ミホのいるバックヤードの方へ向ってきた。

「何だ、その目は？ ご主人様の言うことが聞けないってのか？」

ニタニタ笑いながら、ミホの服に手を掛けるシライシ。しかし同時に、ミホの右手が振り上げられた。そして次の瞬間、バシッと二度目の音が店内に響き渡った。

「最ッ低！」

赤く染まつた左頬を押さえながら啞然とするシライシに向って、ミホは思い切り言い放った。それきり静まり返る店内……メジロは椅子に腰掛けると、力無く天を仰ぎ見た。ここまで無礼を働いては、もうマックイーンはお取り潰しだろう……メジロは涙声の混ざった溜息を吐きながら、顔を両手で覆った。しかし、そんなメジロの思いとは裏腹に、シライシの表情は怒りのものではなく、悦びのそれへと変わっていった。気でも振れてしまったのだろうか？ ミホが首を傾げていると、シライシが口を開いた。

「これだ！ 俺が求めていたシチュエーションは！」

「シ、シチュエーション？」

「そう！ ご主人様を騷る強気なメイド……これこそが俺の求めていた、究極の『萌え』だ！」

両の拳を天に突き上げながら、歓喜の雄叫びを上げるシライシ。良く分からないが、喜んでいるらしかった。その様子を見て、てつきり、怒って帰ってしまうのだと思っていたメジロはホッと胸を撫で下ろした。

その後、シライシは、ミホが罵声を浴びせながら十発ほど尻を蹴ってやると、満足気な表情で帰っていった。一時はどうなることかと思われたが、ミホは無事に、マックイーンでの仕事をやり遂げる

ことができたのである。全てが終わり、感謝するメジロから報酬の入った封筒を受け取ると、ミホは家路についた。いつになく足が重い帰り道、疲労がどっとミホを襲った。

「でも、終わって見たら割りと楽しかったかな……あんななら、またバイトに行っても良いかも。」

「そうか、そうか。それは感心なことだな。」

その時、ミホの背後から突然手が伸びてきて、報酬の入った封筒を奪いとった。ミホが振り返ると、そこには封筒を開けるブルボンがいた。

「ほう、なかなか稼いだな。この金はありがたく、帝国のために使わせてもらうぞ。」

「ええ〜！ 陛下、何もしてないくせに……せめて、半分ぐらい私に下さいよ！」

「黙れ！ 元々、これは強制労働だったのだ。どこの国に、強制労働の賃金を支払う皇帝がいると言っただけじゃないか？」

「そんなあ……陛下なんて、殴られて土下座しただけじゃないですか〜！」

「うるさい奴だな……仕方ない。」

鬱陶しそうに言っと、ブルボンは近くのコンビニに入って行った。そして数分して出てくると、持っていた何かをミホに差し出した。

「ほれ、今回の報酬だ。これで我慢しろ。」

「報酬って、肉まんじゃないですか……」

「ピザまんもやるから、少し黙れ。」

強制労働はこりこりだ……妙に綺麗な夕日に照らされながら、ミホは肉まんにかぶりついた。

続く





## 2・強制労働カフェ（後書き）

第2話です。

メイドです。

最近メイドの出てる話が多いな・・・

私の前世はメイドか何かでしょうか？

それとも単にメイド好き？

どっちでしょう？

うゝん・・・・・・・・

いいえ、ケフィアです。

ってことで結論にしておきます。

### 3・力なき絵筆

「慈愛の精神溢れるゝ皇帝陛下ゝ！　そしてゝ小娘ゝ！」

「あの、陛下……何ですか、その歌？」

「昨日作ったブルボン帝国国歌だ。お前も歌え。」

「嫌ですよ、そんな歌……」

溜息をついて、ミホは、先ほど道を聞いた時にもらった地図を見た。次の交差点で左に曲がって、そのまま真っ直ぐ。その先に、一人の画家が住んでいる。今日、二人はその画家に会いに行くのだ。

それは昨日のこと。洗い物を終わらせたミホが居間に戻ってくると、そこにはスケッチブックと格闘するブルボンがいた。

「ブルボン帝国の国旗をデザインしているのだ。」

何をしているのか尋ねると、ブルボンはそう答えた。しかし、散乱した大量の紙くずが、うまくいつていないことを物語っている。ブルボンがあまりに一生懸命なので、ミホはおかしくなって笑ってしまった。しかし、それが気に入らなかったのか、ブルボンはムツとした表情で、スケッチブックとペンをミホに押し付けてきた。

「笑っている暇があったら、貴様も考えろ。」

「そんなこと急に言われても……うーん……」

仕方ないので、ミホは口を『へ』の字にして考えた。そして一分後、ミホはスケッチブックをクルッと反転させて、描いたものをブルボンに見せた。画用紙の真ん中には、子供が描いたものと大差ない『お花』の絵、そしてその下には、殴り書きされた『ブルボン帝国』の文字……

「貴様は……そんな国旗の国に住みたいのか？」

「えっと……えへへ……」

「却下だあッ！」

ブルボンは手刀一発で、ミホの持っていたスケッチブックを真っ

二つに引き裂いてしまった。

「仕方ない、やはりプロに頼むか……ミホ、この辺りで、そう言うセンスのある奴はいないのか？」

ブルボンが聞くと、ミホは頬に手を当てた。そしてしばらく考え込むと、彼女は数日前に見たニユースを思い出した。

「そう言えば、隣町の画家さんが、最近賞を獲ったらしいですよ。」  
「ほう、画家か……良いだろう、そいつに頼むことにしよう。」

そう言う訳で、二人は隣町の画家、『クリフジ』の所に向っているのである。

地図の示す通りに、交差点を左に曲がると、二人の目の前に、丘の方まで真っ直ぐに伸びる道が現れた。そして、その丘の上には小さな家が見える。おそらくあの家がそうだろう……二人はその家に向って歩きだした。

「ブルボン！ ブルボン！ ブルボン！ ブルボン帝国！」  
「お願いだから、大声で歌わないでください！ 周りの人達が見てるじゃないですかあ……」

好奇の視線に晒されながら、二人は丘を目指した。

それからしばらくして、二人は目的地に到着した。目の前には画家の家と思しきログハウス。遠くに見える街に背を向けて、二人はその玄関までやって来た。

「ごめんください！ どなたか、いらっしやいませんか？」

ドアをコンコンとノックしながら、ミホは中呼びかけた。しかし、中からは何の応答もない。留守なのだろうか？ ミホがそう思っている、ブルボンが前に出てきてドアノブを回した。

「開いてるじゃないか、入るぞ。」

「ちょ、ちよつと陛下！ ダメですよ！」

止めても聞かずに、ずかずかと入っていくブルボン。ミホは溜息をつくと、「お邪魔します」と言ってからブルボンの後に続いた。

そうして、リビングまでやって来た時だった。どうやら留守ではなかったらしい……二人はテーブルに突っ伏している男を発見した。クシャクシャの髪の毛に無精ひげ。むっくりとした体……随分とだらしのないその男は、二人に気付いたのか、面倒臭そうに体を起した。

「誰……？」

「私はブルボン帝国皇帝、シャレー・ブルボン五世。クリフジとか言う画家は貴様だな？」

「そうだけど、何……？」

「仕事を頼みたい。我が帝国の国旗のデザインだ。どうだ、名誉なことだろう？　ありがたく思え。」

胸を張って言い放つブルボン。人にものを頼む態度ではない。これではクリフジが怒るだろう……と、ミホは思ったが、しかし彼はそれすら面倒臭かったのか、再びテーブルに突っ伏してしまった。

「やだ……」

「なんだと？」

「描きたくないんだもん。モチベーション、上がらなくてさあ……」

「

そう言つて、クリフジは大きな欠伸をかいだ。その様子からは、やる気の欠片すら感じられない。このままでは国旗のデザインはるか、筆を握ることさえしてくれないであろうことは、誰の目にも明らかだった。ブルボンは腰に手を当てて溜息をつく、少しの間を置いてから口を開いた。

「じゃあ、モチベーションが上がればやるのか？」

「良いよ、上がればね……」

「フン、言つたな？　約束は守ってもらうぞ。」

クリフジの言葉を聞いてニヤリと笑うと、ブルボンはミホの方を見た。

一時間後、ミホはログハウスの前にいた。そして、隣に置かれたかごから大きなトランクを取り出すと、洗濯バサミでそれを挟ん

だ。

「何で私が、知らない男の人のパンツを・・・」

「うるさい奴だ。クリフジ先生は、きつと洗濯物が溜まっていたからモチベーションが上がらんのだ。分かったら、さっさと干してしまえ。」

ブツブツと文句を垂れながら、洗濯物を干すミホに向ってそう言うのと、ブルボンは家の中のクリフジの様子を見に行った。少しはやる気になったか？ と思ったが、しかしその様子は相変わらずだった。洗濯物は関係なかったらしい……

「風呂に入りたい……」

クリフジがそう呟いた。そうか、風呂に入りたいのか……ブルボンは、洗濯を終えて戻ってきたミホを捕まえると、今度は風呂を沸かすように言った。

「沸きましたよ。」

しばらくして、ミホがそう言うのと、クリフジはノタノタと風呂場へ向った。ザバーツと言う、お湯の音が聞こえてくる……ブルボンはその様子を覗うため風呂場へ向った。そーっと少しだけ扉を開けて、風呂場の中を見ると、そこには相変わらず気だるそうなクリフジ。風呂に入れただけではダメか……ブルボンは風呂場を後にすると、リビングで一息ついていいるミホの元へ向った。

「おい、先生の背中を流してやれ。」

「ええー！ 嫌ですよ、知らない男の人の裸を見るのなんて……」

「黙れ！ ブルボン帝国のスローガンは、『ここに笑顔の親切な国、ブルボン帝国』なんだ！ それぐらい、言われなくとも自分からやれ！」

さすがにミホは抗議したが、聞き入れてもらえず、結局『知らない男の人の背中』を流すはめになった。

風呂から上がったクリフジ。しかし、その様子は依然変わらない。

その、覇気が全く無い表情を確認すると、ブルボンはミホをにらみつけた。

「全然ダメじゃないか……」

「だって……ちゃんと背中流しましたよ……」

「もう良い、この役立たずめ！」

そう吐き捨てると、ブルボンは次の要望を聞くため、クリフジの元へ歩み寄った。

「腹が減った……」

今度はその一言。ミホは黙ってキッチンに向い、そして冷蔵庫にあった物をありったけ使って、ご馳走を作ってやった。そして、完成したそれをミホがテーブルに並べ、湯気といっしょに美味しそうな匂いが立ち込めると、クリフジは箸を持って無言のままそれを口に運んだ……その時だった。その表情に変化が現れた。それまで一貫して下がっていた口の端が、フツと上がったのだ。

「美味しいね……」

初めて見せる笑顔でクリフジはそう言うと、先ほどのローションションがウソだったかのように、夢中で食器の音を立て始めた。そして数分後、「ごちそうさま」と言って立ち上がると、クリフジはキャンバスに向って歩き始めた。ようやくと国旗のデザインを……と、ブルボンがそう思ったのも束の間、しかし、クリフジはキャンバスを通り過ぎて、ベッドの所まで行ってしまった。

「腹一杯になったら、眠くなっちゃった。おやすみ……」

そう言ってベッドの上に倒れ込むと、彼はグーグー寝息を立て始めた。その寝顔はとても幸せそうで、まったく起きる気配を見せない。当然、国旗のデザインなどされる訳もない。そこまで我慢していたブルボンは遂に切れた。

「起きろ！」

ブルボンはクリフジの顔面を踏みつけると、鼻を押さえてもだえているその男の胸倉を掴み、無理矢理ベッドから引きずり下ろした。「下手に出ていれば、調子に乗りおって！ もうここからはお願い

じゃない。筆を取れ！ 命令だ！」

ブルボンは、無理矢理クリフジの手に筆を握らせようとした。しかし、クリフジは腕をブンブンと乱暴に振り回して、ブルボンが渡そうとしてきたそれを叩き落としてしまった。

「貴様あ！」

「だって、やだもん！ 描きたくないものは描きたくないの！」  
「駄々をこねるな！」

遂には取っ組み合いの喧嘩になってしまった。それには、黙って見ていただけのミホもさすがに止めに入った。

「描きたくないって言うてるんだから、仕方ないですよ。」

ミホは、そう言ってブルボンをなだめると、ポケットからハンカチを出して、血のにじんだクリフジの顔を拭い始めた。すると、それまで怒りに満ちていたクリフジの表情が、途端にすーっと穏やかさを取り戻していった。

「ありがとう、優しいんだね……」

クリフジはそう言って、ミホの手をどけると、先ほど自分が叩き落とした筆を拾い上げて、キャンバスの前に置かれた椅子に腰掛けた。

「お礼に描いてあげるよ。」

遂に筆を動かしたクリフジ。いや、それは先ほどまでの、子供じみたダメ男のクリフジではなかった。力強い瞳から放たれるそのオーラはまさに『画伯』。描くことに人生を賭ける男の姿だった。ミホとブルボンが、その凄まじい迫力に圧倒されること三時間……クリフジ画伯は静かに筆を置いた。そして、しばらく黙ったままキャンバスを見つめた後、フーッと息をついてから、それをミホに差し出した。

「これは……！」

キャンバスを覗き込んだ二人は言葉を失った。触れるだけで壊れてしまいそうな、繊細なタッチ。見る者に、呼吸すら忘れさせるほどの美しい色使いで描かれたそれは、その優しさがにじみ出てくる



ような『ミホの肖像画』だった。

「国旗のデザインと言っとなるだろうがぁーッ！」

「やだ！」

再び二人が取っ組み合いを始めてしまった。しかし、ミホにはもうそれを止める気力は残っていなかった……

続く

### 3・力なき絵筆（後書き）

年末年始はだらだら過ごしたいなー。

そんな今日この頃です。

今年の大晦日はどうやって過ごそう・・・。

「やれんのか」見たいけど・・・お金無いし・・・

ハッスルはテレ東でやるけど・・・映らないし・・・

HERO'Sはネタみたいなものだし・・・

見たくないけど紅白でも見るしかないのか・・・

せめて笑わせてくれNHK。

NHKと言えばこの間の有馬記念の中継が良かったです。  
とくにゴールの瞬間の実況に笑わせてもらいました。

「祭だ！ 祭だ！ マツリダゴッホ！」

NHKさん・・・

紅白もそのノリでお願いします！

ってことで次は年始にうつります。

#### 4・恨みはらさでおくべきか！

ハアハア……と、ミホは膝に手をあてて息を切らしながら、後の様子をうかがった。追っ手は無い。彼女は額の汗を手の甲で拭くと、近くにあったベンチに腰掛けた。なぜ、彼女はこんなに汗だくなっているのか？

話は一時間前のこと。ミホは家でボーっとテレビを見ていた。するとそこへ、慌しくブルボンがやって来た。

「ミホ、これを見る！」

彼は、ミホの目の前に一枚のチラシを叩きつけた。興奮した様子のブルボンを横目にしつつ、彼女はチラシに目を落とした。見るとそれは求人広告だった。そう、求人広告だったのだが……

「貴様の新しい強制労働先として見つけてきたのだ。見る、日給五万超だぞ！　こんなうまい仕事、他にあるか？」

「陛下……これ、絶対怪しげなバイトですよ。」

日給五万と言うぐらいだ。大体、どんな仕事なのか想像がつく……ミホはチラシをくしゃくしゃに丸めると、ゴミ箱に向って放り投げた。

「何だ？　何が不満だと言うのだ？」

「あんなの、どうせ風俗とかですよ。お金は欲しいですけど、体を売る気はないですよ。」

「馬鹿な、その貧相な体が金になるのだぞ？　結構なことじゃないか。」

「どうせペチャパイですよ……」

ブルボンの言葉にムカツと来つつも、ミホは手をヒラヒラと振って、『NO』の意思を表明した。しかし、ブルボンとしては引き下がる訳にはいかない。せつかく見つけた金の種。今後の帝国の繁栄のためにも、なんとしても彼女に働いてもらわないといけない……

そう考えたブルボンは、強行手段に出ることにした。彼はミホの服の後襟を掴むと、そのまま、ずるずると彼女を引きずりながら家を出た。

「これは『強制労働』だしな。貴様の意思は無視することにしよう。」

「なに、勝手なこと言ってるんですか〜！」

「冗談じゃない」と、ミホはブルボンを突き飛ばした。しかし、その拍子にブルボンの体は前のめりに倒れ、そのまま顔から地面に突っ込んでしまった。ちよつとやり過ぎたか？ そう思つて、ミホが心配そうに近付いた時だった。ブルボンは物凄い勢いで起き上がると、目を血走らせながらミホの腕を掴んだ。

「働いてもらうぞ、絶対に！」

「いやッ！」

ミホは再びブルボンを突き飛ばすと、走り出した……

そう言う訳で、ミホはブルボンから逃げているのである。疲れた

……と、ミホはベンチの背もたれに体を預けた。

「そこにいたか！」

しかし、追っ手に見つかってしまったようである。ミホはベンチから体を起すと、再び走り始めた。

「体は嫌です〜！」

逃げるミホ。しかし、ベンチで休んでいたのが悪かった。温まっていない体は予想以上に重く、スピードが出ない。そして、そうこうしているうちに、すぐ後までブルボンが迫ってきていた。

「捕まえたぞ〜！」

そう言つて、腕を伸ばしてくるブルボン。しかし、「捕まる〜！」と、ミホが体を強張らせながら目を閉じたその時だった。ヒュツと風が頬を撫でたかと思うと、次の瞬間、ゴシツと言う鈍い音が響いた。何かと思つて目を開けてみると、すぐそこまで来ていたはずのブルボンが、数メートル先の地面に横たわっている。そして彼女の

隣には、プラチナ色のアーマーを身に付けた謎の男が立っていた。

「正義の……味方……？」

良く分らないが、格好から判断するに、男はその類の人間らしい……そうミホが啞然としてると、倒れていたブルボンがフラフラと立ち上がった。

「貴様あ、何者だ！」

ブルボンが聞くと、男はミホに「下がっている」と腕で促しつつ、口を開いた。

「私は銀河治安維持機構の調査官18351890号、コード『TM』。お前の行為は、『婦女子略取の罪』に該当する。即刻中止しろ！」

「何だと？ 貴様、このブルボン帝国皇帝、シャレー・ブルボン五世に指図する気か！」

殴られたことで、完全に頭に血がのぼったブルボン。近くにあった鉄パイプを拾うと、それを両手で思い切り振り上げながらTMに襲いかかった。しかし、TMはまったく怯む様子を見せない。それどころか、逆に、腕から青白く輝く光線を発射する。光線が命中すると、ブルボンは岩のように固まってしまった。

「な、何だ？ 体が、動かん……！」

「公務執行妨害もプラスだ。これより刑を執行する。」

TMはそう言っ、動けなくなったブルボンを持ち上げると、そのまま近くにあったゴミ箱に、頭から放り込んでしまった。

「うげえっ、臭ッ！ 生ゴミだ……出してえ〜！」

「ダメだ、そこで頭を冷やしている。」

ポリバケツから足だけを出して、犬神家状態になっているブルボン。TMはそれを確認すると、そのまま空の彼方へ飛び去っていった。

「くそ、まだちょっと、臭いが残っているじゃないか……」

バスタオルで体を拭き終わると、ブルボンは鼻をひくひくさせな

がら顔をしかめた。

「災難でしたね。」

「元はと言えば貴様のせいだろう！ まったく……」

消臭スプレーをかけてくるミホをにらみつけながら言うと、ブルボンは服を着つつ舌打ちをした。

「おのれ、あの男……TMとか言ったか？ この皇帝を、こんな目に遭わせおって……」

「仕方ないですよ。私に変な仕事をさせようとした、陛下の自業自得じゃないですか。」

「黙れ！ どんな理由があろうと、皇帝を生ゴミの中に放り込んで良い道理などあるものか！」

大声で怒鳴りながら、ブルボンは隣にあつた椅子をガンツと蹴飛ばした。

「今度会つたら、皇帝の恐ろしさを教えてやる！」

「やめときましようよ……あの人がごく強かつたですし、また、生ゴミの中に放り込まれますよ？」

「ん？ むう……確かにそうだが……」

ミホの言う通り、このまま正面から挑んだところで、同じ結果に終わることは目に見えている。しかし、このまま黙って改心できるほど、ブルボンは人として出来上がってはいなかった。何としても復讐を！ しかし、自分では無理……考えた末に、ブルボンが行きついた結論……

「よし！ 腕の立つ奴を雇って、そいつにやらせよう！」

「そんな他力本願な……」

そう言う訳で三日後、ミホとブルボンは再び街にやって来た。TMに復讐するために……

「あの、陛下……その人、誰ですか？」

ミホは、あまり聞きたくなかったが、聞いてみた。ブルボンの隣に立つ、見知らぬ男。傷のあるタラコ唇、不細工に潰れた鼻、そし

て金色に染められた短髪。まず、まっとうな人間ではないであろうその男は、サングラスを少し下げて、ギロリとミホの方を見た。

「あのTMとか言う男を始末してもらうために雇った、ドトウ先生だ。」

「そう言うことだ。ま、仲良くしようや、お嬢ちゃん。」

ドトウはそう言うのとペツと唾を吐き、そして、右手で力チャカチャとバタフライナイフを弄び始めた。お友達にはなれそうにない……ミホはただ、啞然としながらそれを見ていた。

「で、その何とかって野郎は、いつ頃現れるんだよ？」

「ん？ えっと……おいミホ、あいつはいつ頃現れるんだ？」

「え？ 知りませんよそんなこと……」

「何だあ？ 現れるかも分からねえのに待ち伏せかよ……じゃあ、そいつの家は？」

ドトウは呆れた表情を見せながら、少しイラついた感じの口調で再び質問してきた。

「ほれ、ミホ！ 先生の質問にさっさと答えろ！」

「ええ？ 知りませんって……」

「てめえら……俺を馬鹿にしてんなら、その辺にしとけよ？」

このドトウと言う男は相当気が短いらしい。彼は弄っていたナイフを握り締めると、その切先をブルボンとミホの方に向けた。

「お、おい、ミホ……先生がお怒りだ。さっさとあいつを連れて来い！」

「し、知りませんって……！」

「死にたいらしいな……」

遂にドトウの目が本気になった。ナイフをベロリと舐めると、ブルボンとミホの方にジリジリと歩み寄ってくる。あまりの恐怖に、二人は互いの体にしがみ付いてガタガタと振るえた。

「すみません……い、命だけは……」

「た、助けてーッ！」

ドトウがもう目の前までやってきた。「絶対に死んだ！」と、思

つたのだが、数秒経っても、ミホの体には何の異変も起こらなかった。どうしたのか？ 不思議に思っ て目を開けると、そこにはプラチナ色に輝く背中があった。

「何だてめえは？」

「私は銀河治安維持機構の調査官18351890号、コード『TM』。お前がしようとしている行為は、『L3殺傷ツール対人使用の罪』に該当する。即刻中止しろ！」

「なんだと？ この野郎、舐めやがって！」

額に血管を浮き上がらせながら、ドトウはナイフをTMのわき腹に突き立てた。しかし、ドトウがいくら力を込めても、ナイフの刃はアーマーに阻まれてしまい、TMの体には突き刺さらない。その隙に、TMはドトウの腕を掴んで捻り上げると、拳で彼の左頬を殴りつけた。

「はぎょッ！」

奇声と共に、歯が数本飛び出した。しかし、TMは手を緩めない。今度はドトウの頭を持って、その顔をブロック塀に押し当てた。

「これより、刑を執行する。『ザラザラの壁で、ジヨリジヨリの刑だ。』」

「ぎゃあああああああああああ！」

ザリザリ……ガリ……という嫌な音と、ドトウの悲鳴が響き渡る。それが数秒ほど続いた後、ようやくTMは、顔面が血まみれになったドトウを開放した。そして、その様子を見ていたブルボンとミホは安堵の溜息を漏らした。

「死なずに済みましたね……」

「うむ……」

ミホの言葉に頷くと、ブルボンは何を思ったか立ち上がり、そしてTMの所まで行くと、そのプラチナ色の肩をポンポンと叩いて、照れ臭そうに口を開いた。

「礼を言うぞ、助かった……」

「む！ お前はの間、女を襲っていた奴！ さては、この男の仲



間だな！」

「へ……？ いや、違……」

「違う！」と言おうとしたが、遅かった。TMの拳は綺麗にブルボンの左頬を捉えた。

「はぎよッ！」

ブルボンの体は勢い良く吹っ飛ばされ、空中に放物線を描いた末にゴミ捨て場に墜落した。ゴミに埋もれて、犬神家状態のブルボン。しかし、元々彼はTMに復讐しようとしていたのだから、自業自得とも言える……ミホは呆れて溜息をつきつつ立ち上がると、TMの元に歩み寄った。

「うちの陛下がご迷惑をおかけして、本当にすみませんでした。」

そう言っ、ミホは頭を下げた。深々と……そんな彼女の肩にポンと手を置くと、TMは優しくミホの体を起した。

「お前も奴らの仲間か！ この悪党め！」

「はぎよッ！」

何で私まで……

鼻血を噴き出しながら、ミホは綺麗な放物線を描いてゴミ捨て場に墜落した……

続く

#### 4・恨みはらさでおくべきか！（後書き）

あ・・・ありのまま、今起こったことを話すぜ！

『ミホとTMが恋に落ちるラストを書こうと思ったらいつの間にかミホがTMにぶん殴られていた』

何を言ってるかわからねーと思うが、俺も何が起こったのか分からなかった。

頭がどうにかなりそうだった・・・

『寝ぼけてた』とか『気が変わった』とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

ってことで

次回は5話です。

## 5・帝国奪還大作戦

女探偵、アマゾノ・ヒサエ……元は、某国で諜報員として働いていた彼女が、職を辞し、自らの祖国に帰ってきて開いたのが、アマゾノ探偵事務所である。『元諜報員』という触れ込みに挽かれて、ここには多くの依頼人が訪れる。今日も一組の男女がやって来た……

「キャロル社の社長、ウカイ・チヨタカの弱みを掴んで欲しい。」

二人のうち、男の方……長身の外国人がそう言った。ヒサエは、口にくわえたタバコライターで火を点け、フウと煙を吐くと詳しい事情を話すように言った。

それより数日前のこと。突如鳴らされたチャイムの音に呼ばれて、ミホは玄関へと向った。そして、急かすように打ち鳴らされるドアを開くと、そこには、高そうなスーツを着込んだ男が立っていた。見覚えのない男である。

「コジマ・ミホ君だね？」

「ええ、そうですけど……えっと、どちら様ですか？」

「これは失礼。私はキャロル社の社長をしている、ウカイと言う者です。今日は、この土地のことで話をしに来たんですよ。」

ひよっとして、「この土地を売ってくれ」とか、そう言う話だろうか？ ミホはそう考えると、首を横に振ってそれを断った。この家は確かに、ミホとブルボンしかないが、彼女の思い出がつまった大切な家なのである。しかし、そんなミホの気持ちを嘲笑うかのように、ウカイと名乗るその男は話を続けた。

「いやいや、君は出て行かなきゃいけないんだよ。」

「へ……？」

「妙な事を言うものだ」と、首を傾げるミホの前に、ウカイは数枚の紙を差し出した。小難しくて良く分からないが、どうやらこの土地に関するものらしい……

「これは、ここの土地の登記簿の写しだよ。ここを見てごらん……  
ここは、土地の所有者の名義を書く所だ。書いてある字が読めるか  
な？」

「キャロル社……って、何で？ 確かお父さんが、私の名義に変更  
していったはずなのに……」

「何言ってるんだ？ この登記移転は、うちの会社と君の代理人と  
の間で正式に行われたものなんだ。知らない訳ないだろう？」

ウカイがそう言ってニヤリと笑うと、後からもう一人の男が出て  
きた。その男は、持っていたカバンからまた一枚の紙を取り出して、  
それをミホに見せた。『委任状』と書いてあり、最後にミホの署名  
と印鑑が押してある。これまた小難しくて良く分からなかったが、  
どうやら、この見ず知らずの男に、ミホがこの土地に関する全権限  
を与えたことになっているらしい。

「そんな……こんなのに判を押した覚えはありません！」

「でも、その署名も印も本物だろう？ だったらそれは正当な書類  
だよ。ってことで、しばらく猶予期間をあげるから、その間に出て  
行ってね。」

それだけ言うと、ウカイは表に停めてあつた黒い高級車に乗り込  
み、砂埃を巻き上げながら行ってしまった。

困ったことになってしまった……ミホは考えた。自分はあの書類  
に署名をし、押印しただろうか？ しかし、いくら考えてもミホに  
は覚えがなかった。とりあえず、一人で悩んでいてもらちが明かな  
いことに気付き、ミホはブルボンに相談することにした。

「貴様、最近何かのアンケートとか、署名に答えた覚えは無いか？」

開口一番、ブルボンはそう聞いてきた。すると、ミホはその数日  
前のことを思い出した。そう言えば、『恵まれない子供達への支援  
に関する署名』というものに、サインをし、印鑑も押した……

「馬鹿め、それは罠だ。おそらく、署名欄に細工がしてあつたのだ  
ろう。」

「詳しいですね……」

「昔、同じ手口で土地を奪ったことがある。」

「それって、人としてどうなんですか？」

「やかましい！ まったく、神聖なる帝国領地を何だと思っているんだ……」

とにかく、権利が向こうにある以上、二人は出ていくほかない。ブルボンは、なんとかウカイに登記の名義を戻させねばと、あれこれ方策を考えた……

「で、私にウカイの弱みを調べさせ、それをネタに彼を脅して、登記を戻せようって訳ね？」

二人の話を聞き終わると、ヒサエはまたタバコの煙を吐いて言った。向い側のソファーでは、ブルボンが踏ん返り返っている。

「そう言うことだ。分かったら、さっさと行け！」

「ちよつと陛下、もう少し、頼む立場としてあるべき態度を取りましょうよ……」

ミホは、ちゃんとするようブルボンに言った。しかし、ブルボンはまったく態度を改めようとしなない。そんな様子を見て、溜息をつきつつ、ヒサエは灰皿にタバコの先をぐりぐりと押し当てた。

「別に良いよ……私は、金だけ貰えればそれで良いからね。」

「それじゃあ、引き受けてくれるんですか？」

「ああ、一週間後にまた来な。それまでには、何かしら掴んでやるよ。」

そう言って、ヒサエは二本目のタバコに火をつけた……

それから一週間後、二人は再びアマゾノ探偵事務所を訪れた。部屋に入ると、先にソファーに座りタバコを吸っているヒサエと、そして、テーブルに置かれたレコーダーが目に入った。何か掴めたのだろうか？ 期待と不安が入り混じる中、二人がソファーに腰掛けると、ヒサエは黙ってレコーダーの再生ボタンを押した。

『社長、お母様からお電話です。』

『マ…… おふくろから？ 分かった。私的な話になると思うから、少し席を外してもらえるかな？』

『かしこまりました。』

聞こえてきたのは、これといって変わったことのない、社長と秘書の普通の会話。これは、ヒサエがキャロル社の社長室に忍び込んで録音してきたものだ。息を吞んで、ミホとブルボンは聞こえてくる音声に耳を傾ける。すると、それからは予想だになかった言葉が聞こえてきた。

『あ、ママ？ うん、僕ちゃんと働いてるよ……え？ うん、仕事も順調だよ。今度ね、ホテルを建てるんだ。建てたらママをスイートルームに泊めてあげるね。うん……じゃあねママ、バイバーイ。』  
ガチャツと電話を切る音……それが聞こえたのと同時に、ヒサエは停止ボタンを押した。どうもウカイという男は、大のマザコンらしい。

「他にも録音はしたけど、弱みと言えそうなのはこれぐらいだよ。」

「フン、十分だ……しかし……」

レコーダーを手に、ニヤリと笑いつつ、ブルボンはヒサエの目を見て続けた。

「貴様には、もう一つ仕事を頼みたい。」

「なんだい？」

ヒサエに、もう一つの依頼を伝えたと、ブルボンとミホは事務所を後にした。

その三日後、ミホとブルボンはキャロル社の社長室にいた。二人と、そしてウカイの目の前には例のレコーダーが置かれ、社長室の一部始終の音声を流している。レコーダーについた、デジタルパネルの再生時間表示が進むにつれ、ウカイの顔色は悪くなっていく。そして問題の部分が終わると、ブルボンはレコーダーの停止ボタンを押した。

「マザコンの分際で、我が帝国の領土を侵害しようとは、ふざけおつて……」

「このことをバラされなくなったら、私達に土地の権利を返してください！」

ミホとブルボンはウカイに詰め寄った。冷汗を一杯にかいて、うつむいたままのウカイ……しかし、彼は突然顔を上げると、ニヤリと笑った。

「バラす？ ハハッ……バラせば良いさ！ 別にマザコンがバレたくらいじゃ、何とも思わないさ！ 何を言われても、ママが守ってくれるからね……それで、他に言うことは？ ご用件が無いようでしたら、お引取りいただけますか？ 何しろ、僕は忙しい身でね……」

開き直り、勝ち誇ったようにそう言い放つと、ウカイは椅子にドツカリと腰掛けて二人の顔を見た。しかし、ウカイの予想に反して、二人はまだニヤニヤと笑っていた。「何だ？」と不審に思い、目をキョロキョロと泳がせるウカイ。それを尻目に、ブルボンがパチンと指を鳴らすと、社長室の扉が開かれ、そこからヒサエと、もう一人の女性が入ってきた。

「ま、ママ！」

「チヨちゃん！ この人達に土地の権利を返して上げなさい！」

そう、それはウカイの母であった。守ってくれるはずのママがミホ達の味方をしている……目の前の光景に、ウカイは完全に動揺してしまった。

「でもママ、こいつらの土地を手に入れたら、そこにホテルが建つんだよ？ ママをスイートに泊めてあげるんだよ？」

「人様に迷惑をかけてまですることじゃありません！」

「だって……」

「もう！ 悪い子はお尻ペンペンですよ！」

「分かったよ！ 返す、返すよ！ だからペンペンしないでえ……」  
右手を振りかぶるママに怯え、椅子から転げ落ちたウカイ。どう

やら一件落着らしい……ミホは、安堵と疲れの大きな溜息をついた。それと同時に、「もう、迂闊な署名と押印はやめよう」と、心に誓うのであった。すると、そんなミホの所にヒサエが笑いながらやって来た。

「お疲れ。なんとか土地が取り戻せて良かったね。」

「ははは……ヒサエさんのおかげです。」

「なに、私は金のためにやっただけだよ……」ってことでコレ、今回の報酬の請求書だから。月末までに、私の口座に振り込んでおいてね。」

ミホの前に差し出された請求書。しかし、それを見てミホの顔は凍りついた。とてもミホに払える額ではない。しかし、元々「探偵に頼もう」と言い出したのはブルボンである。ブルボンが、ちゃんとお金を用意しているのかもしれない……そう思っ、ミホはブルボンに請求書を渡した。しかし、それを受け取って見たブルボンも、同じく顔が凍りついてしまった。

「ミホが払うんだろ？」

「探偵に頼もうって言ったの、陛下じゃないですか！」

「まさか……払えないってんじゃないだろうね？」

突然のどす黒い声に二人が振り返ると、そこにはタバコ三本を同時に吸いながら、額に血管を浮き立たせるヒサエがいた。ヒサエは二人の顔をジロジロと見比べると、全ての事情を察し、ギョツとタバコのフィルターを噛み締めて怒りを露にした。そして、「そう言うことならば」と、クルツと体を反転させ、今度は、母親にお説教されているウカイの方を見た。

「ちよいと、あんちゃん！ 悪いけど、登記の名義は私に変更してちょうだい。」

「そ、そんな！」

すがりつくミホとブルボン。しかし、ヒサエはそんな二人をギョリとにらみつけると、タバコの煙を吹きかけた。

「ああ？ 金払ったら戻してやるよ……払わなかったら、売っ払っ



ちまうからね！」

ブルボン帝国の領土が二人の手元に戻るのは、  
まだまだ先の話で  
ある……

続く

## 5・帝国奪還大作戦（後書き）

つてことで第5話でした

登記・・・

難しい言葉ですが土地の権利だと思つて下さい。

ちよつと違いますけど・・・それで十分です。

何だか難しいこと言つてやがんなー

ぐらいに思つていただければ結構です。

話は変わりますが皆さんのお腹まわりはどうですか？

私は正月ずつとごろごろしていたので

贅肉だらけになりました^^；

ビューティフル・マイ・ボデイ！

カム・バック！

運動しよ・・・・・・・・・・本当に・・・

## 6・あの子がいた幽霊屋敷

日が西に傾き始めた午後の街の中を、ミホとブルボンは並んで歩いていた。二人は、ミホのアルバイト……例の如く、ブルボンによる強制労働の帰りである。ブルボンはフツとほくそ笑むと、懷から報酬の入った封筒を取り出して、その中身を数えようとした。しかし、その時だった。物陰から、突然男の子が飛び出してきたかと思うと、彼はブルボンから封筒を奪いとして走り去ってしまった。

「あの小僧！ 追いかけるぞミホ！」

せつかくの報酬を奪われては堪らない……二人は慌てて、男の子を追いかけた。彼が曲がったのと同じ角を、二人も曲がる。するとそこには、真っ直ぐに伸びる美しいイチヨウの並木道が姿を現した。そして、その先には走る男の子の姿が見える。二人は腕を一杯に振って、その背中を追いかけた。しかし、この男の子がなかなか速い。二人が一生懸命追いかけても、追いつくことができなかった。

「くそっ……絶対に逃がすなよミホ……」

「陛下、情けないですよ！」

ブルボン、途中棄権……息が上がってしまった彼の代わりに、ミホは必死に男の子を追いかけた。しかし、並木道の先に、ぽつんと建っている屋敷の前まで来た時だった。男の子は何を思ったのか、突然ピタッと立ち止まってミホの方を振り返った。ミホは彼の所まで辿り着くと、額や首筋の汗を手で拭ってから男の子を見た。年の頃、七・八歳と言ったところだろうか？ こんな子供が、何のためにお金を盗ったのだろうか？

「返して欲しい？」

ミホが、息を整えながら考え込んでいると、男の子は突然そう尋ねてきた。

「返して欲しいの？」

「うん、それはお姉ちゃんのお金なの。良い子だから返して。」

「ミホは、できる限り優しい口調で男の子に言った。すると、男の子はニツと笑うと、封筒を握った手を背中の方にまわし、胸を張るようにしてから再び口を開いた。」

「良いよ。でもその代わり、僕のお願いを聞いてよ。」

「お願い？」

「どうやら、彼が封筒を奪ったのは金のためではなく、『お願い』を聞いて欲しかったから」であるようだ……ミホは、男の子に目線を合わせるようにしやがみ込むと、お願いの内容を尋ねた。すると、男の子は目の前にある古びた屋敷を見た。立派な屋敷だが、外壁にはツタが伸び放題で、それに、所々崩れかかっている。窓ガラスにもヒビが入っているし、人の気配もまったく無い。どうやら廃墟らしいその屋敷をしばらく眺めると、男の子は突然、胸の前で両手をだらりと垂らしてミホを見た。

「ここ……出るんだよ……」

「出るって……何が？」

「決まってるじゃん。幽霊だよ……」

彼は低い声で、ミホを脅かすように言った。

「何が幽霊だ、馬鹿馬鹿しい！」

その時、遅れてブルボンもやって来た。ブルボンは、屋敷を眺めながらそう吐き捨てると、男の子の胸倉を掴んでぐいっと持ち上げた。た。

「ごちゃごちゃ言っでないで、私の金を返すんだ！」

「まあまあ、相手は子供じゃないですか……それで、その幽霊がどうかしたの？」

ブルボンから男の子を取り上げて、地面に下ろしてやると、ミホは話を続けるように言った。しかし、男の子は急にシュンとしてしまい、そして、哀しげな瞳で屋敷を見つめると、その重い口を開いた。

「ここには、この間まで僕の友達が住んでいたんだ……」

男の子の話では、その子の名前はセイコと言って、重い病気のせいで外で遊ぶことができず、屋敷に遊びに来るこの男の子が唯一の遊び相手だったそうだった。しかし、そんなある日、屋敷に異変が起った。

「突然、悪い幽霊がやって来て、セイコちゃんと家の人達をどこかに隠しちゃったんだ。そして、あの家を自分の物にして住みついてるんだよ。」

「嘘臭い話だな……」

「それで、私達にどうして欲しいの？」

「僕はセイコちゃんに会いたいんだ！　お願いだよお姉ちゃん。悪い幽霊をやっつけてよ！」

男の子はミホの服の裾を引っ張りながら、すぐるように言った。

しかし、ミホは困ってしまった。「やっつけてくれ」と言われても、ミホはエクソシストでも、陰陽師でもないのだ……「どうしたものか」と、ミホはブルボンを見た。すると、ブルボンはフンと鼻で笑い、門をくぐると屋敷に向って歩き始めた。

「馬鹿め、このブルボンがそんな戯言を信じると思ったか？　そいつの妄想に過ぎん！　中を見てきて、何も無かったら、大人しく金を返せよ、小僧。」

そう言っ、ブルボンは扉を開き、屋敷の中へ消えていった……と、思いきや、一分としないうちに、ブルボンは顔を真っ青にしなから外に出てきた。

「帰るぞ……」

どうやら『何か』見たらしい……ミホは急に恐くなってしまい、男の子を見た。しかし、男の子は目に涙を浮かべて、ミホを見てくる。「恐いから嫌だ」とは言えそうにない……ミホは意を決して屋敷に向うことにした。しかし、ブルボンは大反対である。ミホの腕を掴むと、彼女を引っ張ってイチヨウ並木を引き返そうとした。

「何だよ！　大人だろ！」

そんなブルボンの前で、両手を広げて『通せんぼ』をしながら男

の子は言った。しかし、ブルボンは歩みを止めない。

「霊能力者に頼めばよからう！ 我々を巻き込むな！」

「お金返してやんないぞ！」

どうしても帰ろうとするブルボンに向って、男の子は封筒を掲げながら言った。忘れていた……ブルボンはピタツと足を止めて、封筒を取り返さねばと、男の子の方を見た。しかし、男の子はそうはさせじと、封筒をポケットにしまい、近くにあったイチヨウの木を、天辺までするすると登っていつてしまった。

「幽霊をやっつけてくれたら、返してやる！」

男の子はそう言って木にしがみついた。下りてくるよう言っても、頑として首を横に振るばかり。どうやら、幽霊屋敷に行かざるを得ないらしい……二人は溜息をついた。

中は薄暗かった。扉や窓から差し込む光のおかげで、何も見えな  
いということは無かったが、その微妙な明るさ加減が余計に二人の  
恐怖を煽った。さっさと終わらせて出よう……そう考えると、ミホ  
はブルボンを見た。

「さっき、幽霊見たんですよね？ どこにいたんですか？」

「あそこだ……あの部屋の中にいたぞ。」

ミホの背中にピツタリとくつついたまま、ブルボンは右前方にあ  
る扉を指差した。扉はほんの少しだけ開いていて、まるで二人を手  
招きしているかのようにだった。ゴクリと生唾を飲んで、ミホはドア  
ノブを握った。

「お邪魔しまーす……」

恐る恐る扉を開くと、目に入っただのは大きな長テーブルとたくさ  
んの椅子。食堂のようだ……ミホは、暗い部屋の中を見渡した。す  
るとその時、ミホはテーブルの陰にソレを見つけた。

「いたぞミホ！ あれだ！」

ブルボンは、ミホの肩を掴んだ手に、ギュツと力を入れながら言  
った。すると、向こうもこちらに気がついたのか、フラリと立ち上

がり、こちらに向ってゆつくりと歩いてきた。顔が隠れるほど長い髪を垂らし、白い服の裾を、引きずりながら……

「臨兵闘者皆陣列在前！」

ミホは気合を入れると、九字を切った。しかし、ソレは歩みを止めることなく、依然二人に近付いてくる。

「効いてないじゃないか！」

「おかしいな、テレビではこれで消えてたのに……」

そうこうしているうちに、ソレはもう、二人に数歩の所まで迫ってきていた。

「悪霊退散！ 南無妙法蓮華經！ アーメン！ 消えませえん……」

「この役立たずめ！」

チツと舌打ちをすると、ブルボンはミホを突き飛ばした。そして踵を返すと部屋を飛び出し、一目散に逃げ出してしまった。

「そいつは生贄だ！ 私の代わりに、そいつを呪ってくれ！」

「へ、陛下！ 待つて、置いていかないで……」

自分も逃げなくては！ ミホは急いでその場から立ち去ろうとした。しかし、腰が抜けてしまつて動けない。「動け！」と必死に力を入れてみるが、脚はまったく言うことを聞かない。そして、そうこうしているうちに、気がつく、ソレはもうミホの目の前に立っていた。髪の間隙から覗く生気の無い眼でミホを見つめながら、スー……と、腕を伸ばしてくる。

「きやああああああああッ！」

「叫ばないでよ……大丈夫？」

思つてもみなかつた言葉がかけられた。ハツとして見ると、ソレは、顔にかかった髪の毛をさつとかき上げて後の方で結び、青白くやせ細つた顔に笑顔を作つて見せた。

「に、人間……？」

「ああ、僕はホラー作家のタニノチ・カラスって言う者だよ。」

姿勢好は幽霊にしか見えないが、しかし、ミホを抱き起こしたそ

の手は確かに温かった。

「何でそんな格好を？」

「うん、面白いホラー小説を書くために、まず、自分が幽霊になつてみようかななんて思つてね。そしたら、ちょうど幽霊屋敷みたいな空家を見つけたもんだから、引越してきたって訳さ。たまに勝手に入ってくる人達を脅かしたりして、生活してるよ。」

「人騒がせな……」

ミホはハアハアと溜息をついた。しかし、そうになると、あの男の子が言っていた話は何だったのだろうか？ 前に住んでいたセイコちゃんとその家族は？ ミホは気になって、タニノチに聞いてみた。「それはおかしいな。不動産屋の話だと、前の人が住んでいたのは十年前も前ことらしいけど……その男の子って、何歳なの？」

「え？」

いよいよ話がおかしくなってきた。ミホはとりあえず、男の子に話を聞いてみようと思ふと屋敷の外に出た。しかし、そこにいたのは封筒を持ったブルボンだけ……ブルボンが言うには、出てきた時にはもう、封筒だけ残していなくなっていたそうだ。

「まあ、金さえ置いていけば、文句はないがな。ほれミホ、もう帰るぞ。」

イタズラ……？ ミホは釈然としなかったが、仕方なく帰ることにした。

そんなことがあつてから、何日もして、ミホの記憶からもそのことが消えようとしていたある日、ミホは街で妙な噂話を耳にした。イチヨウ並木の道の先に、ぽつんと建っている屋敷の話である。

その家には女の子が住んでいた。女の子は重い心臓病で、外で遊ぶこともできず、友達もいなかった。そんなある日、女の子は屋敷の庭に迷い込んだ男の子と仲良しになった。男の子はそれから毎日のように女の子の元を訪れ、二人でいっしょに遊んだ。しかし、ある時突然、男の子が来なくなってしまった。風邪でも引いたのか？



大きな怪我でもしたのか？ 女の子は心配したが、それでも男の子は来なかった。結局、それから一週間後、女の子は心臓移植を受けるため外国に引っ越すことになってしまった。

男の子の方はどうしていたのか？ 実は、女の子の家に行く途中で交通事故に遭い、そのまま亡くなっていたのである。だから今でも、あのイチヨウ並木の道では、男の子の霊が、その女の子を探して彷徨っているのだと言う……

続く

## 6・あの子がいた幽霊屋敷（後書き）

恐ッ！

いや、皆さんは恐くなかったかもしれませんが  
部屋で一人この小説を書いていた私の身にもなって下さいよ。  
時々後に気配が・・・

（（（（（；。）。））））

恐ッ！

靈感無くても怖いもんは怖いです。  
そして冬なので冷房は要りません！

幽霊さん！

ノーサンキュー！

ってことで7話に続くのです。

## 7・下衆の好むレストラン

「美味しいな．．．．．」

ナイフとフォークを巧みに操りながら、ブルボンはニヤリと笑った。ステーキ、サラダ、オムレツ、スープ．．．．．目の前では美味しそうな料理達が、真っ白なテーブルクロスの上を彩っている。「貴様もこれぐらいの物を毎日作れ。」

「無理ですよ．．．．．私はプロの料理人じゃないんですからね。」

「ミホはそう言いながら、フォークの先で踊っている肉を口に運んだ。やはりプロの業は違う．．．．．」

ミホの街から、電車で片道四十分の所にある都市『オオクス市』。二人は今日、その一角にある洋食店に来ていた。ことの発端はブルボン．．．．．「貴様の陳腐な料理は飽きた」などと、わがままを言いだしたのだ。そこで、ミホが提案したのがこの洋食店『サドラーズ・ウェルズ』である。十六歳の頃から西方諸国の料理を勉強して来たオーナーが、その持てる技術を全て注いで作り上げたメニューを、リーズナブルな値段で楽しめるとあって人気の店である。皇帝だったブルボンの舌を納得させ、かつ負債を抱えた家計にダメージを与えずに済む店はそこしかない．．．．．そう言う訳で、二人はサドラーズ・ウェルズに夕食を食べにやって来たのである。「フン、下衆どもに人気の店にしては、なかなかの味だったな．．．．．気に入った。」

「そうですね。また来ましょう。」

食後に出されたコーヒーのカップを置くと、二人はお腹をさすって笑いながら席を立った。そして、伝票を持って会計に向くと、笑顔の店員がレジを操作して金額を告げた。

「あれ．．．．．」

しかし、財布を開いた瞬間、ミホの顔は凍りついた。金が足りない

い……昨日確認した時は、確かいくらかの余裕があったはずなのに……。「まさか」と思い、ミホはブルボンを見た。「うむ、昨日『ゲーセン』とやらで、少々遊戯を興じたからな。貴様から資金を拝借したのだ。」

「なに勝手に人のお金使ってるんですか！」

「うるさい奴だな……ここに来る前に財布を確認しなかったお前が悪いんだろうが。」

「もう、勝手なことばかり言ってる……銀行に行ってきたから、ここにいて下さいね？」

ミホはそう言って、苦笑いする店員に頭を下げると、そそくさと銀行に向った。

銀行の前までやって来たは良いが、そこには人の壁が出来上がっていた。銀行に入りたのに、何事だろうか？ もみくちゃにされながらも、ミホは押し寄せる人の山を掻き分けて突き進んだ。そして、ようやくそれを抜けだすと、ミホの前に驚くべき光景が現れた。「銃を捨てて、大人しく投降しろ！」

「馬鹿め、この人質がどうなっても良いのか？」

たくさんの警察官達と、女性に拳銃を突き付ける覆面男が対峙している。とてもじゃないが金をおろせる雰囲気ではない。ミホは仕方なくコンビニのATMを使うことにした……。しかし、やっとATMを設置しているコンビニを発見し、入ろうと思った時だった。突然、ミホを突き飛ばすようにして、数人の男達がコンビニに駆け込んだ。

「我々はコンビニ強盗団『マンハッタンカフェ』だ。この店のレジ、金庫、ATM、全ての現金を差し出してもらおう……。」

そう言って男達は銃を取り出した。

「この街、強盗多すぎ……。」

ミホは泣く泣くサドラーズ・ウェルズに戻ることにした。

「そうですか、お支払いができないと……」

「はい……すみません……」

店に戻ると、オーナーがミホを出迎えた。オーナーは事情を聞くと、口ひげの生えた顔に優しそうな笑顔を作った。

「では、いかがでしょう？ 料金の分、皿洗いをしていただくと言うことでは？」

「うむ、それが良い。しっかり励めよ、ミホ。」

ブルボンはミホの肩をポンと叩いてそう言うのと、そのまま店を出ようとした。しかし、オーナーはそんなブルボンの腕を掴むと人差し指を左右に振りながら、舌でチツチツと音を立てた。

「皿洗いはお二人でお願いします。」

「何だと？ 私はブルボン帝国皇帝、シャレー・ブルボン五世だぞ？ 皿洗いなんぞ出来るか！」

そう言つて、ブルボンはオーナーの腕を払いのけると、そのまま出口に向つてズンズンと突き進んだ。それを見て「やれやれ」と溜息をつくと、オーナーは右手で指をパチンと鳴らした。すると、それを聞きつけて、店の奥から坊主頭の男とドレッドヘアの男……二人の黒人が出てきた。二人とも二メートルはあろうかという大男で、黒いスーツとサングラスでビシッと決めている。

「お連れ様だけ置いて食い逃げとは……エルコ、ウンドル、懲らしめて差し上げなさい！」

オーナーが指示すると、まず坊主頭のエルコが飛び出した。エルコはバンツと地面を蹴つて飛び上がる。そして、そのままブルボンを飛び越して、その目の前に立ち塞がった。

「何だ貴様は？」

「クイニゲ、ヨクナーイ！」

エルコはそう言つと、ブルボンに強烈なキックをお見舞いした。

「ぐえっ！」とうめき声を上げて、ブルボンは後に吹き飛ばされる。

「クイニゲ、ヨクナーイ！」

吹き飛ばされてきた体をキャッチしたのは、ドレッドヘアのウン

ドルだった。ウンドルはブルボンの服をぐいと掴むと、そのまま背負い投げを仕掛けてブルボンを地面に叩きつけた。

「クイニゲ、ヨクナリー！」

エルコもそこに合流し、二人で再度同じことを言う。それから二人は、目を回しているブルボンの体を抱え上げると、そのまま厨房へ連行していった。

結局、ミホとブルボンは二人で皿洗いをする事になった。二人に与えられたノルマは一人五十枚。スポンジに洗剤を染みこませると、ミホはせつせと皿を洗い始めた。いつも家でやっていることなので、十枚・・・二十枚・・・と、あつと言う間に皿を磨き上げていった。しかし、ブルボンはそうもいかなかった。皇帝という地位にあった上、幼少から甘やかされて育ったので、皿洗いをするのは今日が初めてだった。

「全然終わってないじゃないですか・・・」

ミホのノルマは後少し。しかし、隣のブルボンはまだ八枚しか洗い終わっていないかった。

「うるさい奴だな・・・結構難しいんだよ。」

「全然難しくないですよ！ もう・・・ちよつと見ててください。」

ミホはお手本を示しながら、ブルボンのトロくさい作業にダメ出しを始めた。ブルボンは、時折舌打ちをしながらそれを聞いていたが、それでも効果はあったのか、ブルボンの作業スピードはみるみる上がっていった。

「まったく、この皇帝が『皿洗い』如きにてこずらせられるとはな・・・」

「日頃やってないからですよ。これに懲りて、今度から少しはお手伝いしてくださいね。」

「フン！ 誰がするか！」

ブルボンは鼻で笑ってそう言った。しかし、ミホにはそれがいつ

ものブルボンではないように感じられた。ブルボンの眼光はいつもと違い、どこことなく弱々しい……。それに、背中を丸めて目の前の皿と格闘するその姿は、いつも威張り散らしているそれよりもかなり小さく見える……。そう、今までで一番小さく……

「少しは庶民の苦労も分かりましたか？」

ブルボンに問いかけながら、ミホはクスツと笑った。

「誰が……。って、おい。」

そしてブルボンの返答を聞かないまま、ミホは彼のノルマから半分ほど皿を取り上げて、それを自分の方の流し台に移した。

「さつさと終わらせて帰りましょう。」

そう言って笑うと、ミホは皿を洗い始めた。ブルボンは、そんなミホをしばらく不思議そうに眺めていたが、自分も早くノルマを済ませてしまおうと、何も言わずに作業を再開した。そして、それから十分ほど経った頃、二人は全ての皿を洗い終えた。すると、調度その時、オーナーが二人の様子を見るためにやって来た。

「終わったようですね。お二人ともお疲れ様でした……。」

そう言ってニツコリ笑うと、オーナーは二人のためにコーヒーを淹れた。二人は椅子に座ってホツと溜息をつくと、コーヒーカップを受け取った。

「一仕事終えた後のコーヒーもなかなか美味いな。」

「家でもお手伝いしてくれたら、コーヒーぐらい出しますよ?」

「やっぱ、何もしてない時に飲むコーヒーの方が美味いな……」

「何ですか、それ……。」

二人はフツと笑って、またコーヒーを一口飲んだ。しかし、そんな二人の横で、オーナーはジロジロと二人の洗った皿を見ていた。ブルボンの洗った皿と……。ミホの洗った皿……。それを交互に見比べると、オーナーはあることに気がついた。

「ミホ殿の洗った皿よりブルボン殿の洗った皿の方が少ないのです

が………」

「ああ、それは………」

それは、ブルボンの方からミホが善意で取って洗った分……。  
しかし、ミホがそう説明する前に、オーナーの右手の指は打ち鳴  
らされていた。再びエルコとウンドルがやって来る……。

「自分のノルマを人に押し付けるなど言語道断！ エルコ、ウンド  
ル、懲らしめて差し上げなさい！」

「ま、待て！ これは誤解だ！」

弁明しようとするブルボンだったが時すでに遅し……。エ  
ルコとウンドルはブルボンに襲いかかった。

「イジメ、カッコワルイ！」

「カッコワルイ！」

「ぎゃあああー！」

その悲鳴を聞きながら、ミホは初めてブルボンに対して「申し訳  
ない」と言う気持ちを抱いた……。

続く



## 7・下衆の好むレストラン（後書き）

7話でした。

すっかりお正月ボケも治った今日この頃・・・  
どうでしょう？

正月が終わって一段落つてところなのに節分とバレンタイン。  
日本ってどんだけイベント好きなんでしょう？

まあ、一人暮らしで恋人もない私には関係ないですけどね・・・  
小説のネタにはなりますけど^^；  
とりあえず、節分が先ですか？

鬼は外！ 福は内！

鬱は外！ ネタは内！

ってことではがんばりたいですね。

## 8・皇帝陛下は二人いる

その飛行機は、ゆっくりと高度を下げながら、白く光る滑走路に降りたつた。

「陛下、ヤポンに到着いたしました。」

「そうか、分かった。」

『陛下』と呼ばれたその青年はシートから立ち上がると、敬礼する搭乗員達に労いの言葉をかけつつ、歓迎の拍手とカメラのフラッシュが待ちうける機外へと出ていった。

ミホは、とあるホテルにいた。ブルボンが強制労働のために用意したバイト先である。仕事内容はパーティ会場のセッティング。給料の割りに楽な仕事だと、軽い気持ちでやって来たミホだったが、その予想に反して現場には緊張感が漂っていた。ホテルに着くやいなや、「持ち込み不可」と言われて私物のバッグや財布を取り上げられ、金属探知機を通された上に、裸にされて身体検査までされた。そして、それが終わると今度は作業着を支給され、それに着替える。と私服もどこかへ持っていかれてしまった。仕事にしてもそうだった。内容はただのパーティ会場のセッティング。ミホの予想していたような仕事内容だった。しかし、予想と大きく違ったのは、何をするにしても黒服の男達の厳しい監視の下に行われ、トイレに行くにも、仕事仲間と会話するにしても逐一チェックされたということだった。

「ミホちゃん！ 休憩に入って良いわよ。」

そんな厳戒体制の中の作業だっただけに、その言葉がかかった時、ミホは本当にありがたいと思った。しかし、休憩の時も自由に行動できる訳ではなく、指定された場所で、渡された弁当を食べるくらいしかできなかった。

「おい、ちゃんと働いているか？」

「え？」

突然やって来たブルボンに、ミホは驚いた。これだけの警戒・・・ブルボンがホテル内に入ってこれるはずがないからだ。

「招待状を持つている奴を見かけてな・・・ありがたく頂戴したのだ。」

「それ・・・大丈夫なんですか？」

あとでバレたらどうなると思っっているのか・・・ミホは呆れて溜息をついた。

「それにしても、何のパーティなんですか？　なんだか凄く物々しい雰囲気ですけど・・・」

「さあな・・・時給の所だけ見て応募したから分かん。」

「ちゃんと読みましょうよ！」

ミホはまた大きな溜息をついた。しかしその時、ミホは自分達の方に近付いてくる男に気が付いた。それもただ者とは思えない。オリーブ色のベレー帽と、同じ色の長いコートを着込んだ強面の男だ。男は二人の所までやってくると、ブルボンの肩をポンポンと叩いた。「失礼ですが、招待状を拝見できますかな？」

「ん？　ああ、良いぞ・・・」

その声に振り返ったところで、ブルボンは硬直した。男に見覚えがあったからだ。男の方もブルボンに気が付いたのか、驚いたような表情を見せた。

「貴様、ブルボン！」

「そう言うお前は、マグニテの近衛隊長！　何でお前がこんな所に・・・」

「当たり前だろ！　このパーティはヤポンの首相が新皇帝のルドルフ様を歓迎するために開いたパーティなんだからな。そんなことより、なぜ貴様がここにいる？　さては、ルドルフ様に危害を加えるつもりだな！」

「ま、待て！　私はちゃんと招待状を・・・」

ブルボンは懷にしまってあった招待状を取り出すと、胸倉を掴ん

でくる近衛隊長に見せつけた。しかし、近衛隊長はフンと笑ってそれを取り上げると、胸に提げていた笛をピーツと鳴らした。すると、隊長と同じ格好の衛兵達がぞろぞろと集まってくる。

「貴様のような奴が招待される訳ないだろう。それにさっき、『変な男に招待状を奪われた』と受付に泣きついている客を見かけてな犯人を捜していたところだったんだよ。」

近衛隊長はそう言うと、右手をすっと上げた。それを合図に、衛兵達は一斉にブルボンを取り囲む。

「頼むよ隊長、見逃してくれ！ お前と私の仲じゃないか！」

「フン、貴様のようなクズと友情の契りを交わした覚えはない。さて、どうしてくれよう？」

「近衛隊長。どうした、何をしている？」

突然の声に近衛隊長が振り返ると、そこには側近を何人も引き連れた青年が立っていた。その姿を見ると、近衛隊長はピンと姿勢を正し、青年に向って敬礼をした。青年の名前はシン・ホーリー・ルドルフ。若干二十歳にて、マグニテ帝国第十六代皇帝に即位した男である。

「ご報告いたします！ 招待客を装い侵入した者を捕らえたところ、先皇帝シャレー・ブルボン五世でありました！」

張りのある声で隊長がそう言うと、ルドルフは驚いた。そんな彼の目の前に、ブルボンが引きずり出される。その憎き顔を目の当たりにすると、ルドルフの周りの側近達は顔を見合わせ、ヒソヒソと話を始めた。そして、そのうちの一人がルドルフに近付くと、耳元で囁くように言った。

「陛下、奴は政権を下ろされたことで陛下を恨んでいるはず。放っておけば必ずや陛下に危害を加えるでしょう……そうなる前に処刑すべきです。」

ブルボンの性格を考えれば、側近の判断は当然だった。しかし、その言葉にルドルフは難色を示した。

「命まで取らなくとも良いのではないか？」

見ると、皇帝だった頃に比べ、ブルボンの装いは随分と質素になっていた……。ルドルフはそれを見て、ブルボンがしているであろう苦勞のことを想った。しかし、側近はその言葉を聞くと、さらに表情を険しくした。

「陛下！ 我々は、その陛下のお優しい心を大変慕っております。しかし、これは陛下を思つてこそのご進言！ 私は長い間あのブルボンに仕えた身であります故に、あの男のことは熟知しております。生かしておけば、奴は必ず陛下を逆恨みし、復讐にやつて来るでしょう。そうなる前に陛下、時には心を鬼にしてくださいませ！」

その言葉を聞くと、ルドルフは困った顔でアゴに手を当てた。そして、どうしたものかと考える。ルドルフは血を見るようなことは好きではない。ブルボンに対してクーデターを起した時も、彼はブルボンの処刑に反対だった。しかし、臣下達が自分を心配してくれていることも、彼は良く良く分かつていた。そして、そんな臣下達に、いらぬ心配をかけさせたくないと言う思いも確かにあるのだ。どうしたものか……

「何だ、小娘！ ルドルフ様の御前であるぞ！」

そんな中、衛兵達の間をすり抜けて、一人の少女がルドルフとブルボンの間に割つて入った。ミホである。彼女はルドルフの前にひざまずくと深々と頭を下げた。

「すみません！ 陛……じゃなくて、ブルボンは責任を持つて、二度と悪いことをしないように、私がちゃんと保護します！ だから、命だけは勘弁してあげてください！」

ミホはそう言つて、また深々と頭を下げた。衛兵達も側近達も、そしてルドルフもキョトンとした。「帝国の癌」と謗られ、自分達が憎み憎んだ暴君のために、頭を下げて命乞いをする人間がいるとは……

「君の名前は？」

ルドルフは、静かな口調で尋ねた。

「コジマ・ミホと言いま……。申します。」

「先皇帝とはどういう……？」

「えっと、私の家に居候してて、その『ブルボン帝国』で……・それで、陛下が皇帝で、私は臣民です。」

パニツクになりながらも、ミホはそう説明した。すると、今度はルドルフではなく、側近が口を開いた。

「今、『ブルボン帝国』と言ったか？ いつの間に建国した？ 規模は？」

威圧するような口調で、側近は急きたてるように問いただした。

ミホはその声にビクツとしながらも、それに答えた。

「人口は、二人です。陛下と私と……広さは、私のお家です。あ、でも、今は名義がアマゾノさんになってます。その、探偵の報酬が払えてなくて……」

しどろもどろに説明すると、衛兵達や側近達からどつと笑い声が起こった。当たり前である。人口がたったの二人で、国土が家一軒分で、さらにその国土も他人の名義になってしまっている国家など聞いた事がない。皆、腹を抱えて大笑いした。そして、そんな皆の様子を見ると、ルドルフはフツと笑って口を開いた。

「皆、分かっただろう？ この男はもう完全に力を失ってしまったんだ。『ブルボン帝国』なんてママゴト遊びをするのが精一杯だから、殺す必要はない！」

「しかし、陛下！」

「いや、これで良い。それに、『たった二人の帝国』に怯えているようでは、マグニテ帝国皇帝の名が泣くだろう。それとも、お前は私のことを、そんなに器の小さい男だと思っているのか？」

低い声でルドルフは言った。すると、側近の男は何も言えなくなっ

つてしまい、そして溜息をつくと近衛隊長の方を見た。

「隊長、放してやれ。」

「よろしいんですか？」

「構わん。陛下のご命令だ……」

側近がそう言うと、衛兵達は少し躊躇いがちにブルボンを開放し

た。ルドルフはホツと胸をなでおろす。

目の前では、放心状態のブルボンにミホが駆け寄って声をかけていた。優しい人だ……。ルドルフはミホを見ながらそう思った。これだけの衛兵達の中、ブルボンのような人間のために出てこれる強い心の持ち主……。ルドルフはミホのことがえらく気に入った。

「ミホ殿と言ったかな？　ちょっと良いかい？」

ルドルフは、ミホに声をかけた。

「良かったら、これからいっしょにパーティに参加してくれないかな？」

「ええ！　私ですか？」

ミホは驚いて、大きな声で聞き返した。

「いやね、せっかくのパーティなんだし、女性のパートナーが欲しいな……。なんてね。」

そう言うのと、ルドルフは指で鼻の下をこすりながら笑った。しかし、ミホは「とんでもない！」と首と手を横に振る。

「私、パーティなんて出たことないし。出るような身分でもないし。衣装だって……。」

しかし、ルドルフはミホの言葉を皆まで聞かず、彼女の目の前にひざまずくとその手を取った。

「お願いします、ミホ殿。あなたと一緒に来て欲しいのです。」

「こな……。小娘ですよ？」

「私だって、まだ二十歳の『若造』ですよ。」

ルドルフはフツツと笑いながらそう言って、そして侍女を呼びつけると、ミホにドレスを見立ててやるように言いつけた。侍女はルドルフに礼をすると、困惑気味のミホを連れて衣装部屋へと向った。ルドルフの方もミホを笑顔で見送ると、その場を後にした。側近達や衛兵達も、「めでたい、お妃様の誕生だ」などと言って笑いながらそれに続いた。

残されたのはただ一人……いまだに放心中のブルボンだ  
けであった。

続く



## 8・皇帝陛下は二人いる（後書き）

ってことで8話なんですが、このストーリーは次回に続きます。

ミホはお妃様になってしまうのか？

忘れられたブルボンはどうなってしまうのか？

それは次回のお楽しみ・・・・・・・・

ってことで、二月です。

フェブラリーです。

私の中では一年で一番地味な月なんですけど・・・・・・・・

どうでしょう？

一月～十二月まであって、そのうち一番派手な月と地味な月を選ぶ  
としたら？

皆さんのベストマンズはいつですか？

ちなみに私のベストは八月です。

なぜか？

うゝん・・・・・・・・

わがんね^^;;

何となく好き！

## 9・シンデレラを恨まないで

ミホは鏡を覗き込んだ。そこに映っているのは間違いなくミホ。しかし、彼女はなんだか、それがまったく別の誰かであるように思えて仕方がなかった。鏡の中のミホは、髪の毛を綺麗にセットされ、薄く化粧をしていて、桜色のドレスに身を包んでいる。まるで、どこぞのお姫様のようだ。

「ミホさん。」

彼女が鏡の中のお姫様に見とれていると、コンコンというノックの音、そして扉越しにルドルフの呼ぶ声が聞こえてきた。彼女はハッとして我に返ると、いそいそと扉を開けに向った。

「そろそろ時間ですので、お迎えにあがりました。」

ルドルフは出てきたミホを見ると、優しく微笑んでそう言った。しかし、ミホは彼の顔を見ると、パッと目を背け、そしてモジモジとし始めてしまった。

「私、変じゃないですか……？」

そう尋ねながら、彼女は不安そうに視線をルドルフに戻した。そんなミホの言葉に、ルドルフは一瞬目を丸くしたが、しかし、再び笑顔を作ると彼女の手を取り、それに口付けをした。

「大丈夫、とてもお美しいですよ。ドレスも良くお似合いです……さあ、参りましょう。」

顔を紅く染めたミホの手を引いて、ルドルフはパーティ会場へ向かっていった。

「ん？ あ……？」

ブルボンは辺りを見回した。ついさっきまで、マグニテの衛兵達に取り囲まれていたはずなのに……人っ子一人いない。放心状態だったのであまり記憶に無いが、彼の耳には確かに、「処刑、処刑」と騒ぐ元臣下達の声が残っていた。

「だが、ここはあの世ではないようだ……助かったのか？」

なぜ助かったのかは分からなかった……しかし、現にこうして生きている。ブルボンはとりあえず、そのことを喜ぶことにした。しかしその喜びと同時に、彼はその胸の中に、めらめらと燃え上がるどす黒い感情の芽生えを感じた。

「フン、ルドルフ……あの青二才め！ このブルボンにトドメを刺さなかったことを後悔させてくれるわ。」

ニヤリと笑って、彼は頭の中にルドルフを描くと、それに何十発という拳を突き入れて、ボコボコに叩きのめしてしまった。そして、それを現実のものとすべく、ブルボンは憎きルドルフがいるであろうパーティ会場に向った。

パーティ会場は華やいでいた。等間隔に並べられたテーブルには、それぞれ豪華で彩り鮮やかな料理やデザートが並んでいる。その間では、立派な衣装で着飾った紳士淑女達が、シャンパングラスを片手に談笑している。ダンスフロアも設置されており、ピアノやバイオリンの奏でる音楽に合わせて、数組の男女が優雅なステップを踏んでいた。

そんな中で、ミホは顔を真っ青にして硬直していた。目の前に広がっているのは、自分が経験したことのない世界……テレビや映画でしか見た事のなかった世界……

「ミホさん、大丈夫ですか？」

そんな彼女の様子を気にかけて、ルドルフが声をかけてきた。

「だ、大丈夫……です……」

そうは言っているが、彼女の笑顔はなんともぎこちなかった。そのあまりの緊張振りに、ルドルフは思わず苦笑いを浮かべた。

「そんなに緊張しなくても、普段通りにしていれば大丈夫ですよ。」

「はあ、そんなもんですか？」

「『そんなもん』です。何か食べ物を取ってきましようか？ そのシャンパンも、どうぞ召し上がってください。」

まったく口の付けられていないミホのグラスを見て、ルドルフはハハッと笑いながらそう言った。

「あ、でも、私まだ未成年ですし、お酒は……」

ルドルフの言葉に、一瞬グラスを口につけたミホだったが、シャパンが口に入る直前でそれに気がついた。その言葉を聞くと、ルドルフも「そういえば」と言っ、額に手を当てた。

「これは失礼しました。」

「何から何まで、すみません……」

「いえ、良いんですよ。実は、私もあまり得意じゃないんですよ。ジューズと取り替えてもらいましょう。」

ルドルフはミホからグラスを預かると、ウェ이터を呼ぼうとした。しかし、その時ちょうど、ピアノやバイオリンが奏でていたワルツが終了した。するとルドルフは、ウェ이터を探していた目をダンスフロアに向け、そして何かを思い立ったのか、ミホの方に向き直って口を開いた。

「よろしかったら、一曲踊っていただけませんか？」

「ええ！」

ルドルフの言葉を聞くと、途端にミホは首をブンブンと左右に振った。ミホはダンスなど踊ったことがないのだ。しかし、ルドルフはフツと微笑むと、ミホの手をそっと自分の手に乗せた。

「大丈夫ですよ。私がリードしますから。任せて下さい……」

ルドルフは優しくそう言った。

踊り始めたミホとルドルフ。その様子を、ブルボンは隣接したバツクルームから覗いていた。

「フン、気取りおって若造が……それにしてもミホの奴、あんな奴と仲良くダンスなんぞ……非国民め！」

さてさて、どうしてくれようか……ブルボンは策を練り始めた。このまま突っ込んで、ダンスをしている二人にパイを叩きつけてやっても良いのだが、会場内にはたくさんの近衛兵がいる。そんなこ

とをすれば、今度こそ処刑されかねない。それ以前に、ルドルフの所に到達する前に捕縛されるのがオチであろう……そんなことは、ちよつと考えれば容易に想像できた。

「あいつら、この私の顔を知っているからな……変装できれば良いのだが……」

しかし、そんなに都合良くは……と、辺りを見回した時、ブルボンは、自分のすぐ隣に怪しげな男を発見した。その男は黒いタキシードにマント、そして鉄の仮面を被っている。風変わりな男であった……

「何だ、貴様は……？」

「手品師です。これからパーティで手品を披露するのです。」

仮面の中にこもった声で、男はそう言った。しかし、そんなことはどうでも良かった。重要なことは、仮面にタキシードにマント……変装セットが見事に揃っていることだった。

「よし、お前のその服と仮面をよこせ。」

「ええ！ ダメですよ。今回は手品師としての名を売る大チャンスなんですから！」

「うるさい、黙れ！ 手品なんぞ、私が代わりにやっというてやる！」  
そう言つと、ブルボンは抵抗する手品師を殴りつけて気絶させた。そして、衣装と仮面を引き剥がすと、それを身にまとい、パーティ会場に潜入した。近衛兵達も、ルドルフの側近達も、誰も気がついていない。ブルボンは、しめしめとほくそ笑んだ。あくまでただの手品師を装い、さりげなく会場内を進んでいく。そして、彼は遂に、二人のシャンパングラスが置いてあるテーブルまで辿り着いた。

仮面越しにダンスフロアの様子を覗う……ミホとルドルフはダンスに夢中。互いに、うつとりした表情で見詰め合っている。

「フン、せいぜい楽しんでおくことだな……」

ブルボンはそう言つてニヤリと笑つと、厨房からくすねてきたそれを懷から取り出した。調味料のボトルである。パッケージには「激辛唐辛子エキス配合」からすぎくん」と書かれている。

「こいつを奴らのシャンパンに混ぜてやる……地獄の苦しみを味わうが良いわ。クッククク……」

ブルボンは『からすぎくん』を二人のシャンパンに混ぜ込むと、笑い声を押し殺しながらバックルームに戻っていった。

そして、また一曲、ワルツが終わった。何も知らないミホとルドルフはダンスフロアから戻ってきた。

「何度も足踏んじやって、すみません。」

「気にしないでください。いや、でも、踊ったら喉が渴きましたね。」

ルドルフは二つのシャンパングラスを手に取り、そのうち一つをミホに渡そうとした。

「おっと！ と言えば、ジュースに替えてもらうんでしたね。」

しかし、ミホの顔を見てルドルフはそれを思い出した。彼はウェ이터を呼びつけると、シャンパンを下げてジュースを持つてくるよう指示した。

「ハーハッハッハッハッ！ クズどもめ、今頃ヒーヒー言っているだろうか？ ハッハッハッ！」

あまりにもうまくいったこと、そして、悶絶している二人の姿を想像したことで、ブルボンは笑いが止まらなかった。

「ヒツヒツヒツヒツ……はあ、笑ったら喉が渴いてしまったな……」

笑いすぎて痛む脇腹を押さえながら、ブルボンは、何か飲み物はないかと探した。すると、会場からウェ이터が一人、バックルームに帰ってきた。手に持ったトレーの上には、シャンパンが二つ乗っている。ブルボンはそれを見ると、ウェ이터に尋ねた。

「おい、そのシャンパンは余りか？」

「ええ、ジュースの方が良いらしくて……」

そう言えば、シャンパンなど久しく飲んでいない……ブルボンは、マグニテ帝国を追われてからの日々を思い返した。喉もちょうど渴

いていることなので、ブルボンはそのシャンパンをもらうことにした。

「ちょっと、ダメですよ！」

「黙れ。どうせ余りなんだろう？ ケチ臭いことを言うな。」

困った顔のウェイターを無視して、ブルボンはシャンパンを奪い取ると、それを一気に口の中に流し込んだ……

「辛いッ！」

続く

## 9・シンデレラを恨まないで（後書き）

ってことで第9話でした。

なんか、最近めちゃくちゃ寒いんですが……  
風邪をひいてしまいそうです。

小説書いてる時もガタガタです。

ってことで温かいものでも飲もうとお湯を沸かしたら  
今度はそのお湯手にこぼして火傷しました。・・（っ、）・・  
今、めちゃくちゃ手が痛いです^^；

呪われたのかな……

風邪と火傷には要注意ってことで  
次回をお楽しみに……



## 10・カントリーロード大激戦

カシャンカシャンと金属音を響かせながら、そのロボットは突進してきた。そして、その角ばった腕を振りかぶると、ボクサー顔負けの動きで拳を突き出す。

「痛ッ！」

脚のスネを殴られて、ミホは一瞬、顔をしかめた。

なぜ、ミホがロボットに殴られなくてはならないのか？ 話は二日前にさかのぼる……

その日、ミホはアマゾノ探偵事務所を訪れていた。以前払えなかった探偵の報酬を支払うためである。と言っても、全額そろった訳ではなく、分割払いにしてもらったうちの一部を支払いにきただけなのだが……

「確かに受け取ったよ。でも、完済はいつになることやらね……」

ミホから封筒を受け取って、中身を確認すると、ヒサエはタバコの煙を吐きながらそう言った。

「すみません……給料の良いアルバイトがなかなか無くて……」

「フーン……」

ヒサエは関心無さそうに、また一口タバコを吸ったが、しかしその時、彼女はあることを思い付いた。

「なんなら、うちの事務所でバイトしてみるかい？」

「え？」

「いやね、実は昨日、大口の依頼が入ってね。ボロイ仕事の割りに報酬がなかなかのもんだったんだよ。その仕事を代わりに引き受けてくれるって言うんなら、あんたらの未払い分はチャラにしてやつても良いんだけど……」

「本当か？」

ヒサエの言葉を聞くと、それまで隅の方で黙っていたブルボンが、

二人の間に割って入ってきた。

「つまり、我がブルボン帝国の領土を返還しても良いと言うのだな？」

「ああ……仕事さえしてくれりゃあね。」

「そうか、分かった！」

ブルボンは嬉しそうに笑うと、ミホの背中をバンと押して、ヒサエの方に突き出した。そして、二人の方に背中を向けると、扉の方に向って歩き出した。

「そいつは好きにこき使ってくれ。じゃあな……」

それだけ言って、ブルボンは扉のノブに手をかけた。しかし次の瞬間、ぬつと後から腕が伸びてきて、ブルボンの首に絡み付き、彼の体を事務所の中に引き戻した。驚いてブルボンを見ると、それはヒサエだった。

「ボロイ仕事だけど、面倒臭い仕事でもあるんだよ。ってことで二人で頼むわ……ブルボンちゃん？」

そう言って、ヒサエはブルボンの顔にタバコの煙を吹きかけた。

ミホは車窓から、流れ行く景色を見た。濃淡の様々な緑が、ミホに向って手招きをしているようだった。山、森、広がる田園……暮らしている人には悪いが、『ど田舎』という言葉が最もしっくりくる。そして、ミホを乗せた電車は、そんなど田舎のど真ん中にある駅に停車した。駅員のいない改札をくぐって、切符を回収ボックスに入れて、駅舎を出る。そこで、ミホは一枚の写真を取り出した。ボサボサ頭で無精ひげを生やした、だらしない男が写っている。「まったく、なんでこの皇帝が、こんなへんぴな所で、こんな小汚い男を探さねばなんのだ……」

ミホの後から写真を覗きこみながら、ブルボンはブーブーと不満を漏らした。

二人がヒサエに任された仕事は人探し。写真の男『ハクダ・イツセイ』を見つけることだった。

「この町は、ハクダさんの故郷らしいです。ここにいる確証はないらしいですけど、『とりあえず』ってことみたいです……」

「無駄足だったら殺すぞ、あの女探偵め……」

「まあまあ、とりあえず、誰かに聞いてみましょうよ。」

イラついた口調のブルボンをなだめつつ、ミホは周りを見た。しかし、話を聞こうにも……

「ははっ……誰もいないですね……」

「やってられるか！ 私は帰るぞ！」

遂にブルボンは怒り出した。そして、引き止めようとするミホを振り払いながら、来た道を引き返して、駅舎に向ってずんずん歩く。そうやって帰るの帰らないのと二人が揉めていると、その時、駅舎から一人の男が出てきた。

「あ……故郷は久しぶりだな……」

薄暗い駅舎から外に出てくると、男は眩しそうに目を細めながら呟いた。見ると、ボサボサ頭で無精ひげを生やした、だらしない男である……

「ああ、いた！」

ミホは写真と男を見比べながら大声を上げた。間違いなく、その男は二人が探している男だった。

「ハクダ・イツセイさんですか？」

「ん？ ああ、俺あハクダ・イツセイだ。」

尋ねると、二人の望んだ答えが返ってきた。

「私達、あなたのことを探してたんですよ！」

予想外に早く見つけれられたことが嬉しく、ミホは興奮気味にそう話した。しかし、そんなミホとは逆に、「探していた」という言葉を聞いたハクダの表情は険しいものへと変わった。

「探してた？ 俺を？」

「はい。」

「さては、お前達あ組織の刺客だな！」

終いにはそんな言葉が飛び出した。いきなりのもので、ミホとブ

ルボンは目を点にして固まってしまった。しかし、ハクダはそんなことはお構いなし。背負っていたリュックサックをあさり始めると、中から小さなロボットとラジコンのコントローラーを取り出した。

「行け！ バトルロボ！」

こうして話は冒頭に戻る……ミホは、ハクダの操作するバトルロボに殴りつけられてしまった。しかし、言っても小さなラジコンロボット。殴られても、ダメージなどたかが知れている。どうしたものかと、ミホは、せっせと拳を振るうロボを困った顔で見つめていた。しかしその刹那、ロボは突然横から出てきた手によって驚掴みにされると、ひよいと持ち上げられてしまった。

「おい、我々は貴様とラジコン遊びをしている暇などない。大人しく、一緒に来るんだ。」

ブルボンは高圧的な態度でそう言った。しかし、ブルボンの手の中でもがくロボを見ると、ハクダはニヤリと黄ばんだ歯を覗かせて、そして、コントローラーについたボタンを押した。

「馬鹿め、かかったな。」

「なんだと？」

ブルボンがその言葉の意味を探ろうとした時、突然ロボの体から白いガスが噴射された。すると、ミホとブルボンの目から涙が溢れだす。

「クソ！ 催涙ガスか！」

「陛下、それ、早く捨ててください！」

ゲホゲホと咳をしながら、二人はガスが引くのを待った。しかし、ようやく落ち着いたところで目を開くと、ハクダの姿はもう小さくなっていた。

「逃がすか！」

二人はその背中を追いかけた。幸い、ハクダの脚はさほど速い訳ではない……

「疲れた。後は任せたぞ。」

「ええ！ 早いですよ、陛下！」

しかし、ブルボンの体力と根気の無さも負けていない。ブルボンは道端にどっかりと腰を下ろすと、ミホに向って、手をヒラヒラと振って見せた。

「皇帝は汗をかくような仕事はせんのだ。お前はがんばって追え。」  
「もう……」

こうなつては、何を言つても無駄だと言うことは分かっているの  
で、ミホはブツブツ言いつつも、再びハクダを追いかけた。それを見送ると、ブルボンは目の前に広がる田畑や山を眺めながら、大きく息を吸い込んだ。呆れるほどの田舎だが、その分、空気は美味しい……

「何してんだ？ おめえ……」

そうしてブルボンが田舎を堪能していると、突然男が声をかけてきた。道端にしゃがみ込む、見慣れぬ男を不審に思つたらしい。「皇帝がどこで何をしようと勝手だ！」と、ブルボンはそう答えようかと男の方を向いたが、しかしその時、男が乗っている軽トラックが目に入った。

懸命にハクダを追いかけているが、ミホは先日のことを思い出していた。あの、パーティに参加した日のことである。

『このまま、私と一緒にマグニテ帝国まで来ていただけませんか？』  
それは、パーティが終わった後にルドルフに言われた言葉だった。しかし、ミホは首を横に振りつつ、こう返した。

『私はあの家にいないといけないんです。出て行つた父が、いつか戻ってきた時、見知らぬ暴君がいたら驚いちゃうでしょう？』

ミホはクスツと笑つた。その言葉を聞くと、ルドルフは残念そうな表情を浮かべたが、しかしすぐに紳士的な笑顔を作り、「また会いに来ます」と言つて去つていった……

「こんなことなら、ついて行けば良かった……」

後悔先に立たず……『暴君の下僕』と『シンデレラ』。我ながら馬鹿な方を選択してしまつたものと、ミホは思わず笑つてしまつ

た。が、その時、何かがミホの横を物凄いスピードで走り抜けた。見ると、それは軽トラックだった。しかも、荷台にはブルボンが乗っている。トラックは猛スピードでハクダを追い抜くと、その車体で進路を塞いでしまった。

「外国人のあんちゃん！ こいつかい？」

「そうです！ この男が私の荷物をひったくりました！」

「ええー！」

いきなり目の前をトラックで塞がれた上、突然『ひったくり』扱いされたので、ハクダは思わず素っ頓狂な声を上げた。しかも、それと同時に彼は、トラックから降りてきたガタイの良い男に胸倉を掴まれてしまった。

「この野郎！ 俺の田んぼの目の前で、ひったくりなんかさせないぞ！」

「ち、違う！」

「言い訳は聞かん！」

弁明しようとしたハクダだったが、その瞬間視界が反転し、体の中に浮いてしまった。

「ダイナマイト・農夫・パイルドライバー！」

「お疲れさん。大変だったようだね……」

二人から「ハクダを見つけた」と連絡を受けて駆けつけたヒサエは、缶コーヒ―を差し出しながらそう言った。特にミホはクタクタになっている……そんな様子を見ながら、ヒサエはハハハと笑ってタバコに火をつけた。

「それより、忘れてないだろうな？」

しかし、その時ブルボンが歩み寄ってきて聞いた。

「ブルボン帝国の領土返還の話だ。」

「ああ……その話ね……」

ヒサエはタバコの煙を吐くと、思い出したように呟いた。そして、ハクダの首に巻かれたギブスを見た。

「クライアントからさ、『くれぐれも怪我をさせないように』って依頼だったんだけど……怪我してんじゃない……」

「いや、アレは『ダイナマイト・農夫・パイルドライバー』のせいで、我々の責任じゃ……」

事情を説明しようとしたブルボンだったが、しかし、ヒサエはその言葉を遮るように、タバコの煙を彼の顔に吹きかけた。

「知らないね……まあ、半額免除ってことにしといてやるよ……」

ブルボン帝国、領土問題……解決せず……

続く

## 10・カントリーロード大激戦（後書き）

遂に記念すべき10話です。

イエーイ！

やったー！

そんなこんなで……

バレンタインも終わりましたね。

皆さんはチョコを贈ったり、もらったりしましたか？

そうですね……

私はクッキーをもらいました（義理）

まあお菓子好きなので、義理だろうがなんだろうがもらえれば嬉しいですね。

ありがとう！

つてことで、バレンタイン。

2月14日……

一説に煮干の日だという話を聞いたんですが本当ですか？

そうだとしたら……

女性の皆さん！

来年から煮干を贈ってみてはいかが？

日本人ハ、カルシウム不足デース。

これ、誰の言葉でしたっけ？



## 11・無機質な友人

買い物からの帰り道。しかし、いつもと違い、ミホはバタバタと慌しく走っている。ばさばさつ、がーがーと、物凄い騒ぎで奴らはやって来る。カラスである。これと言って、恨みを買おうなことをした覚えはないが、彼らはなぜか、執拗にミホを追い掛け回し、爪の付いた足や太いクチバシで攻撃してくる。

「ああ、もう！ あっち行つてつてば！」

腕を振りまわしながら、ミホは叫んだ。カラスは頭が良いと言うが……しかし、やはり人の言葉を理解するほどではない。ミホがいくらやめるように言つても、カラス達は「がーがー」と言うばかりだった。こうなったら、一刻も早く家に辿り着くしかない……ミホは走るスピードを上げようと、脚にぐいつと力を込めた。しかし、それがいけなかった。必要以上に力のこもった彼女の爪先は、地面を捕まえることができず、ズルツと後に滑ってしまった。突然支えを失ったミホの体は、前のめりに倒れ、地面に激しく叩き付けられる。

「痛たたた……」

ミホは痛む体を起そうとした。しかし、その時、上からドシツと力加わる。カラスが追い打ちをかけてきたのだ。ミホを嘲笑うように、がーがーと喚きながら、カラス達は代わる代わるミホに襲いかかった。

「もう！ 『大丈夫ですか、お嬢さん？』とか言えないの！」

「大丈夫デスカ、才嬢サン？」

カラスは頭が良いと言われているが、人の言葉を理解するほどではない……そんなことは、ミホも分かっていた。分かっていたからこそ、突然降ってきたその言葉に、彼女は目を丸くした。

「今、カラスヲ追イ払イマシヨウ。」

何が起こっているのか？ ミホは恐る恐る体を起こしてみた。す

ると、そこには得体の知れないモノがいた。真つ黒なカラスとは正反対の、滑らかな光沢を放つ白い姿。小さな頭がちょこんと乗った、単一電池のような円筒状の体。そして、それを支える四つのタイヤ……その無機質な紳士は、謎の怪音波を発して、カラス達をあつという間に追い払ってしまった。

「大丈夫デスカ、才嬢サン？」

カラスが行ったのを確認すると、それはぐるっと体を回転させて、再びミホの元にやって来た。

「ありがとうございます……もう、大丈夫です。」

ミホは啞然としつつも、とりあえずお礼を言った。しかし、気持ちが悪く落ちていくと、やはり気になるのは目の前にいるモノの正体である。とりあえず、人間では無いだろうが……

「私ノ名前ハ、ライアン。ロボットデス。」

「ああ、やつぱり……」

あまりにあからさまな姿をしていたので、ミホは、最初に思い浮かぶであろうその単語が思い浮かばずにいたが……やはりロボットらしい。ミホは、興味深そうにライアンを見つめた。マンガや映画に出てくるものほどではないが、良く出来ている。この間の、ハクダのラジコンロボと比べるとえらい違いだ……ミホは感心してしまった。しかし、同時にふと疑問が浮かんだ。

「それで、そのロボットさんが何でこんな所に？」

正直、この辺りは産業が発達している訳でもない……ロボットとは無縁と言つて良い場所である。「ロボットがうるついても不思議ではない」と言えるような場所では無い。

「ハイ、実ハ……ア！」

ミホの質問に答えようとした時、ライアンの体に付いた、小さな赤いランプが点滅し始めた。それに気がつく、ライアンは少し間を置いて、再びレンズが入った二つの目でミホを見た。

「申し訳アリマセンガ、一ツ、才願イヲシテモ、ヨロシイデシヨウカ？」

「お願い？」

それから数時間後、胴体内部からせり出したアームを器用に使って、ライアンはピカピカになったお皿を戸棚にしまった。そして、ウィーンという機械音を響かせると、アームを胴体にしまい、ミホのいるリビングに向ってタイヤを転がした。

「洗い物、終ワリマシタ。」

「あ、ご苦労様。」

「他二、ヤルコトハ、アリマスカ？」

「もう良いよ。ごめんね、働いてもらっちゃって……」

「イイエ、充電サセテモラッタ、オ礼デス。」

ライアンはそう言って、ミホの目の前に置かれた湯飲みにお茶を注ぎ足した。本当なら、こちらがガラスから助けてもらったお礼をしなくてはならないのに……と、ミホは苦笑いを浮かべながらお茶をすすった。

「お茶を淹れるのも上手……ライアン君はお手伝いロボットなんだ？」

「私ハ、タダノ試作ロボットデス。デモ、私ヲ造ツタ人が、家事全般ラインプットシテクレマシタ。」

「インプットしてくれたって言うか……ただ単に、やらせたかっただけだと思うよ……」

ミホはそう言って、また苦笑いを浮かべた。そして、ふと時計を見る……時計の針はもう五時を回っていた。

「ライアン君、そろそろ帰らなくて良いの？ その『ライアン君を造った人』も待ってるんじゃない？」

日が沈み、暗くなり始めた窓の外。薄っすら紫に染まる山の端を見ると、ミホはライアンに言った。しかし、ライアンはすぐには言葉を返さなかった。しばらくの沈黙……そして、今までより若干ボリユームを落とした声で言った。

「私ヲ造ツタ人が言イマシタ……もう、ここへ戻ってきてはダメ

だ』ト……」

「それって……」

こんなに立派に家事をこなせるロボットなのに、リストラされてしまったのだろうか？ いや、「試作ロボットだ」と言っていたから、後続機に役目を奪われてお払い箱にされたのかもしれない……  
「ミホハ、サツキ聞キマシタ。『どうしてこんな所にロボットがいるのか？』ト……私ハ、アチコチ放浪シテイマス。今日ノヨウニ、家事ヲ手伝ウ代ワリニ、充電ヲサセテモライナガラ……」

それだけ言うと、ライアンは黙ってしまった。その光沢は、先ほどと変わらず滑らかなものであったが、ミホには、何だかライアンがとても哀しそうであるように感じられた。こんなにがんばっているロボットが、試作品と言っただけで野良猫のような生活を強いられている。文明の発展なのか何なのかは分からないが、非常にもったいない話である……ミホはそう考えると、一つの決断をした。

「ねえ、ライアン君。良かったら、ずっとうちにいない？」

「ココニ？」

ライアンが聞き返すと、ミホはニッコリと笑って立ち上がり、そしてハッキリした声で続けた。

「ただし、うちの家事を手伝うこと！ その代わり、報酬として住居と電気を提供する……それでどうかな？」

「ソレハ、素晴シイ！」

そう言うと、ライアンはタイヤをギユイツと回転させて、部屋の中を走り回った。ロボットに『不安』というものがあるのかは疑問だが、きっと安住の地を求めているのだろう……喜ぶライアンを見て、ミホはフツと笑みを浮かべた。

「おい……」

しかし、その時突然、ドスの利いた声が聞こえてきた。見ると、部屋の隅にブルボンが立っている。今日はおかけると言っていたが、どうやらいつの間にか帰ってきていたらしい……

「おかえりなさい、陛下。」

「そんなあいさつはどうでも良い。その『変な物』は何だ？」

ブルボンは、怪訝そうな顔でライアンのことを見ると尋ねた。心なしか、機嫌が悪そうである……とにかく、ミホはライアンの隣に立って、そつとライアンの頭に手を置くとブルボンに紹介した。

「今日からうちで、家事手伝いをしてもらうことになった、ライアン君です。」

「ライアンデス。ロボットデス。」

二人の言葉を聞くと、ブルボンは眉を潜めた。

「つまり、この帝国領地に住むと言うことか？」

「そうですよ。」

「なるほど……捨ててこい！」

やはり機嫌が悪いらしい……いや、悪いどころか、明らかに怒っている。ミホは一瞬固まると、しかし、一呼吸置いてから、もう一度ブルボンに問い直した。

「あの、家事手伝いをしてくれるんですよ？」

「お前がやれば済むことだろう。捨ててこい！」

返ってきた答えは同じ。ブルボンは、ライアンの同居に反対らしい。

「どうしてですか？ ライアン君は良く出来たロボですよ？」

「フン、そいつの性能など知ったことか！」

そう言うと、ブルボンは自分の右足を持ち上げて、それをミホとライアンの二人に見せた。

「そいつは今な、今なんと、この皇帝の足をタイヤで轢いたんだぞ！」

ブルボンは、怒りで目を血走らせながら足の甲をさすった。気付かなかったが、どうも、さっきライアンが喜んで走り回った際に、部屋に入ってきたブルボンの足の上を通ってしまったらしい。

「良いじゃないですか、それぐらい……別に、骨折したとかそういう訳じゃないんですよ？」

毎度のことながら細かい男だ……ミホは呆れながら言った。しか

し、ブルボンの怒りは収まらない。

「ダメージ云々の話などしていない！ 『皇帝の足を踏んだ』という、不敬行為が問題なのだ！」

ブルボンはそう言いながら、ズンズンとライアンの所まで詰め寄ると、力強く握り締めた拳を振り上げた。

「このガラクタめ！ 分かったら、とつと私の帝国から出ていけ！」

ブルボンは拳を振り下ろし、ライアンを思い切り殴りつけた。ガンと鈍い音が響く。硬い！ 痛い！ ブルボンは拳を押さえてその場にうずくまった。ロボットなのだから、当たり前の結果である……

「貴様あ……一度ならず、二度までも……」

「今のは陛下の自業自得じゃないですか……」

「うるさい！」

ブルボンは怒鳴ると、履いていたスリッパをミホに投げつけた。

スリッパはミホのおでこを直撃する……

「痛あゝ……」

「ブルボン帝国臣民が、皇帝よりガラクタの肩を持つとは何事だ！」

ブルボンは怒鳴りつつ、もう片方のスリッパを手に取った。「分からん小娘をシバイてやろう」と、そう考えて……しかし、その時、ブルボンは右脚に凄まじい衝撃と痛みを感じた。何かと思って足元を見ると、そこにはライアンがいた。

「ミホ、イジメルナ。」

そう言つて、ライアンは少しバックすると、再びブルボンの脚、ちようど『弁慶の泣きどころ』と言われる部分を目掛けて体当たりをした。ブルボンの脚を、ジーンという痛みが突き抜ける。

「ぎゃあああああ！」

「ミホ、イジメルナ！」

ライアンは何度も何度も、ブルボンの脚に体当たりをした。その度に、ブルボンの脚は凄まじい痛みに襲われ、それから逃れるために、彼の体は知らず知らずのうちに部屋から追いやられて行く。

「この、ガラクタめ……！」

しかし、反撃しようにも、スリッパや拳では硬いライアンの体には通用しない……そして、ブルボンが手をこまねいている間も、ライアンの非情なる体当たり攻撃は続いた。結局何も出来ぬうちに、ブルボンはついに玄関まで追いやられてしまった。

「ひい……もう、やめて……」

「ミホ、イジメルナ。家カラ、出テイケ！」

ライアンは、「トドメ」と言わんばかりに助走をつけると、思いっきり突進。衝撃を受けたブルボンの体は吹き飛ばされ、扉から戸外に弾き出されてしまった。そして、それを確認すると、ライアンはすかさず扉を閉め、さらに力ぎをかけてブルボンが入ってこれないようにしてしまった。

「ちよつと、待て！ 開ける！」

カチャツと言う施錠の音を聞くと、ブルボンは慌てて扉をドンドンと叩いた。しかし、中からは冷ややかな言葉が返ってきた。

「ソコデ、頭ヲ冷ヤシテイロ！」

「何だと、貴様！ 開ける！」

再度、扉を叩いてみる……しかし、それ以降、ライアンからもミホからも、返事が返って来ることはなかった。

「開けて〜！」

結局、その夜、ブルボンはずっと野ざらしにされることとなった。彼が再び家に入れてもらえたのは、翌朝のことだったと言う……

続く

## 11・無機質な友人（後書き）

11話でした。

新たなる仲間、ライアン君の登場です。

それはそれとして……

もう2月もあとわずか。

早すぎ！

この間まで正月じゃありませんでしたっけ？

うーん……

一日100時間ぐらいあつたら素適なのに……

まあ、そんなにあつたら、逆に80時間ぐらい寝てそうですけど^

^；

少ないからこそがんばれる！

そういうことですかね。

うん！ そういうことですね、きっと！

ってことで次回をお楽しみに。



## 12・ライオンは紅く染まる

テーブルには茶菓子が並べられ、ティーカップからは紅茶の良い香りが漂ってくる。それをはさんで、ミホともう一人の女性は向かい合って座った。女性の名前はシイ・レイカ。亡くなったミホの母親とは古い付き合いである。「お母さんとの思い出の品が見つかった」という彼女からの連絡を受け、ミホは今日、久々にシイ家の敷居をまたいだ。まだミホが小さかった頃、彼女の母親が生きていたころ以来。すっかり成長したミホを、レイカは暖かく迎えてくれた。「本当に大きくなって……お母さんの若い頃にそっくりよ。」

アルバムの写真を指差しながら、レイカは言った。

「本当に懐かしいわ。もう、色んなものが変わってしまつて……時の流れは残酷ね。」

「でも、おばさんの笑顔は昔も今も変わりませんね……」

ミホの記憶の中のレイカも、写真の中のレイカも、等しく『ニコニコ』である。そして、アルバムに落ちていた視線を上げると、また同じ『ニコニコ』がある。

「笑顔つて素敵じゃない。今までで泣いたのは、あなたのお母さんが亡くなった時だけよ。」

イタズラっぽく笑つて言うと、彼女は紅茶をおかわりしようと、紅茶ポットに手を伸ばした。しかし、紅茶は入っていない……「あらあら」と呟くと、レイカは後ろを振り返った。部屋の隅で、一人の少年が携帯ゲーム機をいじっている。レイカの息子のハルトだ。「ハルト、紅茶のおかわり淹れてきて。」

「自分でやってよ……」

ハルトは眉一つ動かさずに、小さな声でそう言った。その言葉を聞くと、レイカは溜息をつく。

「もう……無愛想で嫌になっちゃうわ。」

仕方ない、自分で淹れよう……台所に行く為、レイカは席を立と

うとした。しかしその時、突然横から金属製のアームが伸びてくると、彼女の手から紅茶ポットを取り上げた。

「私が淹レテキマシヨウ。ドウゾ、楽ニシテイテクダサイ。」

ライアンはそう言っ、台所に向かう。その白い背中を見送ると、レイカは目を輝かせて感心した。

「まあ、ミホちゃんの弟さんはお利口さんねえ。」

「いえ、あの、弟じゃないです……」

「ハルトも見習いなさい。」

レイカは再び後ろを振り返って言った。しかし、ハルトはそれでも無表情のまま……

「……うん。」

「何が『うん』なの……」

レイカの溜息が漏れた……ちょうどその時、リビングにブルボンがやって来た。

「まったく、退屈な家だな。」

「どうやら、することが無いので家の中を探索していたらしい。」  
大人しくしててください」と、ミホは叱り付けるように言った。  
しかし、ブルボンはそれを軽く聞き流すと、部屋の中を見回した。  
「何か面白いものはないだろうか？」と……すると、部屋の隅にそれを見つけた。無表情のハルト、その手に握られているゲーム機……

「面白そうなものをやっているな。どれ、この私に貸してみろ。」

「ええ……」

その時、ハルトの表情が初めて変わった。と言っても、物凄く嫌そうな顔……それをブルボンに向ける。しかし、その横で、レイカはニコニコ笑いながら口を開いた。

「良いじゃない。お兄さんに遊んでもらいなさいよ。」

自分は今、一人で静かにゲームがしたいのに……ハルトはそう思ったが、しかし、ブルボンが「ゲームを寄こせ」だの「私と遊べ」だの言ってくるので、集中できない。仕方なくハルトはブルボンの相手をすることにした。

一時間後、二人はハルトの部屋にいた。テレビゲームで遊んでいたのである。画面では二人のキャラクターが激しく動き回り、パンチやキックを当て合っている。そのうち、片方のキャラクターの繰り出した必殺技が、もう片方のキャラクターを捉えた。

「くそ！ 格闘ゲームは、この私の得意分野だと言うのに……」

「ハハハ、おじさん弱すぎだよ。」

戦況は一方的だった。今のところ、ハルトの全勝である。

「馬鹿な……マグニテの臣下どもとの対戦では、一度も負けたことのないこの私が……」

「おじさんは技を出すタイミングが悪いんだよ。いくら必殺技でも、当たらなければ意味がないよ。ほら、こうやって……ね？ 技と技の流れの中で出さないと。」

ハルトは、先ほどとは別人のように饒舌じょうぜつになっていた。彼は、元々人見知りの激しい人間で、クラスでの友達も少ない……しかし、彼は別に人付き合いは嫌いではなかった。ただ、少し警戒心が強いだけで、それが解けてしまえば何のこともない。むしろ、一度仲良くなれば、彼はどこまでもフレンドリーになる。そして、こうしてゲームをしているうちに、彼の中で、ブルボンの存在は『知らないおじさん』から『友達』に変わっていた。彼は、突然ゲームの電源を切ると立ち上がった。

「ゲームはやめにして、外に行こうよ。面白い所に連れて行ってあげる。」

ハルトはそう言うと、ブルボンの手を引いて家を出た。そして、商店街を通り抜け、街の外れまでやって来た。そこには、今は使われていない廃ビルがあった。『立ち入り禁止』という看板を無視して、二人はその中に入る。窓ガラスは割れていて、多少荒れてはいるが、しかし、前にここを使っていたであろう会社の備品などはそのままになっていた。

「ここはね、僕達の秘密基地なんだ。僕らの仲間しか入っちゃダメ

なんだけど、おじさんは特別だよ。」

両腕を広げながら、ハルトは言った。ブルボンは室内を見回す。まだ使えそうだ……ブルボン帝国の基地とするのも悪くないかもしれない……そんなことを考えながら……

「おっと……」

しかし、その思考は、突如鳴ったグーという胃袋の声によって中断させられた。チツと舌打ちをして、ブルボンは自分のお腹をにらみつける。

「ミホ達が食っていた茶菓子を、少し頂いておくんだった……」

頭に思い浮かぶクッキーとチョコレート……すると、また胃袋が大きな声を上げる。それを聞くと、ハルトはクスクスと笑った。

「ちよつと待ってて。」

ハルトはそう言っ、近くに置いてあった戸棚を開ける。かつては、書類などが置かれていたであろうそこには、しかし、今はちゃんとカップ麺が入っていた。

「今、お湯を沸かすからね……」

「しかし、もうガスも水道も通ってないんじゃないか？」

「水道なら近くの公園のを使えば良いよ。火も大丈夫。」

ハルトはブルボンの前に、紙くずがたくさん入った缶箱を持ってきた。焚き火を起こして、それでもってお湯を沸かそうと言っのだ

……

日も傾き始めていた。それでも、ミホとレイカは相変わらず談笑を続けていた。いつもなら、ミホもレイカも夕飯の支度を始めなくてはならない時間。しかし、今日は違う。台所にはライアンが立っている。彼が、みんなの分の夕飯を用意しているのだ。おかげで、ミホとレイカはゆっくり話をする事ができた。

「本当に良くできた弟さんね……」

「いや、だから、弟じゃないです……」

しかし、そんな会話をしていた時、ピンポーンとチャイムが鳴り

響いた。誰だろうか？ そう考えている間も、ピンポンピンポンと、まるでクイズ番組で誰かが正解したかのように、チャイムは忙しく鳴らされた。扉の向こうで待っている人物は、相当急いでいるらしい……レイカは「はいはい」と言いつつ、玄関に向かった。

「あら、どうしたの？」

レイカが扉を開けると、そこには三人の少年がいた。三人とも、ハルトの数少ない友達である。レイカがいつもの笑顔で尋ねると、三人はお互い押し合いへし合い、ことの事情をレイカに伝えようと一斉に口を開いた。わーわーと色んな単語が混ざり合って、言っていることが良く分からない。しかし、それでも何とか伝わったこと……

子供達が秘密基地に使っている廃ビルが火事になっている。ビルの中には、ハルトと外国人の男が取り残されている。

レイカ達は慌てて廃ビルに向かった。

そこに到着すると、五階建てのビルの三階までが炎に包まれていた。と、そう思った瞬間、四階の窓からも炎が噴き出した。炎はどんどん広がっているのだ。

「助けてー！」

見ると、五階の窓に人影がある。ブルボンとハルトだった。二人は、真っ赤な海に浮かぶ孤島に取り残されてしまったのだ。助けに行きたいが、炎が強すぎてどうすることもできない。消防が到着するのを待つしかない……しかし、サイレンの音はまだ聞こえなかった。実は、この日は空気が乾燥していた上に風も強く、他の場所でも火災が発生していて、消防の手が回らない状態になっていたのだ。「人が取り残されているんです！ とにかく早く来てください！」

ミホは携帯電話に向かって、怒鳴るように言った。

「ミホ、早く何とかするんだ！ 火がもうそこまで来ている！」

ブルボンが叫んだ。このままでは消防が到着する前に二人が焼け

死んでしまう……しかし、どうしたものか……

「ミホちゃん！」

その時、レイカの呼ぶ声がした。そちらを見ると、消火器を二本持ったライアンが、ビルの中に入っていくところだった。

「大変！ 弟さんが！」

「弟じゃないですって……でも、そうか！ ライアン君はロボットだから……」

炎が燃え盛るビルの中で、ライアンはフルパワーで最上階を目指した。タイヤが付いた四つの足を巧みに上下させて、階段を登っていく。炎によって回路がダメージを受けたら、そこでライアンは動けなくなるだろう……しかし、ライアンは恐れずに、炎の中を突き進んだ。一段、また一段と階段を登っていく……すると、ライアンの周りは突然紅みを失った。最上階に到着したのだ。

「おお、ガラクター！」

見ると、ブルボンとハルトは無事だった。ライアンは、とりあえず二人の所まで駆け寄った。

「ガス、上カラ溜マル。下ノ方、空気新鮮。シャガンディレバ安全。」

ライアンは二人をしゃがませると、炎が燃えている階段の所まで行った。そして、消火器の噴射口を炎に向けて、アームの先でレバーを握る。すると、ピンクの煙が立ち込め、同時に炎が消えた。

「でかしたぞ！ そのまま炎を消すんだ！」

ブルボンが叫ぶ。しかし、ライアンの思考回路は考えた。自分の持ってきた消火器二本では、このビルの火災はおろか、下のワンフロアの炎すら消しきることはできない、と……それに、遅れているとはいえ、消防がこの火災を長時間放置するとは思えない。ライアンは、残りの消火器を使って、火の侵攻を防ぎ、消防が到着するまで時間をかせぐことにした。五階の入り口にデンと構えて、炎が来るたびにそれをなぎ払う。深追いはしない……

数分後、やって来た消防のはしご車によって、ブルボンとハルト、

そしてライアンは救出された。火災も、あっという間に消されてしまった。それは、二人の命を危険にさらした割には、呆気ない最後だった……

翌日、夕方のニュースにライアンの姿が映された。画面には「おてがらロボットのライアン君に消防署長が感謝状」と、テロップが出ている。そのニュースを多くの人々は何気なく見ていたが、しかし、アイネス・システムの社長、フウマ・ジンは違った。

「あれは、MGR - 87……そうか、そういうことが……」

続く

## 12・ライアンは紅く染まる（後書き）

ってことで、次回に続いたり……

いやいや、もう三月です。

暖かくなるかな？

なんて思っていたら、早速雪が降りました。

ふざけんな！

最近洗濯物が溜まっているので、部屋干しだけじゃきついんです。こつなったら、奴を使うしかないのか？

いや、しかし……

ダメだ！ 奴は危険すぎる！

コインランドリー…… 奴だけは……

奴は、フワフワの洗濯物を提供する代わりに、こちらの財布から金を奪っていくとんでもない奴だ。

しかし、このままではうちの洗濯物が……

艦長！ ご決断を！

ってことで、小芝居でした。

次回をお楽しみに……



### 13・魔の手は夜更けに

「見て、ライアン君の記事が載ってる。」

ミホはそう言って、開かれた雑誌の上を指差した。そこには、電池のような体が写っている。この間の、消防署長に感謝状を贈られた時のものだ。ライアンとブルボンも寄ってきて、その記事を覗き込んだ。

「確かに載ってるな……しかし、私の記事はどこだ？ 私の活躍が書かれていないではないか。」

「陛下、活躍どころか、迷惑しかかけてなかったじゃないですか……」

……

大人なのだから、火の扱いにくらい気を配って欲しい……と、ミホは呆れてしまったが、それよりも、今はライアンが雑誌に紹介されていることが、なんだか誇らしい。ミホはライアンについて書かれたその記事に目を通し始めた。しかし、読んでいくと、ミホはあるものを発見した。

「陛下も載ってますよ。」

「何、本当か？」

どれどれ……と言って、ブルボンは雑誌を受け取ると、ミホが指差した辺りを見た。そこには小さな写真……ススで黒く汚れたブルボンが、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしている……そして、その写真の下には『救助された外国人男性』と小さく書かれている。

「何だ、これは！ もっと良い写真は無かったのか！」

「ある訳ないじゃないですか……」

ヒーローどころか、なんとも間の抜けた写真……それを見て、ミホは思わず吹き出してしまった。ブルボンはそれが気に障ったらしく、彼女をにらみつけると、何かを言おうと口を開いた。が、しかし、突然鳴り響いたピンポンという小気味いい音が、ブルボンの言葉を遮った。誰か来たらしい……ミホはブルボンに背を向けると、

トタトタと玄関に向かった。

「はい。どなたですかー？」

ミホは扉を半分ほど開いて、来客の姿を見た。そこにいたのは、全身をプラチナ色のアーマーで覆った、あの男……

「銀河治安維持機構の調査官18351890号、コード『TM』だ。」

鼻が痛くなるような記憶が甦り、ミホは次の瞬間、慌てて扉を閉めようとした。しかし、それが完全に閉じられる前に、TMは間に腕を差し込んで無理矢理扉をこじ開けた。

「きゃあ！ 何なんですか！」

悲鳴を上げるミホ。それを聞きつけ、ブルボンと、そしてライアンも玄関にやって来た。その姿を確認すると、TMは話を続けた。

「今日は調査にやって来たのだ。そのライアン君の周辺環境調査だ。」

「どういことですか？」

ミホが恐る恐る聞き返すと、TMは説明し始めた。それによると、どうも銀河治安維持機構では、高度な知能を持つロボットはそれなりの権利、人権ならぬ『ロボット権』を持っているらしく、ロボットだからと言う理由で不当な労務を受けない権利、適切な生活環境に置かれる権利などが認められているらしい。そこで、ライアンのロボット権がちゃんと保障されているかを、調べに来たと言うのだ。「そういう訳で、しばらく、ライアン君の生活状況と君達の行動を監視させてもらうぞ。」

「そんな……ライアン君は私の大切な家族です！ ひどい扱いなんてしてません！ ねえ、陛下？」

「ああ、ミホもライアンも、この私の大切な奴隷だからな。」

「『奴隷』だと……？」

二人、特にブルボンには前科があるので、TMは怪しく思い、家上がりこむと注意深くライアンと他二人の言動を観察した。ライ

アンは先ほどから、せっせと掃除や洗濯などの家事をこなしている……一方、ミホとブルボンは……ミホは、たまにライアンを手伝ったりしているが、ブルボンはソファアーにどっかりと腰掛けて、テレビを見ている。

「なぜ、お前は働かない？」

「ん？ 皇帝が働く訳なからう。」

「さては、ロボットだからと言う理由で強制的に労働させているな？」

知的ロボット保護法違反……『スキー場で転がって雪だるま状になって木にぶつかってトドメに上から雪がドサツと落ちてくるの刑』を執行しなくてはと、TMはブルボンの胸倉を掴んだ。しかし、それを見たミホは慌てて止めに入る。

「待ってください！ 陛下は確かに家事一つしないろくでなしですけど、ライアン君は自主的に家事をしているんです。」

「ん？ そうなのかい、ライアン君？」

TMはブルボンを掴んだまま、洗濯を終えてリビングに戻ってきたライアンに聞いた。すると、ライアンは小型カメラの目でしっかりとTMの方を見た。

「ミホト約束シマシタ。私ハ電気ト住ム場所モラウ。代ワリニ、ミホノ手伝イヲシマス。コレハ、ミホノオ手伝イデス。」

ライアンはそう言うと、今度は料理をしようと、キッチンに向かって行った。しかし、ブルボンが怪しいことに変わりはない。

「明日の朝までじっくり監視させてもらう。」

TMはそう言うと、ブルボンを放した。

遂に日は落ち、夜も更けていった。生活の邪魔にならないよう、TMはリビングの片隅に、ジツと身じろぎ一つせずに立っていた。ミホも、ブルボンも、もう寝てしまった。ライアンも、スリープモードに入っている。監視を始めて数時間が経過した。しかし、所々ブルボンの横暴さが目立つものの、これまでに違法な行為は見当た

らない。調査官の前だからといって、隠しているような素振りも無い。これは、朝まで暇な仕事になるかもしれない……急に襲ってきた眠気を、TMは「職務中だ」と心に言い聞かせることでなんとか振り払った。しかし、そんなこんなで時計の針が深夜二時を回った時だった。

「ん？ 何だ？」

TMは家の外に人の気配を感じた。それも一人や二人ではない。こんな夜更けに、しかも、ミホの家は街のはずれの森の中だというのに……あからさまに怪しい……と、TMが考えたその刹那、その悪い予感、窓ガラスの割れる音とともに現実のものとなった。

「へ？ 何？」

「ん……誰だ、皇帝の眠りを妨げる奴は？」

二人も起きてきた。暗くて良く見えない……と、ミホは電気のスイッチに手を伸ばす。しかし、あと数センチでスイッチというところで、ミホは自分の首筋に何か冷たい物が当てられたことに気が付いた。

「動くな……」

見ると、背後には黒い全身タイツに覆面を被った男がいて、そして手に持ったナイフを彼女の喉元にあてがっていた。驚いて、視線をブルボンの方に移す……

「すみません、すみません……命だけは勘弁してください……」

数人の黒尽くめ達にリンチされながら、ブルボンは額を床にこすりつけていた。

「MGR-87を渡して貰おうか？」

「えむじーあーる？ 何のことですか？」

「とぼけると為にならないぞ？」

背後の男は、手に力をこめてナイフの刃をミホの喉に食い込ませた。まだ痛みはない。が、もう数ミリ刃を動かすだけで、ミホの首の皮は引き裂かれ、ナイフが喉を掻き切ってしまうだろう……息一つできない。恐怖と緊張で、ミホの全身は石像のように硬直してし

まった。しかし、次の瞬間、目の前が赤い光に包まれた。そして、気が付くと、喉に張り付いていた冷たい感覚が消えていた……

「なんだと！」

男は手にしていたナイフを見た。刃のほとんどが消失している……  
：少しだけ残った部分は黒くくすみ、小さな煙が立っていた。

「そこまでだ！」

「誰だ、貴様は？」

T Mは構えていた右手を下ろした。どうやら、ナイフの刃を消し去ったのは彼らしい。

「私は銀河治安維持機構の調査官18351890号、コード『T M』。貴様らの行為は『住居不認可侵入の罪』、『L3破壊行為の罪』、『平穏生活への騒乱の罪』、及び『L3殺傷ツール対人使用の罪』に該当する。」

「ふざけやがって。邪魔をするな！」

ジワリジワリと詰め寄ってくるプラチナ色の体めがけ、男はミホを突き飛ばすと、腰に提げていたマシンガンを取って引き金を引いた。連続して風船が弾けたような爆音……それが静まると、男はT Mの方を見た。その体は倒れることなく、両足でしっかりと床を踏みしめている。

「これで『L4殺傷ツール対人使用の罪』、及び『公務執行妨害の罪』もプラス……」

T Mは再び、男に向かって歩みを進めた。回転しながら高速で飛ぶ鉛の弾丸も、そのプラチナ色のアーマーを傷つけることはできなかったのだ。

「チクショウ！」

やけになつて、男は素手でT Mに殴りかかった。しかし、T Mはそれを片腕で防ぐと、逆に拳で男を殴りつける。吹き飛ばされた男は派手に壁に叩きつけられ、そのまま気を失ってしまった。

「やべえ！ おい、逃げるぞ！」

啞然としながらその様子を見ていた男の仲間達だったが、しかし、

自分達の装備ではTMを倒せないと分かった、一目散に逃げ出した。  
「あ、貴様ら！ おいTM、奴らを捕まえろ！」

開放されるやいなや元気になったブルボンが叫ぶ。しかし、TMはブルボンの言葉も、逃げ去る男達も無視して、気絶した男の方にゆっくりと向き直った。そして、ぐったりとしている男の体を起こすと、平手でバシバシと頬を叩いた。すると、気を失っていた男が目を覚ました。

「お前達はどこの組織の人間だ？ そして狙いはなんだ？ MGR  
- 87とは何のことだ？」

男の目をしっかりと見据えながら、TMは尋問を始めた。しかし、男は口をつぐんだまま、目をそらして答えようとしない。

「お前達の装備からして、並みのやくざなどではないだろう？ この組織だ？」

もう一度、TMは低い声で聞いた。しかし、男は唾をペツと吐いてニヤリと笑った。「答える気なんてさらさら無い」と、そう言わんばかりに……しかし、そのにやけた男の鼻の穴に、次の瞬間、何かが挿し込まれた。続いて、シュボツと言う音……そして、ジジジと言う音と、何かが焼けるような臭い……

バン！

「ぐああああ！」

それは爆竹だった。鼻が熱くなり、目と耳も痛む……男はあまりの苦痛に、床をごろごろと悶え転げた。

「ブルボン帝国の領域を侵犯した上、この皇帝をこんな目に合わせおつて……大人しく質問に答えないと、貴様の全身の穴と言う穴にこいつをぶち込むぞ？」

ブルボンは爆竹をチラつかせながら、唇の端をニツと上げた。涙でばやける目でそれを見ると、男は顔面を恐怖の色に染め、そして途端に、震える声で話し始めた。

「俺達は、ただ雇われたただけなんだ！ MGR - 87を……この家にいるロボットを回収して来いって……」

「ライアン君を？」

「それで？ 雇い主は？」

TMが聞くと、男は一瞬息を止め、しかし、爆竹を取り出すブルボンを見て、再び口を開いた。

「……アイネス・システムだ。」

ミホ達は驚いた。男の口から飛び出したのは、この国では知らない者はいない一流企業の名前だったのだ。コンピュータ部門では国内トップシェアを誇り、最近ではロボット開発にも着手しているというが……

「まあ、理由は社長に直接聞くことにしよう……とりあえず、お前は『目にレモン汁の刑』だ。」

「ま、待つてくれ！」

怯える男の前で、TMは輪切りにされたレモンを取り出した。そして、その数秒後、真夜中の家の中に悲鳴が響き渡った……

「ちょっと待て、何で私なんだ！」

目を押さえて悶えたのはブルボンだった。しかし、TMは「別に何も間違っていない」と、なおもブルボンの目にレモン汁を浴びせようとしてくる。

「お前のさっきの行為は『残虐な拷問行為の罪』に該当する。あの男はそれによって、それ相応の裁きは受けたしな。」

それから、何度となくブルボンの悲鳴が上がった。「寝させろよ……」と、眠い眼をこすりつつ、ミホが気になるのはライアンのことだった。『アイネス・システム』、『MGR - 87』、それらの単語が頭にこびり付いて、ブルボンの悲鳴が止んでからも、ミホは眠ることができなかった。

続く



### 13・魔の手は夜更けに（後書き）

そんなこんなで、次回に続きます。

もう南の方では梅の花が咲いているそうですね。  
春ですか……

良いですね。

暖かくて、眠くなる季節ではありますが  
でも、私は散歩をするなら春が一番ですね。  
風の香りが好きなんです。

ぽかぽか陽気にさそわれて……

こんな日は……

家に引きこもってニコニコ動画に限りますね（死）

## 14・博士とロボ

その日、フウマ・ジンは深夜になっても帰宅せず、ずっと社長室にいた。MGR-87の居場所を突き止めたのは三日前……少女と外国人の男が住む家に、居候していることが分かった。だから、フウマは今日、ずっと社長室で待っているのだ。その家に向わせた部下達が、MGR-87を連れて戻ってくるのを……

「社長、失礼します……」

その時、静かだった社長室に、ノックの音と同時に声が響いた。黒尽くめの、ガタイの良い男が入ってくる。フウマはその男をジロリと見て、男の口から出てくる言葉を待った。

「MGR-87の回収ですが……失敗しました。」

男が申し分けなさそうに報告する……すると、フウマは静かに、デスクに置いてあった木彫りの置物を手にとると、それを男に投げつけた。置物は見事に、男の額を直撃する。

「お前は、何のためにそんな図体をしているんだ？　おい？」

「申し訳ありません……」

痛むおでこを押さえながら弁解しようとする男を、フウマは冷たい目で見下ろした。

「ですが、たまたまターゲットの家に銀河治安維持機構の調査員がいて……」

「銀河治安維持機構か……また、面倒な者が……」

チツと舌打ちの音が響いた。計画のことが漏れなければ良いが……フウマはそれが心配だった。

「正体はバレていないんだろうな？」

「もちろんです！　素性を示す物は携帯していませんでしたし、部下が一人捕まったようですが、事前に『何もしゃべっちゃダメだよ』と言っておきましたから……」

「お前は、楽観的で良いな……」

フウマは床に落ちていた置物を広い上げると、今度はそれで、思い切り男の顔面を殴りつけた。

「まあ良い、MGR - 87さえ手に入れば、銀河治安維持機構などどうにでもなる……」

床に転がって悶える男に、もう一撃蹴りを入れると、フウマは今後の対策に頭をめぐらせ始めた。

その翌朝、襲撃の傷跡が残るリビングで、ミホ達はライアンを囲んでいた。昨夜襲ってきた連中は、ライアンを狙っていた。それにライアンのことを、『MGR - 87』と呼んでいた。ミホ達の知らない、ライアンの名前……だから、ミホ達はライアンに聞かなくてはならなかったのだ。アイネス・システムとの関係を……

「私ハ……」

ミホ達の視線が注ぐ中、ライアンは静かに、言葉を発し始めた。

「私ヲ造ツタ人ハ、『ハクダ・イツセイ』ト言ウ名前デ、アイネス・システムノ開発部長デシタ……」

ライアンは、そのメモリーに蓄えられた記憶を掘り起こし始めた。

ミホ達は黙って、その話を聞いていた。

「元々、私ハアイネス・システムガ開発スルMGRシリーズノ中ノ、ホンノ試作機ニ過ギマセンデシタ。デモ、アル時、ハクダ博士ガヤツテ来テ、私ニ改造ヲ施シマシタ。」

「改造？」

ミホが聞くと、ライアンは首を動かして、そちらを見た。

「人口知能プログラムノ搭載デス。」

ライアンは話を続けた……

それは、会社の事業とは関係無しに、ハクダ自身が個人として開発したものだ。何の感情も有しないロボットに、それを付与し、人間と同じように考えることが可能になるプログラム……それを組み込まれることによって、ただの試作ロボットMGR - 87は、知能と感情を持ったロボット、ライアンになることができたのである。

「ハクダ博士ハ、私二名前ヲ与エテクダサリ、ソシテ、色々ナコトヲ教エテクレマシタ。」

しかし、そんなある日……いつものように家事をこなすライアンの元に、慌てた様子のハクダがやって来た。ライアンが何かと思つて見ていると、ハクダは突然、自身が使つていたコンピュータを壊し始め、そして、棚に整理されていた資料を引きずり出すと、一つ残らず、全て燃やしてしまった。彼の研究が、人工知能が、社長であるフウマ・ジンの目に止まってしまったのである。普通なら、名誉なことだが……

「ハクダ博士ハ言イマシタ。社長ハ、人工知能プログラムヲ悪用シヨウトシテイル、ト……」

そして、全ての処分が終わると、ハクダはライアンの方を振り返つて言つた……

『良いか、ライアン？ 俺あここを出て身を隠す。だけど、直に捕まるだろうなあ……組織からあ……社長からあ逃げられん。だからお前とはもう一緒にいられん。分かるな？ 幸い、社長あまだ、お前にプログラムが搭載されていることを知らん。お前も逃げるんだ、ライアン。社長にプログラムを渡さないために……もう、ここへ戻つてきちゃあダメだ！ お前なら、一人でもやっていけるさ……』

ライアンの話は終わった……フーと溜息をついて、ミホとTMは顔を見合わせた。どうやら、今回の黒幕はフウマと言うことで間違いないらしい……しかし、そんな二人の横で、ブルボンは別のことを考えていた。

「ハクダ・イツセイ……どこかで聞いた名前だと思つたが……」

「え？ ああ、そう言えば……」

ブルボンの言葉を聞くと、ミホも一緒に考え出した。誰だったか？ 少なくとも、ブルボンと出会つて以降に会った人物と言うことになる……ミホは、一人一人、顔を思い浮かべていった。メイド喫

茶のメジロ、シライシ……画家のクリフジ……TMにドトウ……キヤロル社の社長、ウカイと、探偵のヒサエ……幽霊少年とホラー作家のタニノチ……サドラーズ・ウェルズのオーナー、エルコ、ウンドル……ルドルフ……ルドルフ……ルドルフ……

「はぁ……ルドルフさん……」

「真面目に考えろ、このアホ！」

顔を紅くしたミホの頭を小突くと、ブルボンは再び記憶をたどり始めた……しかし、ミホの言葉は良いヒントになった。『ルドルフ』、『ハクダ』、どちらも胸糞悪い響きである。それはすなわち、ブルボンに害を為した人物と言うことになる。そこでブルボンは、頭の中の『ムカツク奴データーベース』を引き出した……徐々に思い出される、田舎道でのこと……

「思い出したぞ！ あの女探偵に頼まれて探した男だ！」

「ああ！ バトルロボの人！」

ミホも思い出した。モジャモジャ頭に無精ひげの小汚い男を……しかし、彼がライアンの開発者だったことは良いとして、彼は今どうしているだろう？ ミホはあの日のことを思い出した。ハクダは、ダイナマイト・農夫・パイルドライバーを食らい、病院で首を診てもらい、ヒサエに引き渡され……

「その後、どうしたんでしょう？」

「さあな、あの女探偵に聞かんと分かん。」

嫌な予感がする……ミホは居ても立ってももられず、アマゾノ探偵事務所に電話をかけた。数回のコールの後、ヒサエの声が聞こえてくる。「金を払え」と言ってくるヒサエの言葉を遮り、ミホは気になっていること、ハクダを探させた依頼主のことを聞いた。

「あのねえ、探偵には守秘義務つてのがあるんだよ？」

「分かってます、でも大事なことです。」

「困ったねえ……」

受話器からは「フー」と言う音が聞こえてきた。どうせ、またタバコを吸っているのだろう……

「じゃあ、これだけ教えてください。依頼主は、『アイネス・システム』じゃなかったですか？」

それは、想定される中で一番最悪のシナリオだった。ミホがその質問をぶつけると、ヒサエは黙って、そのまましばらく沈黙を守った。しかし数秒後、彼女は溜息をつくと言だけ口にした。

「『ノー』とは、言わない……」

ヒサエが受話器を置いたのか、そこで通話は終了した。彼女の言葉……それは、はっきり『イエス』と言った訳ではないが、しかしそれは、限りなく『イエス』に近い言葉であるように感じられた。どうも、「ハクダはフウマの手の中に捕らえられている」と考えた方が良さらしい……

「ミホ……」

気がつくと、隣にはライアンがいた。

「博士ヲ助ケテ……」

ライアンはレンズの入った目でミホを見ながら、どこか哀しげな口調で言った。ハクダの開発した人工知能プログラムは、電話の内容を直接聞いた訳ではないが、しかし、ミホの表情からこの状況を把握したらしい。

「事情は大体分かった。『略取の罪』に該当するし、余罪もありそうだ。私はさっそく、アイネス・システムに調査に行くことにする。お前ら、もう悪いことはするなよ。」

そんな様子を見ると、TMはそう言っ、玄関に向って歩きだした。しかし、ミホはその背中を見ずに、ただ、ライアンの眼だけを見ていた。ガラス製のレンズ……それは一定して鈍い光を反射しているが、しかし、その無機質な眼差しに含まれる、ライアンの感情を読み取るうと……

「待つてください。」

今まさに、玄関をくぐろうとしていたTMの背中に向って、ミホは突然声をかけた。

「何だ？」

TMが振り返ると、既にそこではミホが靴を履いていた。そして、すくつと立ち上がると、ミホは力のこもった視線をTMに投げかけた。

「私達も行きます……知らなかったとはいえ、ハクダさんのことは私達にも責任がありますから……」

ミホが言う。その瞳の輝きを確認すると、TMは何も言わず、ただ黙って歩き始めた。アイネス・システム、悪が巣くう城に向って

……

「おい、まさかとは思うが、『私達』の中に、この皇帝も含まれてはいまいな？」

「良イカラ、一緒二来イ。コノ、ロクデナシ。」

続く

## 14・博士とロボ（後書き）

14話でした。

いろんな伏線も回収したところで

物語はいよいよクライマックスへ……

つてことで次回に続きます。

話は変わりますが、私はこの間、実家に帰ってありました。

で、久々に人に家事をやってもらえるのでダラダラ過ごしていたのですが

コタツでゴロゴロしていた時、私の目の前に気になるものが……

おつとりは めのまえを しらべた……

『みなれぬ まんがざっし』を てにいれた

つてことで『見慣れぬ漫画雑誌』を開きました。

それは妹が通う漫画専門学校の卒業制作でした。

つてことで、さっそく妹の作品を読んだわけですが……

うーん……前より漫画っぽくなってる^^;

絵もまだあまりうまくないですが……

何ていうか……

すごく……漫画です……

妹は将来漫画家になるんでしょうか？

できたらミホを漫画化して欲しいな^^;

そんなことを思いました。



## 15・たくらみの底

彼の父親は漫画家だった。こつそり仕事場に忍び込むと、少年ハクダ・イツセイを出迎えてくれるのはいつも夢一杯のストーリーの数々だった。その中で、彼の一番のお気に入りには『ヒロシとロボ太』と題されたものだった。主人公の少年ヒロシと笑いあり涙ありの物語を展開していくロボ太は、ロボットでありながら表情豊かで、さながら人間のようなだった。ハクダ少年はそれを読みながら思った。ロボ太のような……人間くさいロボットと友達になりたい……

それから、ハクダ少年は勉強に励んだ。待っていても、ロボ太のようなロボットに出会えるかは分からない。それなら自分で作れば良い……そう考えた彼は、いつしかロボット工学の道に足を踏み入れていた。二度の浪人を経験したものの、大学にも入った。工学博士号も取得した。アイネス・システムという企業にも入社した。少年の頃思い描いた未来を歩んでいた。しかし、いつしか、ロボ太のこととも忘れていた……

そんなある日、会社に出勤した彼は、自分の開発チームに所属する部下の青年に一枚のスケッチを見せられた。チームが開発したロボット『MGRシリーズ』の新型のデザインを考えてきたらしい……それを見て、ハクダは雷に打たれたような衝撃を受け、そして、遠い昔に見たあのロボットのことを思い出した。円筒状の体の上にちょこんと乗った小さな頭……単一電池のような姿……部下のスケッチはロボ太そっくりだった。

『ロボ太のような、人間くさいロボットと友達になりたい』

ハクダはスケッチのロボット『MGR-87』の開発、そして、かつての夢を叶えるべく、人工知能プログラムの開発を始めた。会社でチームのメンバーとロボットを造り、家に帰ってはパソコンに

向かい、ひたすらモニター上に浮かんだ文字列と格闘する日々……  
そして、MGR-87が完成してから一年後、ハクダはついにそのプログラムを完成させた。MGR-87の方は、既に新型機にそのポジションを奪われていたが、しかし、ハクダにとってそんなことはどうでも良かった。お払い箱にされたその電池のようなロボットを家に連れ帰ると、ハクダはついに夢を叶えた……

「お前の名前はライアンだ。」

自分が好きな映画スターの名前をとって、彼はロボットにそう名付けた。

……………

「夢……?」

暗い部屋の中で、ハクダは目を覚ました。そこはアイネス・システムの地下にある一室。ヒサエからフウマに引き渡された後、彼はこの部屋に監禁され、毎日のように尋問をされていた。人工知能プログラムについて……今日もまた殴られ、蹴られるのか……そんなことを思うと、ハクダは溜息をついた。

「ん?」

しかしその時、ハクダの耳は外から聞こえてくる物音を聞いた。遠くの方で、ドタバタと誰かが騒いでいるようだった……

「銀河治安維持機構調査官18351890号だ。これより、この施設を調査させてもらう。」

アイネス・システムのエントランスに大声が響いた。仕事をしていた社員達は「何事か?」とそちらを振り返る。そこにはプラチナ色のアーマーが輝いていた。

「あの……」

突然のことで驚いたが、しかし仕事なので、受付嬢をしていたOLは恐る恐るTMの方へ近付いた。そんな彼女の目の前に、TMは一枚の書類を提示した。『捜査令状』と書かれている……

「この会社、アイネス・システムと社長のフウマ・ジンには『略取の罪』の容疑がかけられている。」

それだけ言うと、TMは受付嬢の横をすり抜け、ズカズカと建物の奥へ踏み入っていった。

「それじゃあ、私達もハクダさんを探しましょう。」

TMを見送ると、ミホはブルボンとライアンに向かって言った。しかし、ブルボンは無理矢理連れてこられただけに、いまいちやる気が起きない。

「探すと言ってもな……この会社はかなり広そうだぞ？ 隅から隅まで探すとしたら一苦労だ。私はその辺で適当に時間を潰しているから、貴様らだけで探してこい。」

「何言ってるんですか！」

服を掴んで、ミホは立ち去ろうとするブルボンを引き止めた。

「悪者がいるんですよ？ 私とライアン君だけじゃ危ないじゃないですか！ 陛下も一緒に来て、私達を守ってください！」

「なぜこの皇帝が貴様らのような下僕を守らねばなんのだ。冗談じゃない！」

ミホの腕を振り払い、ブルボンは出口に向かって歩きだした。しかし、数歩目を踏み出した時、ブルボンは後から何かに衝突され、思い切り床に転んでしまった。見ると、そこにはライアンの姿があった。ロボットなのでその表情は変わらないが、しかし、胴体から伸び出たドリルの回転する甲高い音が、明確な怒りを匂わせていた。「逃ゲルナ。一緒二来イ、コノクズ野郎。」

「は、はい……」

鼻の数センチ先で回るドリルの先端を見つめながら、ブルボンは仕方なくミホ達に付いて行くことにした。

しかし、そうは言っても広いアイネス・システム。そう簡単にハクダを見つけることはできない。もっとも、人目に付くような所にいるはずはなかったが……

「陛下、悪者が人を監禁しそうな所って分かりませんか？」

「ゴミ箱の中を覗きこみながらミホは聞いた。

「なぜ私に聞く……」

「いや、陛下も患者だから、同じ患者の考えなら分かるかなって。」

「そこまで言うとな、ミホの頭をゲンコツが襲った。頭を押さえながら見ると、目の前でブルボンが拳を握り締めていた。

「まったく、貴様は最近この皇帝に対して失言が多いぞ。」

しかし、ブルボンは拳を下ろすと言葉を続けた。

「そうだな……私もマグニテの皇帝だった頃は良く人を監禁したが……」

「ひどい皇帝ですね。だからクーデター起されるんですよ。」

「うるさい、黙れ。……まあ、何だ？　まず人が出入りできるような場所には監禁しなかった。監禁用の秘密の施設を作らせてな、そこにぶち込んでおくんだ。」

「秘密の施設か……」

ブルボンの言葉を聞くと、ミホは考えた。そうすると、会社のオフィスや会議室として機能している場所はまず除外される……物置やトイレも、人の出入りは自由だ……ミホは建物の見取り図に目を落とした。用途不明の部屋がないか……そうやって探していくと、ミホは奇妙なことに気が付いた。見取り図の中に、僅かだが正方形の空白があるのだ。そして、それは一階、二階、三階……と、どの階にも同じように存在した。まるで、何かが建物を貫いているかのようだ……

「でかい柱か何かじゃないのか？」

「にしては、この空白は広すぎるような気がします……」

ミホは、それが何なのか知るべく、もう一度見取り図を凝視した。一階からずっと見ていく……そして、最上階の図を見ると、その空白は、ちょうど社長室の隣に位置していた。

『社長は人口知能プログラムを悪用しようとしている……』

ミホの頭に、ライアンから聞いたハクダの言葉が響いた。ひよつとしたら、この空白がフウマの企みと何か関係あるのかもしれない……そう考えて、ミホは社長室に向かうことにした。

……..  
「そうか……分かった。」

フウマはそう言つて、受話器を置いた。MGR-87を回収するために送った部下の一人が捕まつたと聞いていたので、いずれは来るだろうと思つていたが、しかし、昨日の今日でさつそく捜査のメスが入るとは……電話で報告を受け、彼は大きく溜息をついた。銀河治安維持機構の調査官……まだこの社長室には来ていないが、あれが来たら何と言つて追い帰そうか……フウマはそれを考えつつ、部屋の隅にある本棚を見つめた。

「おい、小悪党！ 入るぞ！」

それは突然の言葉だつた。同時に社長室の扉が開く……来たか……フウマはその招かれざる客の方を見た。

「ん？ 君達は……」

しかし、そこにあつたのはフウマの予想とは違う姿をしたものだつた。プラチナ色の輝きはなく、代わりに、長身の外国人、十五・六歳の少女、そして、電池のような姿をしたロボットがそこにいた。MGR-87と、そして部下からの報告にあつた、その同居人二人だとフウマはすぐに分かつた。そして、同時に彼は閃いた……

「ハクダさんはどこですか？」

ミホがずばり聞く。

「ああ、ハクダ君の知り合いかね？ そうか、彼を心配して探しに来たのか……」

「良いから吐け。私はこんな場所には一分も長くいたくないのだ。」

「分かった、分かった……ハクダ君なら元気だよ。会いたいかね？」  
フウマはそう言って椅子から立ち上がると、三人の返事を待たずに本棚に歩み寄り、そして、そこに並べられているうちの一冊を奥の方へ押しこんだ。すると、ガタンと音がして、本棚が回転し、そこにエレベーターが現れた。

「彼なら地下の秘密工場にいるよ。このエレベーターでしか行けない……どうした？ 彼に会いたいなら一緒に行こう。」

手招きをするフウマ。あからさまに怪しかったが、しかし、ミホ達は意を決した。が、ブルボンだけは背を向ける。

「後は任せたぞ……」

「才前モ来イ！」

社長室に、ドリルの回転音が響いた……

続く

## 15・たくらみの底（後書き）

お久しぶりです。

企画小説も書きあげたので、ミホを再開しました。  
つてことで……

なんか、やる気が出ません……  
すぐダルイんです。

ああ、もうダルイな  
本当に、だるいなああああああああ

ぎゃああああああああああああ

つてくらいダルイです。

春だからでしょうか？

春はいけませんね。

雪や氷と一緒に脳味噌まで蕩けてしまいます。  
これを打開するには……

……桜でも見てこよう。

## 16・アンダーグランド決死戦

「ふぎやつ！」

薄暗い部屋の中に、ミホとブルボンの声が響いた。二人の体は無残にも、床に墜落してしまっている。部屋の入り口にある扉のノブを握りながら、黒尽くめの男はそんな二人を見下していた。

「ここで大人しくしているんだな……」

言葉と一緒に、扉の金具が悲鳴を上げた。そしてボタン、ガチャンと立て続けに声を出して、それ以降は全く黙ってしまった。その向こう側からは、黒尽くめの男の去っていく靴音だけが聞こえるばかりだった。

「くそ、なんでこの皇帝がこんな目に！ 貴様のせいだぞ！」

語調を荒げつつ、ブルボンはミホを睨みつけた。

「すみません……」

ビクリと肩を震わせて、ミホはうつむいてそれだけ言った。そして溜息を一つ……今思うことは、先ほどまで一緒だった電池のような同居人のことだ。

「ライアン君……酷いことされてないと良いけど……」

ふと、そんな言葉が漏れる。しかし、彼女が口走ったその四文字を、二人より以前から部屋にいたであろうその男は聞き逃さなかった。

「ライアン？ 今『ライアン』って言ったのか？」

声が出たので、ミホはパツと部屋の隅に目をやる。暗がりから歩み寄ってきたその男は、モジャモジャ頭に無精ひげという、二人も会ったことのある顔をしていた。

「ん？ お前達あ、あん時の！ こんな所で何してんだ？」

その男、ハクダも二人に気が付いたのか、やや高揚した声で聞いてきた。ミホは彼に事情を説明しようと、つい数分前のことを思い出す……



数分前……

ミホは胃袋を下から持ち上げられるような感覚に襲われていた。ミホとブルボン、ライアン、そしてフウマが乗った四角い箱はゴーストと重苦しい音をたてながら地中深くまで下っていった。ミホはその間、だまってフウマの背中を見ていた。その表情を覗い知ることができないが、おそらく、何かを企んでいるのであることは分かった。しかし、それでもミホはハクダを見つけるため、ライアンとの約束を果たすために、どうしてもそこに行かなくてはならなかった。

「さあ、着いたよ。」

エレベーター上部に取り付けられたランプの点灯を確認すると、フウマは言った。同時に、重量感のある鉄の扉が開き、ミホ達は青白い照明に照らされた。

数秒ほど目をパチパチさせると、そこに現れたのは見渡す限り続く巨大な工場だった。それも、ただの工場ではない。所々に、黒光りする『物騒な物』が並んでいるのが見えた。

「これが我社のもう一つの顔……兵器開発事業さ。」

口を開けたままその光景を見ているミホ達を見ながらフウマは言った。

「我社の技術を駆使して、自動攻撃兵器や、遠隔操作の無人戦闘機、戦車なんかを造ってるんだ。国家相手の美味しい商売だよ。」

その言葉を聞いてミホは振り返った。フウマはニヤニヤと笑っている……善良な人間でないことは確かだった。しかし、そんなことは今はどうでも良かった。ミホがここにやって来たのは、工場見学のためでも、フウマの陰謀を暴くためでもない……

「それで、ハクダさんはどこにいるんですか？」

「おっと、そうだったね……」

ミホが聞くと、フウマはすっと右手を掲げて見せた。するとその刹那、ミホは急に体の自由を奪われた。後を振り返ると、昨夜襲撃

して来た黒尽くめの男がいて、ミホの体を羽交い絞めに使っていた。そして、それはブルボンもライアンも同じだった。

「今、彼に会わせてあげよう……ただし、MGR-87は我々と一緒に来てもらおうか……」

彼らは手際よく、ライアンを怪しげな器具で拘束すると連れ去ってしまった。

「ライアン君！」

ミホはやめさせようと体をよじったが、しかし、男の腕から逃れることはできない。そうしているうちに、ライアンの姿は視界から消えてしまった。

「さてと、その二人は奴と同じ部屋にでもぶち込んでおけ。処分の仕方はおって考えることにする……」

「分かりました。」

……………

ミホの話を聞き終わると、ハクダは呆れてしまった。

「良くもまあ、ノコノコと乗り込んできたな……捕まえてくださいつて言ってるようなもんだぞ？」

「すみません……とにかく、ハクダさんを助けなきゃと思って……」

ミホは申し訳なさそうにうつむいている。どうしたものか……心なしか、部屋の空気は淀んでいた。

コンコン！

突然、部屋の中に扉を叩く音が響いた。ミホはハッと顔を上げて立ち上がる。

「はい？」

そして、来客を出迎えようと扉の方に向かった。しかし、肝心の扉が開かない……

「当たり前だろう。我々は閉じ込められているんだぞ？」

「あ、そっか……」

ブルボンの言葉を聞くと、ミホは思い出したようにドアノブから手を放した。しかし、そんな彼女の前で、扉からはガチャガチャと音が聞こえてくる……そして次の瞬間、扉は突然開かれた。

「ライアン！」

扉の向こうに立っていたそれを見ると、ハクダはすかさず駆け寄った。そこにいたのはライアンだったのだ。

「ミホ……博士……大丈夫デスカ？」

「おい貴様、なぜこの皇帝の心配をしない？」

「黙レ、クサレ外道。」

どうやら、互いに大事は無いらしい……ミホ達はほっと胸を撫で下ろした。

「それにしても、どうやって逃げ出してきたの？」

ミホはライアンに聞いた。すると、ライアンは何も言わず、黙って頭を回転させると廊下に立っている男を見た。ミホもその視線を追いかけると、そこにはプラチナ色の姿があった。

「TMさん！ どうしてここが分かったんですか？」

ミホが聞くと、TMは腕についた装置を操作して、目の前に立体映像を映し出した。どうやら、この建物の見取り図らしいそれには、見ると、中をうねうねと一本の黄色い線が駆け巡っていた。

「そのクサレ外道に発信機を付けておいた……これは発信機から送られてきた行動履歴だ。こいつを見てここまで来たと言う訳だ。」

「あ、陛下の背中に何か付いてます。」

「何だと！ 貴様、いつの間に……」

ブルボンは上着を脱いで、その背を払った。しかし、TMはそれを尻目に工場の方に目をやる。

「兵器の密造……これがアイネス・システムの秘密か……見逃す訳にはいかな。」

……

「何？ 逃げられただと？」

フウマはそれを聞くと、報告にやって来た研究員の頭を灰皿で思い切り殴りつけた。悶絶しながら研究員が言うには、銀河治安維持機構の調査官がやって来て連れて行ってしまったのだと言う。

「ちっ、ギンチキめ、もうこの場所を嗅ぎつけたのか……それで、奴らは今どこにいる？」

「ここだ！」

研究員とは違う声で返答があった。驚いてフウマが振り返ると、そこにはTMとミホ達が立っていた。

「フウマ・ジン！ お前の行為は『略取監禁の罪』及び『兵器製造法違反の罪』に該当する。」

「それと、ライアン君とハクダさんを酷い目に遭わせた罪です！」

「そして、この皇帝を愚弄した罪だ。」

「才前ノハ自業自得ダ、ウジムシ野郎。」

フウマは完全に包囲されようとしていた。全員で逃がさないように、じわりじわりと近付いていく。その勝ち誇ったような態度はフウマをこの上なく苛立たせた。

「コケにしゃがって……」

怒りの形相を浮かべながら、フウマはすぐ側にいた研究員に目配せした。研究員はキョトンとしていたが、しかし、フウマが顔面を一発殴ると、フウマの言わんとしたことが分かったらしく、壁にあるレバーを引いた。すると、突然壁の一部が開き、そこに隠し通路が現れた。

「思い知らせてやる！」

そう言い残して、フウマと研究員は通路に消え、そしてその入り口も閉ざされてしまった。

「くそ！ 逃がすか！」

TMはすぐさま、通路を再び開こうとレバーを引いたが、しかし、反応が無い。ロックされてしまったらしい……仕方なく、壁を破壊しようとTMは拳を突き出してチーム攻撃の体勢を取る。しかし、

それを発射しようとした時だった……

『そんなことをしなくても、私ならここだよ!』

突然、施設内のスピーカーからフウマの大声が聞こえてきた。そのあまりの大音響にミホ達は思わず耳を覆った。しかし、それと同時にさらなる轟音が響き渡り、目の前の壁全体が大きく開くと、中から巨大な二足歩行ロボットが出てきた。ミサイルやバルカンが搭載されている、見るからに物騒なロボットだ。中にはフウマと研究員が乗り込み、操縦しているらしい……

「馬鹿な……こんなもので私の捜査を阻めると思っているのか?」

TMはそう言うのと、壁に向けていた拳をロボットに向け、そしてビームの出力を最大に上げて発射した。黄金色の輝きがその場を明るく照らし、TMの放ったビームはロボットに命中すると爆音を上げた。

「何……!?!」

しかし、ロボットは無傷だった。

「馬鹿め! そんなものでこの『スーパージェノサイダー』を倒せるものか! フフン、今度はこっちの番だ…… 鬨り殺しにしてやる!」

その言葉と同時に、スーパージェノサイダーの脚が動き出した。一歩踏み出す毎に響くズシンという音が、その力強さと重量感を感じさせる。恐れおののいて、ブルボンは悪寒にブルツと震えると瞬時に踝を返して走り出した。

「それじゃあ貴様ら、後は任せたぞ!」

「ああ! ずるいですよ陛下、一人だけ!」

「あのクズには構うな! 来るぞ!」

気がつくともうスーパージェノサイダーの足は目の前まで迫っていた。慌てて避けるミホ達……しかし、安心したのも束の間、すぐにバルカン砲の銃口がミホの方を向いた。

「危ない！」

凄まじい音を立てて放たれる銃弾。それを見て、TMはミホの前に飛び込んだ。凄まじい破壊力に、プラチナ色のアーマーは大きくへこみ、その体は後にいたミホを巻き込んで吹き飛んでしまった。

「TMさん！」

TMは気を失っていた。それでも、バルカンは容赦なく二人を狙っている。ミホは急いで、TMの体を引きずると物陰に隠れた。

「困ったな、何か武器があれば良いんだけど……」

このままではやられてしまう……そう考えたミホだったが、しかしその時、横に大きな筒状の物があることに気付いた。いわゆるバズーカと呼ばれるそれだった。

「博士ガ、ソレヲ使エツテ。」

見ると、ライアンがそこにいた。離れたところで、ハクダが武器を漁っているのも見える……ミホは恐かったが、しかし意を決してバズーカを手にとった。

「食らえ！」

レバーを引くと、物凄い煙を噴き上げてロケットが発射された。そしてそれは、スーパージェノサイダーの右脚に当たり、炎と煙をあげて炸裂した。

「フン、その程度の武器でこのスーパージェノサイダーを……」

倒せるものか……そう言おうとしたが、次の瞬間フウマはすごい衝撃に襲われた。スーパージェノサイダーが転倒したのだ。

「どうした、何事だ！？」

驚いて、隣で副操縦士を務めていた研究員に聞く。研究員は目の前のモニターを覗きこんでいた。

「右脚部、損傷しました。もう、歩行は不可能です。」

「何！？ あんなロケット弾一発でか！？」

フウマが聞くと、研究員は頭を掻きながら渋い顔をした。

「すみません……実はこのスーパージェノサイダー、急いで適当に造ったもので、まだ点検もしてないんです……」

「馬鹿な！ 開発期限はたっぷり設けてやったはずだぞ？ それにお前順調だつて報告してたじゃないか！」

「すみません、あれウソです…… ネットゲームにはまっちゃって、気が付いたらもう期限前で……」

「……………」

動けなくなったスーパージェノサイダーの中で、フウマが研究員を殴りつける鈍い音だけが響いた……

続く

## 16・アンダーグランド決死戦（後書き）

ってことで、アイネス・システム編はこれで終わりです。

え？ この後どうなったか？

……しらね。

それはそれとして……

この間お花見に行ってきました。

一人で……

いや、一人で桜見るのもなかなか良いですよ。

近くのお茶屋さんで団子買って、桜の下に陣取ってそれを食べるんです。

それがまた美味しいこと……

え？ 花より団子？

そんなことわざしらね。



## 17・我こそは魔法少女

ミホは大きな溜息をついた。そして部屋の中を見渡す……この間までせつせと家事に励んでいた同居人の姿は無かった。あの後、アイネス・システムとの一件が片付いた後、ライアンはこの家を出て行ってしまった。今はまた、ハクダと一緒に暮らしている。別れ際、寂しそうにミホのことを見たライアン……しかし、自分達といるよりハクダといた方が良くと考え、ミホはその背中を押したのであった。にも関わらず、やはり彼女も寂しかった。彼の体が奏でる機械音が聞こえなくなっただけで、ミホは目の前の光景がひどくつまらないものであるように感じた。

「おい、ミホ！」

そこに突然、もう一人の同居人がやって来た。その顔を見ると、ミホはまた大きく溜息をつく。

「何ですか陛下……？」

「貴様……いい加減、ライアンのことは忘れる！」

ミホの態度に、ブルボンは眉間にしわを寄せながら言った。そして、「そんなことより……」と前置きすると本題を話し始めた。

「実は、我がブルボン帝国に足りないものがあると気が付いたのだ。」

「足りないものだらけじゃないですか……」

「やかましい！ まあ、聞け。私はこの間の一件が終わった後、良く考えてみたのだ。我々の非力さについてな……」

ブルボンはどこか遠くを見つめながら、ライアンがやって来てからのこと、アイネス・システムの地下で見たことを思い起した。ミホも一緒に、あの時のことを一つ一つ思い返していく。

「陛下なんか、全然役に立ってませんでしたしね。」

「うるさい！」

ブルボンはミホにゲンコツを食らわせつつ、しかし一度息を整え、

神妙な顔つきになって背筋を正すと話を続けた。

「我がブルボン帝国には国土がある……」

「私の家ですけどね。」

「国民もいる……」

「私と陛下だけですけどね。」

「そして、それを統べる権力がある……」

「ただのわがままな居候じゃないですか。」

ミホが小まめに突っ込みを入れてくるが、しかしブルボンはそれらをことごとく無視し、そして、その声にさらに力を込める。

「しかし、それらを守る力……すなわち、軍事力が無いことに気が付いたのだ！ 国家として軍事力の欠如は致命的だ！」

「ヤポンには軍隊ありませんよ？」

「自衛隊とか言うのがあるだろうが！ そう言う、建前上の話をしているんじゃないぞ！」

ブルボンは拳を固く握り締めながら強い口調で言った。彼の主張はついにそこで結論を向かえようとしていたのだが、しかし、ミホも伊達にブルボンと同居している訳ではない。そこまで来れば、彼が言わんとしていることはもう分かっていた。

「分かりましたよ……今度、空手道場でも見学に行きましょう。」

しかし、その言葉を言い終わると同時に、ミホの頭は本日二度目の硬い衝撃に襲われた。

「空手で弾道ミサイルが防げるかー！」

「みさいる！？ うちミサイルの標的にはありませんよ！」

ミホは反論したが、しかし、時既に遅し……完全に火が点いたブルボンを止めることはできなかった。

しばらくして……

二人は街のホームセンターから出てきた。しかし、欲しい物が手に入らなかったのか、ブルボンはしかめっ面をしている。

「まあ、ホームセンターにある物で弾道ミサイルが防げたら苦労は

ないですよ。」

ミホは、日用品の入った袋をブラブラさせながら笑った。ブルボンは一瞬ミホの方を振り返ってにらみつけたが、しかし言われてみれば確かに、『自衛隊』などと言って建前を気にする国の一般市場で武器が手に入るはずがなかった。それではどうすれば良いか？どこへ行くともなく、街の中を歩きながらブルボンは必死に考えた。そんなことで数分ほど歩いたところだった……

「あれ？ 何か、人だかりが出来てますね。」

街の中心にある駅前広場に來た時、ミホがそれに気付いた。ブルボンもそれが気になり、思考を一時停止してそちらに向かう。

「おい、貴様らだけ！ この私を前に行かせるのだ。」

ブルボンはそう言つて、無理矢理人の壁を割っていく。ミホもその後を、「すみません」と謝りながら続いた。そうして行くと、二人の目の前に立て看板が現れた。

「今時、立て看板って……」

疑問に思いつつも、二人はそれに書いてあることに目を通した。

ワキア王国主催 M-1グランプリ出場者募集！

最近、世界は何かと物騒である。我々、ワキア王国はこれが何か大きな凶事の前兆である気がしてならない。そこで、我々ワキア王国の持つ魔法の力を与えた魔法少女を、各国に一名ずつ置くことになった。その魔法少女を決めるのがこのM-1（マジカルワン）グランプリである。優勝者には魔法の力が使えるようになる魔具『マイニティークラウン』が送られ、『魔法少女マイニティー』の称号が与えられる。興味のある者は当日、会場に来て欲しい……

「ははっ、何だこりゃ……私達には関係ないですよ。行きましょう、陛下。」

ミホは掲示を読み終えると、「馬鹿馬鹿しい」と言つて看板に背を向けた。しかし、その瞬間ブルボンの手が伸びてきて、立ち去る

うとするミホの体を引き戻した。

「馬鹿を言え。これはチャンスだぞミホ！」

「何がですか……魔法とかワキア王国とか、色々怪しいですよ。大体どこですか、ワキア王国って？」

「ん、貴様知らんのか？ ……そうか、一般市民はあまり知らんかもな。」

怪訝そうなミホの顔を見ると、ブルボンはワキア王国について説明を始めた……

ワキア王国は遙か北にある、氷に閉ざされた小国である。その文化は独特で、科学に頼る他の国家とは違い、魔法を崇拝している……らしい。実のところ、その実態を知る者はいないのである。ワキア王国は五百年前から鎖国を掟としており、外部からも、内部からも、人の行き来を禁じている。もともと、国際会議などには遣いの魔獣を送ってくるので、ブルボンなど、国家の上層部に立つ（立っていた）者には割りと馴染みがあるのであるが……

「ますます怪しいじゃないですか！」

「黙れ！ とにかく、これはチャンスなんだ。私も奴らの魔法は何度か見たことがあるが、あれは凄いぞ！ お前が魔法少女になれば、ブルボン帝国の軍事は安泰だ。分かったらM-1とやらに出るんだ。」

「嫌ですよ……」

「フン、貴様の意見など知ったことか……なにに？ ほう……会場は主都アリマの『ナカヤマアリーナ』だそうだ。開催は十日後か……」

結局、ミホはM-1グランプリに出場することになってしまった。

十日後……

M-1グランプリ会場となったナカヤマアリーナで、ブルボンはキヨロキヨロと周りを見回してみた。千人はいるだろうか？ そこはたくさん乙女達で埋め尽くされていた。ミホは勝ち抜けるだろ

うか？ ブルボンはふと心配になった。左を見ると……柔道の打ち込み練習をしている少女……右を見ると……身長二メートル以上はあるだろうかと言う大女までいる……あんな少女達と闘った日には、ミホなどに勝ち目がある訳ない。ブルボンは、選考方法が『格闘』でないことを祈った。

『これより、適正審査を行います！ エントリー番号順に、決められたブースで審査を受けてください！』

遠くの方で、ワキア王国の遣いである魔獣がアナウンスをした。魔獣と言っても、ただの白いネズミにしか見えなかったが……それはともかく、第一審査である適性審査が始まるうとしていた。審査ブースに向かつて移動する乙女の群れの中を、ブルボンは目を凝らして見た。ミホの姿は見当たらない……代わりに、先ほどの大女が巨体を揺らしながら歩いて行くのが見えた。あいつが適正審査で落ちますように……と、ブルボンは心の中で祈った。

そして一時間後……

適正審査が終了した。一体どんな審査が行われたのかは、ブルボンには分からなかったが、しかし、大女が落ちたのか？ そしてミホは通ったのか？ それだけが気がかりだった。

「私が不合格ってどう言うことよ！」

突然の怒鳴り声だった。見ると、審査結果の書かれた紙を見ながら、先ほどの大女が震えている。どうやら落ちたらしい……ブルボンはプツと吹き出した。そして、そうやって見ていると、怒りが治まらない彼女の元に、先ほどの白ネズミが近付いていくのが見えた。「何か文句あんのか？」

「当たり前よ！ 何これ？ 不合格の理由、『体デカすぎ。見た目悪し』って！ あなた達は見た目で女を判断するつもり？」

女は自分の手の平より小さいその白ネズミをにらみつけた。しかし、白ネズミはまったく怯まない。

「見た目で判断するよ？ テレビアニメで魔法少女見たことないのか？ 皆、可愛いだろ？ 魔法少女にはルックスも求められるんだよ。」

合理的なような、理不尽なような……そんな言葉をサラリと言つてのけると、白ネズミは「不合格者は去れよ」と、トドメの一言を大女に浴びせた。これには、ついに大女も怒り爆発し、白ネズミを踏み潰そうと足を上げた。しかし、その刹那彼女の体は炎に包まれる。白ネズミが口から火炎放射攻撃をしたのである。

「魔法は無敵だ……そんな力技に頼っている時点で、お前の不合格は決まっていたな。」

白ネズミはそれだけ言うと、係員に火を消してもらっている大女に背を向けて去っていった。

しめしめ……ブルボンはほくそ笑んだ。ミホはルックスは悪い。それに力が重要でないなら、ミホにもチャンスは大いにある……と、そう考えて……

「陛下……」

そこに、ミホがやって来た。手には審査結果の紙が握られている。「おお、ミホ！ どうだったんだ、適正審査は？」

ブルボンが聞くと、ミホは満面の笑みを浮かべて、そして拳をコツンと自分の頭に当てて見せた。

「てへへ……落ちちゃいました！」

「何だと!？」

その言葉に驚愕し、ブルボンは信じることができず、ミホの手にしていた紙を奪い取った。

『貧乳すぎる。不合格!』

紙にはそれだけが書かれていた……

「貴様ー！　なぜ貧乳だつたんだー！」  
「仕方ないじゃないですかー！」

続く

## 17・我こそは魔法少女（後書き）

桜も散って、季節はこれから夏に移り変わっていくわけですが……季節の変わり目は面倒臭いですね。

暖かくして寝たら、朝汗でびっしょりでした。

逆に、Tシャツ一枚で寝たら、次の日風邪を引きました。

季節は私を舐めているんでしょうか？

てめー季節！　コノヤロウ！

ってことで……

「こう言う時こそ一段と服装に気をつけないといけないな」と言うことを学びました。



## 18・魔力を我が手に

響き渡る歓声と悲鳴。乙女達の熱き戦いは観客や関係者達の心を取り込み、大きな波となつてナカヤマアリーナを揺らした。しかし、盛り上がるM-1グランプリのその裏で、ミホとブルボンはコソコソと辺りの様子を覗っていた。

「陛下、何をしているんですか？」

自分でも不審になつて、ミホはブルボンに尋ねた。

「うるさい、声を出すな。」

しかし、ブルボンはそう言うばかり……ミホはどうして良いか分からず、とりあえず、ブルボンの真似をしてキョロキョロと周囲に目を配つた。

そこは、ナカヤマアリーナの裏側にある係員用の通路。今まさに会場でM-1グランプリの真つ最中なので、係員もそっちに出払っているのか、時折数名の人間が通るだけで、ミホとブルボン以外の気配は感じられなかった。静かで、遠くから聞こえてくる歓声以外の音は無い。しかし、下の方で淀んでいた空気は突如かき乱される。「もうすぐ決勝だな……そろそろマイニティークラウンを会場に移そう。」

「そうだな。」

係員が二人、通路にやつて来たのである。ブルボンはその声を聞くと、サツと物陰に隠れた。意味は分からなかったが、ミホも隠れる……そんな二人の前を、係員達はトコトコと靴を鳴らしながら歩いていった。

「よし、奴らの後を付けるぞ……」

『M-1グランプリ実行委員会』とプリントされた背中を見ながら、ブルボンは小声でミホに言った。しかし、その言葉を聞くと、ミホはいよいよ「ブルボンが何か良からぬことを企んでいる」ということを確信した。

「何をするつもりですか？」

ミホは訝しげな顔で聞いた。ブルボンの顔が、一瞬ミホの方を向く……「つまらん質問だ」と言いたげな顔だった。

「決まっとるだろ。マイニティークラウンとやらを頂戴するのだ。」

「ええー！？　ダメですよ、バレたら怒られるどころじゃ済まないですよ！」

ミホは考えを改めるよう、ブルボンに進言……しようとしたが、ブルボンはミホの言葉を無視して係員達の背中を追って行ってしまった。残されたミホは「どうしたものか？」とおろおろしてみたが、しかし、放っておく訳にもいかなないのでブルボンを追いかけた……

「ブルボン・アタック！」

技名と共に鈍い音が響き、マイニティークラウンを移動しようとした係員達は力無く崩れ落ちた。横たわった二つの体を見ると、ブルボンは振り下ろしたモップを肩に担ぎ直し、そしてニタリと笑った。

「馬鹿な奴らだ……最初から大人しく渡していれば、痛い目に遭わずに済んだものを……」

「最初から問答無用で殴ったのは陛下じゃないですか……」

「うるさい奴め……まあ良い、マイニティークラウンを頂くとしよう。」

ブルボンは目の前を見た。ガラスケースの中に、それはある。黄金色に輝き、たくさんの宝石で装飾された小さな冠……見ているだけで心を鷲掴みにされる神々しさに、ブルボンはゴクリと生唾を飲みこんだ。

「フツ、いかにも魔法道具と言う感じだな……」

「あの陛下、やっぱりやめましょうよ……ダメですよ盗みは……」

ブルボンがガラスケースからマイニティークラウンを取り出したところで、ミホは彼が持つそれにそっと手を添えて言った。しかし、ブルボンはその手をピシャッと叩くと、先ほど係員を殴るのに使っ

たモップをミホに渡した。

「私だつてこんなことはしたくなかったが、貴様が係員を殴ってしまったからな……もう引き返せないだろ。」

「な、殴つたのは陛下じゃないですか！」

「何のことかな……言っておくが、そのモップからは貴様の指紋しか出てこんぞ？」

そう言うつと、ブルボンは手にはめていた白い手袋をミホに見せつけた。ミホはそれを見ると、「そう言えば、この男は暴君だった……」と思い出した。そう、言葉が通用する相手ではない。ミホはモップを脇に捨てると、再びマイニティークラウンに掴みかかった。

「勝手なことばかり言つて！ これは、このままここに置いて行きます！」

「おい、貴様何をする！ 我がブルボン帝国の国防の要となる兵器に気安く触るな！」

「何が国防ですか！ こんなもの無くても、防犯グッズがあればうちには十分です！」

「防犯グッズで戦車の侵攻を妨げられるかー！」

「うちには戦車なんて来ません！」

激しく言い合いながら、二人はマイニティークラウンを奪い合う。しかし、十回ほどそれが二人の間を往復した時だった。突然、部屋の扉が開いた。それに驚いて、二人はマイニティークラウンの両端を掴んだまま扉の方を見た。大きく開け放たれた扉……しかし、そこには誰の姿も無い。

「どこ見てんだよ。ここだよ、ここー！」

いや、一瞬目に入らなかったが、そこには確かにいた。一匹の白ネズミが……そう、M-1グランプリ開催のためにワキア王国から派遣された魔獣、ラスカルである。

「お前ら、ここで何をしてやがる。マイニティークラウンをどうす

るつもりだ？」

その小さく可愛らしい見た目からは想像もつかないほどドスの利いた声で言いながら、ラスカルは二人の方にジリジリと歩み寄ってきた。口から出る炎で丸焼きにしてやるうか、それとも、尻尾から出る電撃でビリビリ言わしてやるうか……と、そんなことを考えながら。しかし、ブルボンはラスカルが目の前までやって来たのを確認すると、ポケットから何かを取り出して、それを彼に見せつけた。ラスカルの眼がクリッと動く。目の焦点が合うと、そこにはチーズが現れた。

「こいつをくれてやるう。」

「わーい！」

ラスカルはチーズが大好きだった。チーズさえあれば、他の物はいらなくらい……そうマイニティークラウンさえも……

「フン、所詮ネズミか……今のうちに行くぞ。」

「ちよつと、陛下！」

チーズに夢中のラスカルを尻目に、ブルボンはミホの腕を強引に引っ張ってその場を去っていった……

その頃、M-1グランプリ会場では一人の少女が拍手と歓声、嫉妬の視線とスポットライトをその一身に集めていた。年の頃はミホと同じくらい。綺麗な黒髪を肩の下まで流したその少女は、ミホと違って年相応に膨らんだ胸に両手を置いて、喜びを噛みしめていた。「優勝はオトナシ・スズカさんです！」

司会進行を務めていた女性の声のアリーナ内に響き渡る。割れんばかりの拍手がもう一度……スズカはそれに応えるように手を振った。

「それでは、主催のラスカル様よりマイニティークラウンが授与されます。」

司会の女性が言うと、隅に控えていたオーケストラが一斉に演奏を始める。流れるような弦楽器の音に軽快な管楽器の音が重なる、

授賞式のBGMだ。しかし、そこにやって来たラスカルの一言が、そんな荘厳な雰囲気をぶち壊した。

「スズカ、早速だけど仕事だ！ マイニティークラウンが盗まれた！」

「ええ、盗まれたの！？」

感動と達成感に浸っていたスズカだったが、驚いて上擦った声を上げてしまった。しかし、ラスカルは彼女に頭の中を整理する暇も与えない。

「とにかく急いで追うぞ！」

チーズのカスが付いた口で言うと、ラスカルはスズカの肩にピヨンと飛び乗った……

一方、ミホとブルボンはナカヤマアリーナから少し離れた公園にいた。時間的に人も疎らなそこで、ブルボンは懷からマイニティークラウンを取り出した。

「陛下、今からでも遅くないですよ……返しに行きましょうよ……」

「うるさい、黙れ。」

ブルボンはミホの言葉を一蹴すると、それを彼女の頭に載せた。

「ふむ、なかなか様になっているじゃないか。よし、さっそく魔法を使ってみる。」

「コラー、お前らー！」

しかし、そこにラスカルとスズカがやって来た。

「やってくれたな、コソ泥め。だがここまでだ！ 魔法少女がお前らを成敗してくれる！」

ラスカルはスズカの肩の上で精一杯に吠える。しかし、ブルボンはそれを聞いても眉一つ動かさなかった。すかさず、ポケットからそれを出す。チーズである。

「もう一つやるぞ。」

「わーい！」

喜ぶラスカルの前で、ブルボンはチーズを遠くに向かって投げた。

すると、ラスカルはスズカの肩から飛び下り、チーズを追って走り去っていった。その白い姿が見えなくなる……。そこで、ブルボンは残されたスズカの方を見た。

「さて、邪魔者は消えた……。小娘、お前ごときにこのブルボンを倒せるか？ ミホより乳がデカイくらいで良い気になるなよ！」

ブルボンは邪悪な笑みを浮かべながら、スズカのアゴ先に指を添えて彼女の顔をぐいっと持ちあげた。しかし、スズカはツンと澄ましたまま、ブルボンをにらみつけて言った。

「あなたのような悪党に屈するもんですか！」

「威勢が良いな……。だが、すぐにその顔を恐怖で歪ませてやるぞ。」

ミホ、魔法でこの小娘を痛めつけてやれ！」

スズカのアゴから手を放すと、ブルボンは後にいたミホに命令した。ミホはそれを聞くと、黙ってスズカの方に歩みを進める。

手に入った最高の軍事力、その力がどれほどのものか……。ブルボンはワクワクしながら、巻き添えを食らわないように後に下がった。目の前では、遂にミホとスズカが対峙する。張り詰める空気……。その緊張感を断ち切るように、ミホは頭にあったマイニティークラウンを手につくと、それをスズカの頭の上に移した。

「……って、コラ！ 何で大人しく渡してるんだ、ミホ！」

「いや、元々この人の物ですし……」

ミホはそう言うのと、今度はスズカの後に身を隠しながらブルボンの方を指差した。

「あの人、極悪人だから徹底的に痛めつけてあげてください。」

「分かったわ、危ないから下がって！」

スズカは絵顔でミホに言うのと、振り返ってブルボンをにらみつけた。その視線だけでもかなりのオーラがあり、ブルボンは思わず腰を抜かした。

「スズカ！ 変身の呪文は『ドコーマ・ディッテ・モニゲート・ヤル』だ！」

さらに、戻ってきたラスカルがチーズのカスにまみれた口で叫ぶ。

それを聞くと、スズ力はゆっくりと呪文を唱えた。

「ドコーマ・ディッテ・モニゲート・ヤル！」

刹那、彼女の体は激しく輝き、一瞬、その裸体のシルエットを披露しつつ、次の瞬間にはアニメチックな衣装でその体を包んでいた。今ここに、魔法少女マイニティー・スズ力が誕生したのである。

「人の物を盗むなんて最低！ 覚悟しなさい！」

スズ力はそう言うと、魔法のステッキを取り出し、その先端に力を収束させ始めた。ステッキの先端は、いかにも必殺技っぽいカラフルな光を放ち、ブルボンの怯えきった表情を照らす。

「ま、待て！ 話せば、話せば分かる！」

両手を突き出してブルボンは叫んだ。しかし、遅かった……ステッキの先に集まった魔法力は光の雨になって降り注ぎ、ブルボンの邪悪な心ごとその体を焼いた。

「だから、盗みはダメだって言ったのに……」

黒コゲになったブルボンを見ながら、ミホは呆れて、溜息をつくばかりであった……

続く

## 18・魔力を我が手に（後書き）

つてことで、このお話は終了です。  
次回をお楽しみに。

それはそうと、もう直ぐゴールデンウィークですね。  
黄金週間です。

皆さんはどうやって過ごしますか？

あ、聞いてみただけで別に興味はありません。

私はそうですね……

嫁さんと温泉でも行きましょうかね。

嫁なんていませんけどね！

………

大人しく家で小説書きますよ。  
フンだ！



## 19・父と娘とメイドと皇帝

暖かい日差しの中を柔らかな風が静かに吹いている、そんな陽気の日、ミホとブルボンは街を歩いていて、穏やかで明るい空と同じく、ミホの心はどこか軽やかである。

今日二人はヒサエの元に、例のごとく支払いに行くのだが、今まで散々苦しめられてきたヒサエへの債務も、実は完済間近まで来ているのである。その事を考えるだけで、ミホの背筋は伸び、何だかスキップでもしたくなるような気分であった。

「フン、私はあの女の顔を見なければならぬと思うだけで憂鬱だ……」

フンフンと鼻歌を口ずさむミホを見て、ブルボンは溜息混じりに言った。しかし、そんな彼の願いも虚しく、目の前にはもうアマゾノ探偵事務所が迫っていた。

しかし、そこまで来て、突然ミホは歩みを止めた。その視線の先にはアマゾノ探偵事務所の扉……そして、そこから出てきた男の姿があった。異様な雰囲気を漂わせる男であった。真っ黒なスーツとシャツ、そしてその上から白いコートを着ており、長い髪の毛をオールバックにして後ろで一つに縛っている。痩せた顔からはどこか近寄り難いオーラ……周囲からすればそんな印象を受けそうな男であるが、ミホにとっては違った。彼女の目はその顔をしっかりと捉えていた。

「お父さん……?」

目の前に立っている男は、五年前に姿を消してしまった父親に似ていた。随分と雰囲気は変わってしまったが、しかし、娘のミホはしっかりとその面影を見つけることが出来た。が、しかし男はそんなミホの視線に気が付かなかったのか、サングラスをかけるとミホとは反対の方向へ歩き出してしまった。ハッとして、ミホは駆け出した。その男の背中を追って……

「お父さん！」

男が曲がった角をミホも曲がって、そして同時に叫んだ。しかしその姿はもう、ミホの視界にはなかった。

ミホの父、コジマ・サダヒロは彼女の知る限り普通のサラリーマンであった。ミホは三才の時に母親を亡くしたので、はつきりと記憶している肉親はサダヒロだけである。彼は無口で、あまり感情を表に出さない人間ではあったが、しかし、ミホが泣いている時などはよくその膝に彼女を乗せ、静かに微笑みながら黙って頭を撫でてくれるような、そんな優しい父親だった。しかし、そんな記憶の中の父親の微笑みがミホを悩ませる……先ほどの男の顔は確かにサダヒロに似ていた。しかし、五年前のそれより痩せていたようにミホは感じた。それに、その格好もただならぬものだった。ミホの前から消えてからの五年間に、一体何があったのか？ いや、そもそも、あれは本当にサダヒロだったのか？ そんな疑問が、ミホの頭の中で低い音を立てながらぐるぐると回った。

「いらっしやいませ！ ご主人様、お嬢様！」

「へ？ な、何？」

考え込んでいたところを、ミホは突然首根っこを掴まれて、強引に現実に戻された。目の前には可愛いメイド達がいる。そこはメイド喫茶マックイーンだった。

「何で？ メイド喫茶？」

「貴様、話を聞いていなかったのか？ あの女探偵の所で、ここの割引券を貰ったんだろうが」

ブルボンの言葉を聞いて、ミホはヒサエの事務所でのことを思い出す。そう言えば、そんな物を貰った気がしないでもない……しかし正直、それどころではなかったので覚えていなかった。

『さっき来た男？ さあね、何者かは知らないけど、前受けた仕事のことで話を聞かれたただだよ……あの男がどうかしたのかい？』

ヒサエの言葉で、ミホが覚えているのはそれだけであつた……

「あの、お嬢様？」

また考え事の世界にいたらしい。気がつくと、ミホの目の前にはメイドの顔があつた。

「御注文をお伺いしたいのです。無視したら、イクノでも怒りますよ？ プン、プン！」

イクノは可愛らしくポーズをとりながら頬を膨らませた。それを見ると、ミホは慌ててメニューを手に取る。

「えっと……じゃあ、イチゴパフェで」

「かしこまりました！」

元気良く返事をして、厨房の方に駆けていったイクノ。彼女を見送つたところで、ブルボンは向かいに座るミホを見た。

「おい貴様、さっきから何だ？ 何をするにも上の空ではないか」

「そ、そうですか？」

「フン、何をそんなに考え込んでいるのかは知らんが、あまりこの皇帝を蔑ろにするなよ？」

ミホに釘を刺すと、ブルボンは視線を彼女から外し、再びイクノが消えていった厨房の方を見た。トレーにオムライスとイチゴパフェを載せたイクノがちょうど出てきたところだった。

「お待たせしました！ 『ルンルンイチゴパフェ』と『愛のニヤンニヤンオムライス』です！」

「何ですか、ニヤンニヤンオムライスって……」

「うるさいな、腹が減つたんだよ……おい、ケチャップの文字は『ブルボン陛下LOVE』で頼むぞ」

「はい！」

何を頼んでいるのか……ミホは若干呆れて溜息をつこうとした。  
が……

「もっと心を込めろよー！」

突然、店内に男の怒鳴り声が響き渡つた。溜息をつく予定だった

ミホの口であつたが、しかし、予定を変更してそのまま息を飲み込む。びっくりして咽ながら振り返ると、どうも衝突ついたての向こうにいる客が騒ぎを起しているらしかった。聞こえてくる怒声と、皿の割れる音。かなりエキサイトしているようである……

「何なんでしょうね？」

「さあな……しかし、よくよく騒ぎの起きる店だな」

何が起こっているのか？ 好奇心に駆られ、ブルボンは席を立つと騒ぎの渦中となっている客席の方に向かった。しかし、ブルボンが近付いたところで、突然男が一人吹っ飛ばされてきた。

「ふぎやッ！」

ブルボンはそれに巻き込まれて激しく床に叩き付けられた。鈍い痛みが尻から背中にかけて広がる。それに悶えながらも、ブルボンは自分の上に横たわっている男を見た。頬を赤く腫らしているが見覚えのある顔……店長のメジロだった。

「おい、一体これは何の騒ぎだ？」

いつまでも自分に体重を預けているメジロを邪魔そうにどかしながら、ブルボンは彼に聞いた。

「いやね……メイドの子が一人、変なお客に絡まれちゃって……」

メジロはそう言いながら、ずれたメガネの位置を直して客席の方を見た。ブルボンもそちらに目をやる……男が一人、喚き散らしているところであつた。

「俺んちに来いよ！ 俺だけのメイドになれよー！」

「い、嫌……」

「くそ！ やっぱり、お前ら嘘っぱちじゃねえかああーッ！」

……ブルボンは静かに視線を戻した。

「何だ、あのクズは？」

「何かね、営業とかじゃなくてね、本気でメイドになつて欲しいらしいんだけど……困ったなあ……」

メジロは首を横に振って溜息を漏らした。ブルボンはそんな彼の様子を見ると、頭を回転させ始めた。『人が困っている』と言うこ

とは、即ち、『足元を見て小金を稼ぐチャンス』なのであるから……  
「よし、私に任せろ」

数秒後、ブルボンは自分の胸を叩きながら言った。

「で、何で私がメイドの格好しなきゃいけないんですか？」

イチゴパフェを食べていたところをいきなり呼びつけられ、何の説明も無しに衣装チェンジさせられたところでミホは尋ねた。しかし、ブルボンはニヤリと笑うだけで何も言わず、そのままミホの腕を引っ張って騒ぎを起している客の所に向かった。すると、エキサイトしていた男の目がミホの方を向いた。ミホはその血走った瞳にややたじろいだ。しかし、ブルボンはお構い無しに話を始めた。

「今日から、この『ミホ』がお前だけのメイドだ」

「ぬええ！」

突然のブルボンの発言に、ミホは自分でも笑ってしまいそうになるほど変な声を出した。しかし、そんなミホを他所に話は進む。

「本当に？ その子が僕のメイドに？」

「ああ、本当だ。こいつは好きにして良いぞ」

「ちよつと、陛下！」

置いてけぼりにされそうになったので、ミホは慌ててブルボンの腕を掴んで引き寄せ、耳打ちをした。

「どうということなんですか！」

「貴様があのクズに仕えると言えば、あいつはこれ以上騒ぎを起さんだろ。一件落着という奴だ……メジロから報酬も出るんだぞ？」

「どこが一件落着ですか！ 私はどうなるんですか！」

「大丈夫だ、ほとぼりが冷めた頃に逃げ出してくれば良からう」

ブルボンはそう言ってクツクツと笑った。が、しかしその刹那、後から肩を掴まれた。

「ねえ、コソコソ話してるつもりだろうけど、思いつきり聞こえてるんだけど……」

振り返ると、そこには目を真っ赤にした客の男……

「お前ら嘘っぱちじゃねえかああーッ！」

ついに怒りが最高潮に達した男。言葉にもならない声で怒鳴り散らすと、両手で側にあつた椅子を掴んで振り上げた。それで何をするつもりかは、容易に想像がつく……ブルボンは咄嗟にミホを盾にした。

「ちよっ！ 陛下！ きゃあああッ！」

バキッ！ と、店内に音が響いた。それを聞きながら、ミホは体をガチガチに強張らせる。

「ん？」

しかし、いつになつても痛みが襲つてこないの、ミホは恐る恐る目を開けてみた。するとそこにあつたのは背中……黒いスーツに白いコートを着た男の背中であつた。男は、自分が殴り倒した客の男にトドメの蹴りをお見舞いすると、後はそのままレジに向かい、少し多めに金を払うと黙つて出口に向かつた。

「待つて！」

呆然と男の行動を見ていたミホだったが、男が店を出ようとしたところでようやく声をかけた。ミホの声を聞くと、男も立ち止まつた。

「お父さん……だよね？」

ミホの問いに、男は何も言わず振り返ると、かけていたサンングラスを外した。間近でその顔を見てミホは確信した。やはりそうだ……

「何で？ お父さん……」

何と言つて良いのか分からず、とりあえず、ミホはサダヒロの目を見た。サダヒロもミホを見ている。

「……元気にしてるか？」

ふと、サダヒロの唇が動いた。

「うん……」

「そうか……」

「うん……」

それ以上、言葉が出なかった。思わずミホは居心地が悪くなり、

視線を足元に落とす。本当は聞きたいことが色々あるのだが……いざとなると何も聞けなかった。しかし、一方サダヒ口は、その視線をミホから後ろにいる長身の男に移した。

「シャレー・ブルボン五世……」

その名を呟くように言った。するとそれまで、黙って二人を見ていたブルボンも近付いてきた。

「この皇帝を知っているのか？」

「仕事柄な……なぜここに？」

「陛下は……今、うちに居候してるんだよ……」

「そうか……」

何とか口は動かししたが、ミホは相変わらずうつむいたままだった。サダヒ口はそれからしばらくの間、そんな彼女を見つめていたが、しかし、やがて黙って踵を返した。

「お父さん！」

そこでようやく、ミホは顔を上げるとその背中に向かって言葉を発した。

「どうして出ていっちゃったの？　今、何してるの？」

ずっと抱えていた疑問を、面と向かつては聞けなかったことを、ミホはサダヒ口の背中にぶつけた。それを聞くと、サダヒ口は一瞬だけミホの方を見たが、しかし、サングラスをかけると一言だけ残して店を出ていった。

「元気でな……」

「いつてらっしゃいませ、ご主人様！」

メイドの声が響く中、サダヒ口は再びミホの前から姿を消した。呆然とするミホの頭の中に、一つだけ新しい疑問を残して……

「お父さん、何でメイド喫茶に……」

続  
く



## 19・父と娘とメイドと皇帝（後書き）

ってことで19話でした。

でしたが、そんなことより……

ゴールデンウィークです。

うきうきのお休みのはずなんですが、私はちょっと不満です。

出かけようにも、どこも混んでるし……

お金下ろそうにも、ATMやってないし……

実家に帰ろうにも、連休微妙だし……

ゴールデンウィーク……なんて忌々しいやつなんでしょう。

なので、今日はちょっとゴールデンウィークに復讐をしたいと思います。

ゴールデンウィークの「ー」を一本動かして……

ゴールデンウィーク

やーい！　ざまーみろー！

ってことで、皆様。

残りのゴールデンウィークをお楽しみください。

## 20・自給自足は未知との遭遇

ある朝、ブルボンは朝食をとりながらミホに聞いた。

「この朝飯の食材は、どこで手に入れたものだ？」

「え、街のスーパーですよ？」

「なるほど……」

ダンツ！ と、突然テーブルが打ち鳴らされた。そして、間髪入れずに怒鳴り声が響き渡る。

「ふざけるな！」

「何がですか！？」

そんなことがある前日……

ブルボンはテレビを見ていた。と言っても、別に見たくて見ていた訳ではなく、他にすることもないのでただ眺めていただけなのだ。……とにかく、ブルボンはテレビ画面に流れているワイドショーをぼーっと見ていた。今日の話題は有名政治家の謝罪会見、有名歌手の謝罪会見、有名アスリートの謝罪会見、そして、幼稚園でおもちやを横取りしたヨシオ君の謝罪会見だった。どうもこのヤボンと言う国は、人に謝罪をさせることを一種の娯楽としているらしい……ブルボンは呆れつつも、しかし人が頭を下げているのを見るのは彼も楽しいので、そのままテレビ画面を見ていた。

「次のトピックスです。今日、政府はヤポンの食糧自給率が過去最低になったとして、これに対する……」

やっと謝罪以外の話題になった。食料自給率の問題……それを見ると、ブルボンはフンと鼻で笑った。

「馬鹿どもめ。謝罪会見にばかり力を注ぐからそうなるのだ。その点、我がブルボン帝国は……」

ブルボン帝国は、どうなのだろう？ その辺はミホに任せっきりにしていたので、ブルボンは「はて？」と首をひねった。

「で、聞いてみれば『街のスーパーで買って来た』だと？　つまり、全部ヤボンからの輸入品ということではないか！」

ブルボンはもう一度テーブルを叩いて言った。しかし、ミホは「意味不明」と眉間にしわを寄せながら味噌汁をすすっている。

「しょうがないじゃないですか。うちは農家じゃないんですから」「馬鹿者！　自給率0パーセントということは、他国に依存して生きていかなければならないということなんだぞ。国家として恥ずかしいのか！」

「恥ずかしくありませんよ！　一軒家のくせして国家を名乗って、自給率気にしてる方が恥ずかしいですよ！」

「このたわけが！」

ミホとしてはまったくの正論を並べたつもりだったが、ブルボンの怒鳴り声と共にテーブルが引っくり返り、朝食と食器が宙を舞った。ガシャガシャガタン！　と耳をつんざくような音に、ミホはビクツと肩を震わせて丸くなった。そして、そんなミホの前でブルボンは主張を続けた。

「よし、今日から我々は自給率100パーセントを目指して生活するぞ！　そういう訳だ、さっさと部屋を片付けろ。ホームセンター行くぞ」

「散らかしたの陛下じゃないですか……それにホームセンターって、結局ヤボンからの輸入品じゃないですか」

そんな訳で、ミホとブルボンはホームセンターに向かい、自給率を上げるための対策をすることになった。

「……で、ホームセンターに行ってきた訳だが」

帰って来ると、ブルボンとミホはとりあえず買ってきたものをリビングに広げてみた。しかし、どうも釈然としない……

「ミホ、その水槽に入っている奴は何だ？」

「え？　陛下に言われた通り買った、魚の稚魚ですよ？」

水槽の中には、確かに小さな魚達が泳いでいた。赤くて綺麗な魚だ……

「金魚が食えるか！ 何のために行ったと思つとるんだ！」

「だって……このお魚さん達しかいなかったんですもん……」

「この能無しが！」

ブルボンは思い切りミホの頭にゲンコツを落とした。しかし、ミホは殴られた所を押さえつつ、涙を浮かべた目でブルボンをにらみ返す。

「じゃあ言わせてもらいますけど、陛下は何でザリガニなんて買ったんですか！」

「な、なんだと！？ こいつは、ロブスターの子供じゃないのか！？」

「……………」

それは、二人が自分達の無能さを痛感した瞬間だった。二人が黙りこむと、リビングには虚しさだけが漂った……。が、そんな重苦しい静寂の中で「ピーピー」と元気な声を上げる者がいた。見ると、それはフワフワとした、黄色い希望の光だった。

「まあ、とりあえずこいつは使えそうだな……」

それは、ホームセンターの駐車場に出ていた露店で買ったヒヨコだった。

「フフツ、ヒヨコよ……早くでかくなって、たくさん卵を産めよ？」

「でも、この子オスですよ」

ミホの言葉に、ブルボンは愕然とした表情で振り返った。彼は知らなかったのだ、露店などで売られているヒヨコは、養鶏場で不用とされたオスばかりであることを……。つまり、目の前でピーピー言っているのもオスなのだ。それが分かったと、ブルボンは力なく、フワリと立ち上がった。

「仕方ない、こいつは今晚唐揚げにでもするか……」

「ええ、やめてくださいよ！ ピー太を殺さないでください！」

「なにを名前まで付けとるんだ！ ペットとして買った訳ではない

のだぞ！」

きつと、その時誰かがこの家の窓を覗いたなら、サスペンスドラマのワンシーンかと思ったことだろう。ブルボンは台所から包丁を持ち出し、ピー太の抹殺を謀った。しかし、そこはミホの必死の抵抗に遭い、結局ピー太はそのまま家で飼われることとなった。結果、二人の手元に残ったのは野菜の種だけだった。

「まあ、肉は輸入で我慢するとして、こいつはいけそうだと思うんだ」

「そうですね……」

「よし、適当に家の周りにでも蒔いておけ」

種の袋を投げて渡しながら、ブルボンはそう言った。しかし、その言葉を聞いたミホは苦笑いを浮かべる。

「陛下……こう言うのはまず土を耕して畑を造って、そこに蒔かないと……それから毎日の世話とかも……」

煩わしすぎて、ブルボンはミホの説明を聞く気にもならなかった。とりあえず、その感情は一言で言い表すことができる……

「面倒臭い！」

野菜も却下……二人は結局無駄な買い物をしただけで、帝国の自給率は0パーセントのままだった。

「ピー太は無駄な買い物じゃありません！」

「うるさい！」

しかし、どうしたものか……ブルボンはその日、夜がふけるまで考えた。

三日後……

二人は電車を乗り継いで、少し遠くの町までやって来ていた。ミホは、なぜ自分がそこにいるのかをまだ聞かされていない。例のごとく、朝いきなりブルボンに叩き起こされ、「出かけるぞ」と言われて連れて来られたのだ。

「あつた！　ここだな」

大きな屋敷の前まで来ると、ブルボンは言った。立派な屋敷だった。

「陛下、ここは何なんですか？」

「ふむ、私の大学時代の旧友が住んでいるのだ……おい！ テンホウイン！ テンホウインはいないのか！」

説明もそこに、ブルボンはドアをガンガンと叩きながら中に呼びかけた。近所迷惑極まりないが、しかししばらくすると扉が開いて、中から住人が顔を出した。目の下に隈のある、キノコのようなヘアースタイルの、しかし整った顔立ちをした男だった。

「テンホウイン！」

「ん？ お前、ブルボンか？ 随分とまあ久しぶりだな」

男の名前はテンホウイン・クモワカ。ヤポン人だがブルボンと同じく、ダーブ連合王国立エプシーム大学を卒業しており、今はまたヤポンに戻って遺伝子工学の研究をしている。もちろん、ブルボンの友人というだけあってろくな研究はしていないが……

「エプシームの卒業式以来だな。貴様、相変わらず怪しげな研究をしているのだろう？」

「ハッ！ うるせえよ……お前こそ、てつきりマグニテのクーデターで殺されたと思っていたが、どうやら死に損なったようだな」

「やかましい！」

立ち話も何なので、二人とミホは客間に移動した。メイド服を来たハゲ親父がお茶とお菓子を持って来てくれたこと以外は、至って普通の歓迎だった。紅茶を飲みつつ、ブルボンはマグニテを追われてからの話をする。テンホウインは笑いながら、そして所々腹を抱えながら、帝位を奪われた友人を哀れむ様子も無く、それを聞いていた。

「ブルボン帝国か……馬鹿馬鹿しいが、しかしカオスでグッドな話だな」

「で、今日はその関係で貴様の力を借りに来たのだ」

「ん？」

テンホウインが聞くと、ブルボンは帝国の自給率が0パーセントであることに危機感を持つて話を話した。

「まあ、人口二人じゃあな……で、俺にどうしろってんだよ？」

「ふむ、遺伝子操作で、『何もしなくても勝手に育って勝手に増える、肉にも野菜にもなる家畜』を造って欲しいのだ」

「無茶苦茶なことを言う野郎だな……鋤を持って土を耕せよ」

「断る。私は皇帝なのだ」

ふんぞり返るブルボンに、テンホウインは呆れてしまったが、しかし、頬に手を当ててしばらく考えると口を開いた。

「お望みのモノができるか分からんが、試してみるか……俺が最近発明した『装置』を……」

そう言うと、テンホウインは二人を地下の研究室に連れていった。そこはコンピュータやら小難しい本やら……そして、なにやら怪しげな装置が置いてあった。テンホウインは、その装置を起動すると、二人の方を見た。

「こいつは『ゲノミキサ』と言ってな。あらゆる生物の遺伝子を合成して、まったく新しい生物を誕生させる装置だ」

「ほう……つまりこいつを使えば、思いのままの家畜が作れる訳だな？」

「いや、そう簡単にはいかねえんだ。何しろゲノミックスはランダムに行われるからな。結果は運次第だ。さっきハゲ親父がいたろ？あれも巨乳で、めっちゃくちゃ可愛くて、ツンデレのメイドを作ろうと思った結果誕生したもんだからな……」

ブルボンとミホは、先ほど紅茶を淹れてくれたハゲを思い出した。あれは『従順なハゲ』だった。

「全然違うな……」

「あの、陛下……怪しすぎますし、やめた方が……」

「ん？ む……しかし、物は試した。やってくれテンホウイン！」  
「あいよ」

ブルボンが言うと、テンホウインは装置の脇にあるコンピュータ

をカチャカチャと操作し始めた。すると、装置はゴーッと低く唸り始める。合成が始まったのだ。あの中で得たいの知らない生物が生まれようとしているのかと思うと、ミホはかなり不安だった。何にせよ、ハゲ親父の肉を食べるのはごめんだ。

「あの、テンホウインさん？ 一体どんな生き物の遺伝子を合成したんですか？」

ミホは思いきって聞いてみた。

「ああ？ えっと……牛、豚、ニワトリ、マグロ、カニ、イカ、ハマグリ、キャベツ、ニンジン、トマト、ナス、カボチャ、その他野菜・根菜・海草諸々、それからニートだ」

この家に来た時から、ミホは目の前の人物のことをじっくり観察していた。分かったことは、この男は「ろくでもない人間だ」と言うこと。そう、そして案の定、彼の言ったサンプル遺伝子の中に、ミホは余計なものを見つけた。

「ニート？ って、あの、働かない人のことですか？」

「ああ、そのニートだ。まあ、何かの栄養素にはなるだろ」

「なりませんよ！ 中止してください！」

ミホは男の服を掴んで、その体を前後に揺すりながら言った。しかし遅かった。プシューと音を立てて、大量の蒸気と共に装置が開いたのだ。

「はい、完成」

「ほう……どれどれ？」

蒸気が多すぎて、その姿はまだ見えない。「変な生き物じゃありませんように……」と、ミホは両手を組んで祈った。

「……世界をもっと上のステップへ……」

ミホも、ブルボンもテンホウインもキョトンとした。その言葉は、三人のどの声とも違うものだったからだ。しかし、そうしていると蒸気が消え始め、装置の中の生物が姿を現した。



「忌まわしき旧世界を滅し、その上に新たな世界を築くため、私はここに生を受けた」

「で、出てきたぞ！」

それは、一言で言うところ『宇宙人』だった。大きな頭に似合わぬ細い体躯。長い手足に、黒くて大きな眼。青白い姿をしたそれはついにミホ達の前までやって来た。

「私の名はシヴァ・グリーン。さあ、皆さんも私と一緒に、レッツ・チェンジ・ザ・ワールド！」

それは……かなりウザイ生き物だった……

続く

## 20・自給自足は未知との遭遇（後書き）

毎週土曜日の更新と自分で勝手に決めていたおっとりですが、気が付いたら土曜日が終わってました。

ナンテコッタイ！

最近、とみに日付感覚が無くなった気がします……  
もう年なんですかね？  
まだ20代前半ですけどね。

でも二十歳を超えた瞬間、私は自分が下り坂に入ったのだと気付きましたね。

一番の変化は睡眠時間が増えたこと。  
徹夜が苦手になりました。

ナンテコッタイ！

レッツ・ゴートウー・おっさんエイジ！  
人生後は下るだけなんて嫌過ぎます。  
上り坂に戻りたい、そんな今日この頃です。

## 21・世界の皇帝に

その日はいつも通りの、いや、いつも以上に平和な日であった。外はのどかな日中で、暖かな陽気の中、鳥達がチツチとさえずっているのが聞こえてくるほど……。ミホとブルボンも別に何をすると言いつてもなく、リビングでお茶を飲みながらテレビを見ていた。以前やっていたドラマの再放送である……。

平和であった。しかし、それは所謂「嵐の前の静けさ」というものにすぎなかったのである。ぱーっとテレビ画面の俳優達を眺めていた二人の元に、台風を中心となるその人物、いや、人物と言つて良いかどうか怪しい「珍妙な生物」は近付いてきた。

「皇帝陛下、ミス・コジマ、ちょっとよろしいでしょうか？」

声に、二人は振り返った。そこにいたのは、大きな頭に小さな体を持った青白い生き物。結局、テンホウインに押し付けられて連れ帰ってきてしまった合成生命体、シヴァ・グリーンであった。

「何だ？　今、私はドラマを見るので忙しいんだが？」

「陛下、そういうのは忙しいって言いませんよ……」

「お二人とも、ドラマなど、どうでも良いのです」

シヴァはそう言つと、リモコンのボタンを押してテレビを消してしまった。

「ブルボン帝国をより発展させるための案を考えてきたのです！」

テレビを消されて不満気な二人の前で、シヴァは声高に言つた。

二つの、大きな黒い瞳が輝いている。そんな様子を見ながら、ブルボンは一瞬押し黙って、しかし溜息と共に口を開いた。

「それは結構なことだが、生憎、私の頭の中にあるのは『貴様をどう処分するか？』と言ふことだ。貴様は元々家畜用なんだが……食うわけにもいかんし」

「皇帝陛下！　私はこの国の役に立てると信じております！」

ブルボンの言葉を遮って、シヴァは詰め寄りながら言つた。

「この国は素晴らしい！ 今までの国家と言えば、大人数が長い時間ダラダラと話し合って事を決めていたというのに、この国はどうでしょう！ 人口、国土、権力、全てを必要最小限に留め、スムーズな国家運営を可能としている……斬新です！ 素晴らしいです！」

「いや、国家として成り立ってませんから……」

「いいえ、この国は立派な国家です！ ミス・コジマはお分かりにならないのですか！？」

テーブルをバンと叩くと、シヴァは今度は、顔をミホの前に突き出しながら声を張り上げた。瞳の中に、ミホの姿が映りこむ。彼女がそれを啞然と見つめる中、シヴァはブルボン帝国の素晴らしさについて語った……熱く、語った。

一 国土が家一軒なので、有事の時は引つ越せば済む。

二 人口がシヴァも含め三人なので、無駄に話し合いの席を設けずに、日常のやり取りだけで国家運営ができる。

熱すぎて、所々理解不能であつたが、どうやらシヴァの言いたい「ブルボン帝国の素晴らしさ」はその二つの点にあるらしかった。

「常識に囚われない国作り、素晴らしいです！ そして、この新しい国家なら、私の目指す新しい世界のリーダーシップを担えるはずです！」

「何言ってるんですか！ 暴君と普通の女の子と変な生き物で、世界をリードできる訳ないじゃないですか！ 陛下も何か言っただけでくださいよ」

家畜と野菜とニートの遺伝子がごっちゃになっているこの生き物に、「自分が何を言っても無駄だ」と考えたミホは、ずっと黙ったままのブルボンに助太刀を求めた。一般人にはシヴァの説得は無理であろう……しかし、一般常識の外にいるブルボンなら可能かもしれない。というのが、ミホの思惑であつた。さて、するとブルボンはおもむろにお茶をすすり、シヴァの方をギロリと見やった。

「で？ 案というのは？」

「って、話聞いちゃうんですか！？」

ミホのミスだった。一般常識の外にいるブルボンは、ミホよりもむしろ、シヴァの考えに共鳴するのが当然だということに、彼女はその時やつと気付いたのである。

「以前から思っていた。私は一国の皇帝に納まるにはあまりに偉大すぎるのだ。シヴァよ、私は世界の皇帝になるぞ」

「素晴らしいです」

ミホの口からは、溜息しか出てこなかった。

そんな訳で、ブルボンが世界の皇帝になるべく、三人は立ち上がったのだが（ミホは半ば強制的だが）……

「しかし、ブルボン帝国には問題点も存在するのです……」

「ぬう……シヴァよ、皆まで言うな」

重苦しい空気が立ちこめた。

ブルボン帝国の問題点、それはメリットと表裏を同じくするものであった。ずばり、予算の問題である。ブルボン帝国は、小規模でスムーズな国家運営を行うには適しているが（本人達談）、しかしその反面、人口が少なく、そしてそのわずかな人間全員が一つ屋根の下で暮らしているため税收がなく、したがって、国を動かすための予算も無いのだ。

「くそ、我が帝国の長所が裏目に出たか……」

「これが国家ではなく、ただの一軒家だったら何の問題も無いのですが、国である以上、やはりそれなりの予算は必要ですね」

「ただの一軒家なんだから、良いですってば」

「付いていけない」と、ミホは呆れながら言った。ブルボンはそんなミホを一瞥すると、再びシヴァの方を見た。

「ミホの強制労働によって得た金では足りんのか？ やっぱり？」

「全然足りませんね。何しろ、我々は世界のリーダーシップを取るうとしているのですから」

「やっぱ無理なんですよ。諦めましょう……そんなことより、お夕飯何が食べたいですか？」

「貴様……真面目に考える！」

キッチンに向かおうとしたミホを捕まえて、ブルボンはすかさずゲンコツを食らわせた。しかし、ミホの頭が腫れるばかりで金が湧いてくる訳でもない。ブルボンは溜息をついて、そしてシヴァとの話し合いに戻った。

「で、どうすれば良いと言うのだ？」

「国家としての予算を稼ぐなら、国家相手に何か商売をしてみるというのはどうでしょう？」

「例えば？」

「あまり大きな声では言えませんが、『人身売買』なんてどうでしょうか？」

「『人身売買』か……」

すると、二人の視線がミホに突き刺さった。どうやら、売られようとしているらしい……ミホは生唾をゴクリと飲んで、一歩二歩とゆっくり後ろに下がった。しかし、数秒もすると二人は視線を戻してしまった。

「商品が一つだけじゃ無理ですね」

「ああ……それにあの貧相な娘に大した金額なんぞつかんだろ」

「売られなくて良かったですけど……ム力つきますね、その言い方」再び、部屋の中を静寂が支配した。時計の力チ力チという音だけが、無駄に大きく聞こえた。

「傭兵屋なんてどうでしょうか？」

「シヴァ、皇帝は自ら進んで戦地に趣いたりしない。それにその貧乳娘の戦闘力など、たかが知れるだろ」

「戦争に行かずにすんで良かったですけど……一言多いですよ、陛下」

「どこかに奉公にでも出しますか？」

「いや、そもそもミホがいなくなったら、我々の身の周りの世話は

誰がやるんだ？」

「自分でやってくださいよ！」

こんな感じで、話し合いは平行線をたどった。三人はその後、二時間ほど話し合いを続けたが、しかし良い案が出ないまま、結局その日は「保留」ということになった。

「では、次の議題に移りましょう」

「まだやるの!？」

夕飯を食べながら、しかしシヴァが言った言葉にミホは上擦った声を上げた。ブルボン帝国のメリットは、「日常のやり取りの中で国家運営ができること（本人達談）」である。テーブルを囲んでの会話も、もちろん国事に関わることだ。「やはりここは、ただの一軒家でなく国家なのかもしれない」と、ミホはその時本気でそう思った。

「世界をリードするためには、やはり一番大事なことは外交だと思うのです」

「ふむ、そう言えば、建国以来ろくに外交などしてこなかったな……」

「それはいけませんね」

そう言つと、シヴァはコップ一杯の水を飲んでから立ち上がった。

「さっそく、ヤポンの首相に挨拶をして来ます」

「ふむ、頼んだぞ外務大臣」

それは二人にとつて、ごく自然なやり取りだったが、しかし数秒遅れでその意味を理解すると、ミホは咽て口の中のご飯を吐き出しそうになった。慌てて水を口の中に流し込み、胸をさすりながらゴホゴホと言つ……

「何言ってるんですか！ 相手にされるわけじゃないじゃないですか！ 馬鹿なこと言っていないで、ご飯食べちゃってくださいよ！」

「心配御無用。私はあなた方と違って、水とアミノ酸さえ摂取していれば生きられるので……では、いってきます」

「へえ、そうなんだ。いつてらっしゃい……って、行っちゃだめ

えー！」

ミホは慌ててシヴァの背中を追い、玄関をくぐった。しかし、遅かった……と、言うよりもシヴァが速かった。人間とは思えないスピードで（実際、人間ではないが）シヴァは走り出し、その姿はすでに、夕焼けの中で小さくなっていた。

しかし、次の日の朝になっても、シヴァは帰って来なかった。得体の知れない生き物であるが、そうは言ってもミホは心配で、グーといびきをかいているブルボンを尻目に、夜通しずっとその帰りを待っていたのである。

「外務大臣は帰ってきたか？」

起きてきたブルボンが聞くと、ミホは首を横に振って溜息をついた。

「まあ、首相に会いに行っただからな、すぐには帰ってこんだろ」「いや、多分首相に会えなくて、どこかで途方に暮れてるんですよ、どうしよう……」

「心配性な奴だな。意外と、朝のニュースに出演しているかもしれないぞ？」

ブルボンは呑気な事を言いながら、テレビのスイッチを入れた。そんなにうまく行くわけない。「きつと今頃困って、自分達の助けを求めているに違いない」とミホは思った……が、次の瞬間そんな考えは吹き飛び、その視線はテレビ画面に釘付けになった。

「昨晚、首相官邸に現れた宇宙人は首相と会談。『互いに良好な関係を築いて行きたい』との意見交換が行われました」

ニュースを読み上げるキャスター……映像が切り替わると、そこには確かに彼が映っていた。

「ワタシ、ウチュウジン！ チキュウジン、ヤポン、トモダチ！」

胡散臭い片言でそう言いながら首相とガッチリ握手を交わしてい



るのは、正真正銘シヴァだったのである。これには、ミホもブルボンも目が飛び出るほど驚いた。

「……考えたな。あいつ、自分の容姿が宇宙人っぽいことを自覚してるぞ」

嫌な生き物だ……ミホは本気でそう思った。

続く

## 21・世界の皇帝に（後書き）

また日曜投稿です。

でも今回は日にちを忘れたわけではありません。  
ダビスタに夢中になってたら（ry

ってことで、21話でした。

三の倍数なのでアホになりながら書きました……

ウソです。

え？ お前は常時アホだろ？

うるせえタコ。

何て言いつつ、本当は皆さんに土下座したくて仕方ありません……

ウソです。

ってことで次回もお楽しみに。

楽しみにしてないと呪います。

私はこれでも黒魔術の心得がありますから……

ウソです。

## 22・燃えよ皇帝陛下

シャンデリアの明かりの下、ミホは薄い桃色のドレスを着て、そして聞こえてくるヴァイオリンの音色に耳を傾けながらたたずんでいた。人生で二度目になるが、そこはやはり庶民にとっては居心地の悪い場所だった。それに、今回隣にいるのはルドルフではない。

「うう……場違い……」

「シャキッとせんか！ 我々は正式に招待されたのだ。胸を張れ」  
暴君、シャレー・ブルボン五世だった。ルドルフならこんな時、優しく微笑んで気の利いた言葉の一つでもかけてくれそうだが、そこはブルボンクオリティーなのか、ミホの背中をバンと叩いて終いだった。

このパーティーは財界の大物、フサイチ・シラベの誕生日を祝うもの……。本来、ミホやブルボンにはまったく関係のないものなのだが、しかし、数日前シヴァが招待状をもらってきたのだ。どうも、例の首相経由で仲良くなったらしい。シヴァは外務大臣としては間違いなく優秀な部類に入るだろう……。が、「そんなものが自分の所にも何の意味もない」というのがミホの思うところだった。

「皇帝陛下、ちょっとよろしいですか？」

と、そこにシヴァがやって来た。

「何だ？」

「この後のイリュージョン・ショーについて打ち合わせをしたいのですか……」

「ほう、そんな余興があるのか……どんなマジシャンが来るんだ？」  
「いえ、私達がやるんです」

サラッと放たれた言葉に、ミホとブルボンは飲んでいた飲み物を吹き出してしまった。そして目を丸くしてシヴァの方を見る。しかしシヴァはそんな二人にはお構いなしで説明を続けた。

「フサイチ様や他のVIP招待者の方々にお約束してしまいました

から……『私達をパーティに招待してくれば、暴君と小娘と謎の生物によるイリュージョンをお見せします』と……」

「貴様、何でこの皇帝に無断でそういう約束をするんだ！」

「帝国発展には他国の有力者達とのコネクションは欠かせません。帝国のためなんです」

「ぬう……」

「大丈夫です。イリュージョンのネタは私が考えておきました。陛下は打ち合わせ通りに動いていただければ結構です」

「あの……私は？」

「ミス・コジマは大した役割ではないので、ここにいてもらって結構です。さあ、行きましょう陛下」

そう言つて、シヴァとブルボンはミホを置き去りにして会場の裏手に行つてしまった。華やかなパーティ会場に一人残されたミホ……大した役割でないのはありがたいが、しかし「この場違い空間にいるよりは、むしろ裏手にいって打ち合わせをしたい」と言うのが正直なところだった。

が、そうして呆然と突つ立っていた時だった。「ドン」と、ミホは背中に軽い衝撃を受けた。「おつとつ」と間の抜けた声をあげながら、グラスに入ったジュースがこぼれないようにバランスを取ると、ミホは後ろを見た。

「あら、ごめんなさい。よそ見をしてたものだから……」

そこに立っていたのは綺麗な女性だった。外国人なのか、白い肌に青い瞳をしていた。それに、透き通るようなブロンドの髪を後ろで束ねていて、その体は上品な白地のドレスに包まれている。「大人の女性」だ……。ミホは何だか急に恥ずかしくなつてしまった。

「い、いえいえいえ！ 私こそこんな所にいてごめんなさい！」

手と首を横に振りながら、ミホは上擦った声で言つた。その様子があまりにおかしくて、女性は手を軽く口元に添えると、クスクスと笑つた。

「あなた、面白い子ね……一人なら少しお話ししよう。名前は？」

「こ、コジマ・ミホです」

「そう、ミホちゃんって言うの……私はスカーレット・ダイアー。マグニテ帝国のしがない貴族よ」

「へ？」

スカーレットと名乗ったその女性の言葉を聞くと、ミホはまたおかしな声を上げた。ミホは高等学校にも行っていないし、新聞も真面目に読む方ではないので外国事情に詳しくないが、しかしその国の名前は嫌と言うほど耳慣れていた。

「ん？　どうかした？」

「い、いえ……」

しかし、スカーレットにブルボンのことを話して良いものが……微妙なところだった。マグニテの人間なら、ついこの間クーデターを起された暴君のことを知らないはずがない……ややこしいことになるのは目に見えていた。できれば、ブルボンには永久に裏手にいて欲しいとミホは思った。が、その時だった。

「おい、ミホ。お前もイリユージョンの準備を手伝え」

ブルボンが帰ってきてしまった。それもご丁寧にミホの名前まで呼ぶ始末……。当然スカーレットの視線はブルボンに移った。

「あら、シャレーじゃないの」

「んん！？　貴様は！　スカーレット！」

それは、ミホが想像していたのと少し違う展開だった。スカーレットがブルボンを知っているのは分かる……しかし、ブルボンがスカーレットのことを知っているのは分らなかった。それに「シャレー」という呼称も……。

「え？　陛下、知り合いなんですか？」

ミホは硬直するブルボンに恐る恐る聞いてみた。しかし、先に口を開いたのはスカーレットだった。

「妻よ。いえ、『元妻』と言った方が良いわね」

ミホは固まった。固まって……しかし数秒後、何かが体の内側で弾けたかのようにミホは飛び上がった。

「えええ！？ 陛下、結婚してたんですか！？ その性格で！？」

「やかましい！」

ブルボンはミホにゲンコツを食らわせると、再びスカーレットの方を見た。スカーレットはまたクスクスと笑っている。

「フフツ……近衛隊長のサムソンさんに『ヤポんで生きている』とは聞いてたけど、まさかこんな所で会うなんてね……」

口元は相変わらず笑っていたが、しかし、その目には涙が浮かんでいた。スカーレットはバッグからハンカチを取り出すと、そっと目元を拭った。こんな暴君でも泣いてくれる人がいるんだ……と、ミホはそう思いながらその様子を見ていた。が、次の瞬間スカーレットは予想外の言葉をブルボンに投げかけた。

「世の無常ね。あんなに威張り散らしてた人が、今じゃ女の子の家に居候だなんて……泣けるわ」

「貴様は相変わらずカワイ気のない女だ！」

ミホは呆気にとられてしまった。ブルボンの妻だっただけのことはある……。ブルボンも語調こそいつも通りだったが、しかしどこか覇気がないようにミホには感じられた。

「で、このミホちゃんの家でお世話になってるのね？ どう、ミホちゃん？ 暴君の相手は疲れるでしょう？」

「はい、正直……」

「余計なお世話だ！ それに私は居候ではない。ミホの家を領地として徴収しただけだ」

「な、何勝手なこと言ってるんですかー！」

「うるさい！ ほれ、イリュージョンの準備に行くぞ」

ブルボンはそう言うのとミホの首根っこを掴んで、半ば逃げるようにスカーレットの元から離れて行った。

「奥さんの前だからって、そんなに照れなくても良いじゃないですか」

会場の裏手に向かって歩きながら、からかうような口調でミホは言った。

「照れる？ フン、馬鹿を言え。あの女と私はそんな甘い関係じゃない」

「そんなこと言って、実はまだあの人を愛しているんでしょう？」  
しかし、その言葉を聞いた途端、ブルボンは真顔になってしまった。そして、静かに言葉を続けた

「あの女を愛していたことなど、一度もない。今も昔も……あいつとて同じことだ。我々は親同士の合意で、ほとんど強制的に結婚させられたんだからな。結婚生活は冷めたものだった。私はあいつを気になかったし、あいつも私を気になかった。言わば、一緒に住んでいるだけの赤の他人だ。まだ貴様やシヴァとの関係の方が親密だ」

ブルボンはそれだけ話すと、後は黙ってしまった。

そして、イリユージョン・ショーが始まろうとしていた。内容は簡単なもので、土台の上にある二つの箱を使った空間移動マジックだ。シヴァの説明によると、手順とは次の通り……

- ・まずブルボンが箱の一つに入る。
- ・箱のフタを閉め、その箱に火を点ける。
- ・ブルボンは箱の下にある穴から脱出……土台の下を通ってもう一つの箱へ移動。

- ・もう一つの箱をシヴァとミホが開ける。
- ・ジャジャジャーン！

……と言うものだ。

「しかしシヴァよ。この土台は骨組丸出しで後ろ側まで見えるタイプだぞ？ 箱から抜け出してここを通ったら丸見えではないか」

「良く見て下さい皇帝陛下……背景色と同じ色の幕を張ってあるだけです。客席からは陛下の姿は見えません」

「角度によってはバレそうな気がしますけど……」

「金持ちなんて頭悪いから大丈夫ですよ」

「何ですか、そのわけの分からない偏見は……」

「とにかく、ミス・コジマは私に合わせて適当にマイクで喋ったりしてくれば結構ですから」

そんなこんなで、何はともあれ本番の時はやって来た。拍手と共に幕が上がって、三人はスポットライトに照らされた。同時にシヴァがジョークを交えた小粋な挨拶をし、そしてマジックの説明を始めた。

「この通り、箱にも土台にも仕掛けはございません」

「幕が張ってあるように見えるのは私だけかね？」

客席からそんな言葉、そして笑い声が起こった。案の定バレたのだ……。しかしシヴァは構わず続ける。ブルボンを箱に入れ、そして火のついた松明を手にとつと、「3・2・1」と数えてから火を放った。「ぼぼぼっ！」と音がして、火は一気に箱を覆っていく。その様子を覗つて、ブルボンはすかさず箱の下から抜け出そうとした。

「ん？ おい？ どうなってるんだ？」

しかし、なぜか開かなかった。

「さて！ 皇帝陛下は無事、あちらの箱に移動することができのでしょうか？」

シヴァは、完全にタネを見破ってしまった客達を、しかしなおも煽っていた。客席からは失笑……誰もがブルボンの無事を確信していた。が……

「あちちちちちちちちちち！」

ブルボンは火に包まれた箱をぶち破って飛び出してきた。これにはシヴァもミホも、そして客達も全員度肝を抜かれた。ブルボンは舞台を飛び降りると、背中<sup>に</sup>火をつけたまま走り回った。どう見ても失敗だ。しかし、シヴァはそんなことを認めたくない。そこで彼は、マイクを握り締めると、咄嗟に言った。

「ご覧下さい！ 炎に焼かれながらも平然と走り回る皇帝の姿を！」



これぞイリユージョン！」

苦し紛れだった。しかし、ミホはこの言葉で混乱してしまった。どう見ても失敗なのだが、その時彼女はこう思った。「ひよっとして、客にタネがバレたから、急遽演出を変更したんじゃない？」と……。どう見ても失敗なのだが……。しかし、シヴァも助けようとしていないので、ミホもとりあえず口裏を合わせることにした。

「あ、あんなに叫んでいます……。実は平気なんですよー……。？」

「そんなわけないだろ！ 失敗だ、早く消せー！」

まったく助けようとしらない下僕二人に、ついにブルボンは堪りかねて叫んだ。その瞬間、ブルボンの背中で「ジュッ」と音がした。

「本当に、能がないのは変わらないのね……」

見ると、スカーレットが空のワインクローを手に立っていた。中に入っていた氷水でブルボンの背中の火を消してくれたらしい。

「フン……やかましい……」

「だ、大丈夫ですか、陛下！」

「大丈夫なわけなからう！」

ようやっと駆けつけたミホとシヴァに、ブルボンは思い切りゲンコツを落とした。結局イリユージョンどころかただのコントだ。三人は肩を落として、しかし大受けの会場を後にしようと歩きだしたが、その背中に向かって、スカーレットは口を開いた。

「馬鹿でわがままな人だけど、よろしくね」

それは、ミホとシヴァに対するものだった。ブルボンは先ほど、「冷めた関係」などと言っではいたが、しかし、実はそう思っているのはブルボンだけなのではないのか？ と、ミホはそう思った。

続く

## 22・燃えよ皇帝陛下（後書き）

久々更新。

ちよつと毎週更新はきついし他の作品に手が回らないので変則更新となりました。

すみません。

というわけで。

おつとりの格闘技談義のコーナー！

K-1MAX見ました。

ずばり私の今年の優勝予想は……

ネタバレしないようにぼかして言うと

ブア様VS佐藤の勝者だあー！

他の勝ち残った3人より頭一つ抜けてる気がしました。

小説とはまったく関係ないぜー！

イエー！

### 23・正義と正義は交わらない

立派な会議場の中の、立派な楕円形のテーブルを、立派なスーツを着た人々が囲んでいた。そこは首都アリマにあるコイワイ迎賓館。今日はそこでは、世界から主要国の外務大臣達が集まって会議が開かれることになっていた。物々しい雰囲気にも包まれる会場……しかし、一点だけ違和感があった

「ほう、あなたが噂の……」

「はい、私がブルボン帝国外務大臣のシヴァ・グリーンです」

得体の知れない、宇宙人のような姿をした「何者か」が混ざっていることだ。ブルボン帝国は、もちろん主要国ではない。本来ならシヴァがこの場にいるのはおかしいことなのだが、先日、ヤポンの首相と会談した宇宙人の噂は、あれから世界中に広まっていた。それゆえに、シヴァが参加を申し出たとき、外相達は好奇心に駆られ、その申し出を受けてしまったのだ。

「はっはっはっ！ 暴君に女の子に宇宙人の帝国ですか。面白いですわね」

「笑い事ではありませんよ！ まったく、ルドルフ陛下はなぜあの男を生かしておくのか……」

シヴァの話を聞いて、マグニテ帝国の外相だけは腹を立てたが……しかし、何はともあれ、外相会談は順調にスタートしようとしていた。

「まあまあ、良いじゃありませんか……それはそうと、そろそろ会議を始めましょう」

「いいや、会議は中止だ」

それは突然、ヤポンの外相の言葉の後に続いて聞こえてきた。いきなりの中止宣言に、その場にいた外相達は声のした方を振り返った。会議室の、木彫りの装飾が施された立派な扉が半開きになっていて、その前に、およそこの場には似つかわしくない、ヒゲもじゃ

のタフガイが立っていた。

「誰だ君は！　どこから入ってきた！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずだぞ！　警備員は何をしている！？」

どう見てもSPや関係者ではないので、さすがに驚いて外相達は声を上げた。しかし、自分に向かって人差し指を突き立ててくる彼らを前にして、男はニヤリと口元をゆがませた。

「無駄だ。警備員諸君には、残念だがあの世に行ってもらった」

「何だと！？」

と、次の瞬間、外相達の顔は一気に青ざめた。男は一人ではなかったのだ。仲間がいた。見るからに強力そうな銃火器で武装した、何人もの仲間が……。

「フン、安心しろ。貴様らは大事な人質だから、簡単に殺しはしない」

男は急に静かになった外相達を、半ば冷やかすような口調で話を続けた。

「貴様らの母国の対応しだいだな……」

「な、何が目的だね……」

「それも含め、これからメディアを通して、我々の要求を発信する」

首都アリマでそんな大事件の引き金が引かれた、その数十分後……

しかし、ミホとブルボンはいつも通りの平凡な時間の中にいた。

「あゝあ、良いなシヴァ君……今頃美味しい物でも食べてるのかなあ？」

先日のパーティのことを思い出しながら、ミホはつぶやいた。きつとシャンパン片手に、カナッペでもつまんでいるのだろう……とミホは頭の中にテーブルを囲む紳士淑女を描いて、また溜息をついた。ブルボンはその様子に思わず呆れて、ミホの妄想を叩き壊すべく口を開いた。

「馬鹿が……今回、奴は主要国外相会談に出席するために出かけた

んだぞ。今頃会議の真つ最中だ」

「じゃあ、ニュースでやってるかもしれないですね」

ちょうど、テレビでニュースがやる時間だった。昨日の同じ時間に見たニュースで、確か外相会談のことやっていたので、おそらく今日もその話題に触れるだろうと予想して、ミホはテレビのスイッチを入れた。

『……良く聞けクズども。たった今、我々はコイワイ迎賓館を占拠した』

テレビには覆面の男が映し出されて、そしてそんなことを言っていた。チャンネルを間違えたのか？ そう思つて、ミホはリモコンのチャンネルボタンを押したが、しかし、画面の映像は変わらなかった。と、言うことは……この覆面男の映像は何かのニュースと言うことになる。何のニュースか気になつて、ミホは画面の隅にあるテロップを読んでみた。

『テロ集団、外相会談を占拠』

「ええー!？」

ミホはたまらず大声を上げた。ブルボンも「何だ、何だ」と、テレビの所までやって来た。

『貴様らの国の大切な外務大臣は、今我々が人質として捕らえている。無事に帰して欲しければ我々の要求を飲むことだ。一力国でも逆らつた場合、連帯責任として、全ての人質を皆殺しにする。ハツタリだと思つたら逆らつてみるが良い……次の外務大臣の人事を考えた上でな』

「おのれ……ブルボン帝国にケンカを売るとは良い度胸だな、こいつら……」

ブルボンは奥歯をギリギリと噛み締めながら、画面に映る男をにらみつけた。そして、頭の中では「どうやって、テロリストどもを鎮圧してやるのか？」と考える。が、その思考はミホの言葉によつ

て中断された。

「逆らったら、シヴァ君も他の人達も殺されちゃいますよ!」

そう、外相会談には、同居中の謎の生命体、シヴァ・グリーンもいるのだ。最初は鬱陶しい存在だったが、最近分った。シヴァは優秀な外務大臣だ。

「うゝむ……確かにシヴァを失うのは痛いな。他の奴のことなんぞ知らんが……」

どうしたものか……ブルボンは頭を抱えた。

そうしているうちに、犯人は各国に対して要求を述べ始めていた。「服役中の仲間を釈放しろ」とか、「最新科学技術のデータをよこせ」とか、ミホには思いもよらないことを言っていた。そう、ミホには……すなわち、ブルボン帝国という一軒家には……

「我々にはまったく損のない要求だな。よし、奴らの要求を飲んでやろう」

連帯責任と言っていたから、他の国が要求を蹴る可能性もあるが、とりあえずシヴァの安全だけでも確保するため、ブルボンは決断をした。ちやうど、画面には連絡先が表示されている。ブルボンはさっそく、犯人グループに電話をすることにした。

「どこの国だ？」

コール音の後に、高圧的な態度の男が電話に出た。ブルボンは一瞬ムカツと来たが、しかし、咳払いをして声の調子を整えると、国名を述べた。

「ブルボン帝国だ」

「……はあ？」

犯人グループの男は、思いもよらぬ国名に一瞬黙った。そして「はてさて……」と頭の中に世界地図を広げて見たが……

「え？ 何て？」

「ブルボン帝国だ」

ぶ・る・ぼ・ん・て・い・こ・く……？

男は、静かに受話器を置いた。

「今のはどこの国からだった？」

受話器に手を置いたまま押し黙るその男を見つけて、もう一人の仲間が声をかけてきた。しかし、男は首を傾げると、仲間に言った。

「『ブルボン帝国』だってよ」

「どこだよ、それ……」

結局、ブルボンの電話は「イタズラ電話」と結論付けられた。

しかし、ブルボンの方は困ってしまった。せっかく「要求をのむ」と伝えようとしたのに、その前に電話を切られてしまったのだから。「どうするんですか、陛下？」

「む……仕方ない、現地に出向いて、直接交渉するしかあるまい」  
ミホとブルボンはテレビを消すと、出かける準備を整えた。

コイワイ迎賓館前は、さながら外国のハードアクション映画のようだった。赤い光を揺らめかせるパトライト、上空を乱れ飛ぶ警察や報道用のヘリ……分厚いヘルメットを被った機動隊や、カメラ付き携帯を手にした野次馬が行ったり来たり……。

「なかなか騒ぎになってるな」

「そりやそうですよ……あ！ 対策本部ありました。」

ミホとブルボンは、途中何度か警察官に止められながらも、何とか事情を説明して『対策本部』と書かれたテントまでやって来ることができた。

しかし、本部で二人の相手をしてくれたのは、いかにも「最近配属されました」と言うような若い刑事だった。しかも、この緊迫した現場にあつて、彼は爽やかな笑顔を浮かべている。

「大丈夫ですよ、彼らは主要国を相手にしてるだけで、『ブルボン帝国』なんてわけの分からない国は眼中に無いと思いますから」

「何だと、この平ポリめ！」

「へ、陛下！ 仕方ないですよ……」

平ポリの言うことはもつともだが、しかしシヴァが捕まっていることは確かで、犯人がブルボン帝国を相手にしているかどうかはこの際どうでも良いことだった。が、平ポリは「我々に任せて下さい」としか言わない。このままでは埒が明かない……苛立ち始めたブルボンは、ついにバンと机を叩いて口を開いた。

「責任者を呼べ！」

「銀河治安維持機構の者だ！ 責任者はいるか？」

ブルボンと同時に対策本部の責任者を呼ぶ者……「責任者」という言葉が綺麗にハモったその相手は、ブルボンの背後でプラチナ色の光沢を放っていた。男の方もブルボン達に気付いたのか、二人に視線を向けてきた。

「ん、お前らは……」

「き、貴様はTM！」

「久しぶりだな。こんな所で何をしている？」

「それはこっちのセリフだ」

TMの方は仕事だった。ミホ達がテレビで事件発生を知った頃、TMは別の取り締まりをしていたのだが、その時本部からの指令が入り、急遽飛んできたらしい。なんでも、『平和的政治への威力妨害の罪』というものに該当し、銀河治安維持機構の規定ではかなりの重罪らしい。

それはともかく、前々からの関わり合いもあり、TMはさっそくブルボンを疑っているようだった。二人は慌てて、「同居人が人質として捕らわれている」と説明をした。

「そうか、あのエイリアンはお前らの仲間だったのか……まあ、私が出来たからには大丈夫だ！ すぐに私が救出してやる」

そわそわとするミホの肩に手を置くと、TMはそう言った。

「私にも手伝わせてもらって良いですか？」

TMの言葉に続くように、若い女の声が対策本部に響いた。



「あ、スズカさん」

ミホは声の主に見覚えがあった。そう、魔法少女のスズカだった。どうやら、TMと同じように、テロリストを倒すべくやって来たらしい。しかし、TMは若干訝しげにスズカを見た。まあ、見た目普通の女の子が「テロリスト退治を手伝う」と言っているのだから仕方無いが……。

「……君は？」

「魔法少女よ」

「まほう……？」

「何だてめえ、魔法知らねえのか？ 舐めてんのか、コラ！ あんな小悪党ども、ワキアの魔法で一発だ！」

困惑気味のTMに業を煮やしたのか、スズカのポケットの中から白ネズミのラスカルが飛び出してきて、いつも通りの酷い口調で、TMに魔法の凄さを説明した。

「そう言うわけで、魔法少女としての任務なんで、迎賓館に入れてください」

一通りの説明の後、スズカはニツコリと笑うともう一度言った。

「ダメだ……」

一言で、一気に空気が凍りついた。

TMは口を動かしていなかった。しかし、その言葉は、確実にその場にいた者達の鼓膜を揺さぶった。TMではないとすると、誰が？ キョロキョロとミホ達があたりを見回すと、さっきの平ポリの後ろで男はタバコを吹かしていた。そして、ひとしきり紫煙をくゆらすと、男はギロリとにらみを利かせながら再び口を開いた。

「魔法少女も、ギンチキも、お呼びじゃないね」

「何だお前は？」

くたびれた服装に身を包んだ、血色の悪いその男にTMは聞いた。「お前が呼んだんだろ。ここの責任者、中央捜査局テロ対策部のヒ

ジリナ・ヒカルだ。ここは我々の管轄だ、部外者はすっこんでな」  
「何だと？」

ヒジリナは明らかに、TMを良く思っていないようだった。しかし、同じく正義を貫く身であるはずの警察にそんな態度を取られては、TMとしても納得はいかない。TMの方も表情を陰しくすると、ヒジリナに食ってかかった。

「それは銀河治安維持機構に対する挑戦と受け取れるな」

「挑戦ってほどじゃない。おたくらは手広くやってる分、一つの分野に関しては知識や技術が薄すぎるって言ってるんだよ。やれる事と言ったら、せいぜい力押しだろ？ ことテロ対策に関して言えば、俺達はあるとは比べ物にならない対応力を持っている。大人しくプロに任せろ」

「貴様……」

ヒジリナとTMはその後、しばらく、黙ったままにらみ合いを続けた。

続く

### 23・正義と正義は交わらない（後書き）

なんかサミット意識した話っぽくなっちゃいましたね。

でも変な意図はありません。

何事も無く終わりましたしね、サミット。

何事も無さ過ぎて、国民としてはブチギレ寸前でしょうか？

頼みますよ福さん。

つてことで次回にストーリーは続きます。

捕らわれたシヴァ君の明日はどっちだ！

あ、『どっちの料理ショー』思い出した……

お腹空きました。

## 24・悪を倒しに来た悪

目前にテロリストと言う巨悪がいるにも関わらずいがみ合うT Mとヒジリナに、スズカは完全に呆れてしまい、そつと対策本部のテントを抜け出していた。

「やーね、役人通しの管轄争いって……もう良いわ、私達は私達で勝手にやりましょ」

「ハン！ 言われなくても、あんな馬鹿ども、最初から頼っちゃいねえよ」

ラスカルは悪態をつくくと、テントから勝手に持ってきた迎賓館の見取り図を広げた。しかし、「さて、どうやって忍び込もうか」とスズカと一緒にそれを覗きこんだ時だった。

「おい、魔法少女」

「ん、何？」

後ろから、同じく役人に愛想を尽かして出てきたブルボンが声をかけてきた。

「我々も連れて行け」

「え？ 陛下、何言っちゃってるんですか？」

ブルボンの突然の申し出に、ミホは目を丸くした。確かに、ミホはシヴァを助けたくてここにやって来たのだが、せいぜい、「シヴァ君の声を聞かせてください」とか、「何でもしますから助けてください」などと、テレビドラマのように、犯人に訴えかける程度の役割を予想していた。中に入って、強力な武器で武装した極悪テロ集団との直接対決など、それこそ洒落にならない。アイネス・システムでの出来事を思い出して、ミホはゾツとした。しかし、そんなミホを置き去りに、ブルボンは話を続けた。

「人質の中に我々の大事な友人がいるのだ。しかし、貴様の言う通り役人はあてにならない。友人一人ぐらい、やはり自分で守らんな」  
「陛下……あの……」

ミホはブルボンの服の袖を引っ張った。

前回はライアンの頼みもあったし、自分も馬鹿だったからあんな無謀なことをしたが、しかし、今回はテロ対策専門の警察に、TM、魔法少女までいるのだ。わざわざ、足手まといになるためついに行くこともない……と、ミホは進言しようとした。しかし、次の瞬間、ブルボンに耳をつねられてしまった。そして、そのままブルボンはミホの耳の中にゴニョゴニョと言葉を流し込んできた。恐るべき陰謀を……。

「馬鹿め、これはチャンスだ。この小娘の仲間になっておけば、奴は我々をさほど警戒せんだろう。その隙にマイニティークラウンをいただく」

「まだ諦めてなかったんですか!？」

「当たり前だ」

以前、あれだけ酷い目にあったというのに……ミホは呆れてしまった。

「とにかく、マイニティークラウンを手に入れ、さらに我々をコケにしたアホテロリストどもも一網打尽にできるんだ。ついて行かない手はなかるう」

「何ヒソヒソ話してるの？ 行くの？ 行かないの？」

「うむ、行くぞ」

こうして、ミホはブルボンの不純な動機によって、危険たっぷり盛りだくさんの迎賓館に突入することになった。

外で様々な感情が渦巻いている中、迎賓館内のテロリスト達は静かに、各国からの回答を待っていた。

「おい、どうだ？ 各国からの反応は？」

リーダー格の、ヒゲもじやの男は電話応対係りの部下に聞いた。

が、部下の方は首を横に振って溜息をついた。

「今のところ、回答を先延ばしにするものばかりっす」

一応、ほとんど全ての国から一回ずつ連絡は来ていた。しかし、

「今から話し合う」とか、「会議で決めるからもう少し……」などと、どこの国も同じようなことしか言わなかった。唯一要求を飲むと言ってきたのは一番最初に電話して来たイタズラ電話の男、「ブルボン帝国」だけだった。ブルボンからの電話を思い出し、男はフツと笑った。

部下の報告を聞くと、ヒゲリーダーはアゴに手をあてた。しかし、こうなることは予想していたのか、表情は落ち着いている。しばらくアゴヒゲを弄ぶと、彼はニヤリと笑ってから口を開いた。

「大方、時間を稼いで我々を捕まえる方策でも練っているのだろう……よし、全員に戦闘準備を整えさせる！ 警官隊が突入してきたら皆殺しにして、馬鹿どもに選択肢がないことを教えてやる」

血を見るのが大好き……そう言いたげな顔で、ヒゲリーダーは部下達に命令を下した。それまで見張りだの何だので退屈そうにしていた部下達も、リーダーのその命令を聞くと歓喜の声を上げ、来る戦闘に備え、持っている武器の点検を始めた。

「ボス！」

しかし、命令を伝えにいった部下のうち、その一人は違った。血相を変えて戻ってきたのだ。様子のおかしい部下を見て、ヒゲリーダーは眉をピクリと動かした。

「どうした？」

「ハーツとレイルが何者かにやられてやした」

「何だと？」

その部下の話によると、二人は気絶させられたまま、トイレの個室に押し込まれていたらしい。迎賓館の職員や、SPの仕業ということはない。テロリスト達は、ハッキングやその他の方法を使って、今日の迎賓館の警備の配置や、出入りする人間の数を入念に調べておいたのだ。殺した警備員や人質の数はそれと一致していた。と言うことは、考えられることは一つだった。

「おそらく警察の特殊部隊が何かだろう。ちょうど良い……野郎ども、狩りの時間だ！ そいつらを見せしめに殺す！」

待ってましたとばかりに、テロリスト達は行動を開始した。

「何か騒がしくなりましたね」

「どうやら私達の侵入がバレたみたいね。急ぎましょう」

スズカとミホ達は通気口の中にいた。巧い具合に侵入し、敵に見つからないルートとして天井裏の通気口を選んだのだ。

途中、ゴキブリやネズミに遭遇しつつも、三人と一匹は人質達の真上までやって来た。天井に設置された空調の隙間から、ミホ達は部屋の中の様子を確認することができた。シヴァも含め、人質達は全員縄で拘束されている。しかし、侵入者を探すため全員出払っているのか、見張りは二人しかいなかった。それを見ると、スズカは作戦を頭の中で組み立てた。

「よし……じゃあ、私とラスカルであいつらを倒すから、ミホちゃんとブル公は人質の安全を確保して」

「誰がブル公だ！」

「ん？ 誰だ、そこにいるのは！」

突然の無礼な呼称に、声を荒げたのがいけなかった。ミホ達が天井裏に隠れていることがバレてしまったのだ。

「ああ、もう、見つかったじゃない！ ったく……このまま行くわよ！」

スズカの頭の中の作戦では、天井裏から颯爽と飛び出し、敵に声を上げさせることもなく鮮やかに制圧する予定だったのだが、結果としては銃声鳴り響く、かなりグダグダな突入になってしまった。しかし、ラスカルとスズカの前では所詮ただの武装した小悪党にすぎず、一応の制圧は完了した。

「みんな無事ね？」

「ええ、人質の皆さんも怪我はありません」

「それじゃあ、他の人達が戻ってこないうちに脱出しますか」

が、そうは言っても銃声鳴り響く無茶苦茶な突撃だったので、当然他の仲間にも気付かれてしまったわけで……。

「逃がすものか……」

「げ、もう戻ってきた!」

そこには、ナイフをベロリと舐めるヒゲリーダーと凶悪な笑みを浮かべるテロリスト達が集結していた。

「男一人に、小娘二人、それからネズミ一匹か……獲物にしては物足りんが、まあ良いだろう」

ヒゲリーダーはそう言うのと右手を上げた。すると、部下達がガチャガチャと音を立てながら、一斉に小銃を構えた。しかし、スズカはまったく怯まない。

「あんたなんかにやられるもんですか!」

「そうだ馬鹿野郎! 魔法舐めんな、このクズ!」

まだ、スズカには奥の手が残っていた。すなわち、変身……マイニティースズカに変身すれば、小銃はおろか、戦車や戦闘機が相手でも、スズカの敵ではないのだ。

「覚悟しなさい! ドコーマ・ディッテ・モニゲ……あれ?」

と、呪文を唱え始めたところで、スズカは急に違和感に襲われた。そして、その違和感の正体に気付くと、彼女の顔からはどんどん血の気が引いていった。

「マイニティークラウンがない……」

「おい、あれほど失くすなって言っただろ!」

ラスカルに急ぎ立てられて、慌てて体中を探してみるが、見当たらない。部屋の中にも落ちていない。まさか、通気口の中に……と、そう思ったが、幸いマイニティークラウンは部屋の中にあった。

「はっはっはっ! 馬鹿め、マイニティークラウンはここだ!」

「ああ! ブル公!」

「陛下、何してるんですか!」



ブルボンの手に落ちてしまっていたが……。

「くつくつく……ついに手にしたぞ、最強の軍事力！」

ブルボンは笑いが止まらなかった、あれだけの銃を前に余裕でいられたスズカ……それだけの力がこの小さな冠にはあるということなのだから。ブルボンはそれを確信すると、マイニティークラウンをミホの頭に載せた。

「さあミホ、魔法少女マイニティーミホに変身だ！」

「嫌です！ スズカさんに返してください！」

それは当然の回答だった。悪に荷担するわけにはいかない……が、ブルボンもそんなことは予想済みだった。

「馬鹿め、貴様が変身しないと云うなら、私はマイニティークラウンを破壊する。そしたら我々は奴らによって皆殺しにされるぞ？ 分ったら変身しろ！」

「ず、ずるいですよ、陛下！」

拒否すれば、自分だけでなくスズカやラスカルもやられてしまう。選択肢を与えぬ強制力……やはりブルボンは暴君だった。そのことを思い知り、本当に気が進まなかったが、ミホは仕方無く変身することにした。が……

「そこまでだ！」

「ん？ 誰だ！」

ミホが変身しようとした時、そのプラチナ色の男は颯爽と現れた。「銀河治安維持機構調査官18351890号、コード『TM』だ！ ブルボン、貴様の行為は『変身強要の罪』に該当する。即刻中止しろ！」

「何だよ『変身強要の罪』って！ そんなもんあるのか!？」

「ある！」

「おい！」

ヒゲリーダーは溜まらず怒鳴り声を上げた。

「何だ？ 公務執行妨害で裁くぞ」

「俺達を無視するな！ ふざけやがって……全員、蜂の巣にしてやる！」

魔法少女に、銀河治安維持機構に、暴君……冷蔵庫の中に余っていたものを、適当に突っ込んだシチューのようにカオスな空間に耐えられなくなつて、ヒゲリーダーはついに、部下達に射殺の合い図を送った。

しかし、TMはまったく動じることなく、テロリスト達の方に向き直ると溜息を一つついてから、ゆっくりと口を開いた。

「馬鹿な、お前らの銃火器程度で、この私を排除できると思つているのか？」

銀河治安維持機構の調査官がまもっているプラチナ色のアーマーは、通常の銃火器では到底破壊できない代物なのだ。もちろん、地球のテロリストごときに負けるつもりはさらさらなかった。しかし、ヒゲリーダーもこれだけのテロを起した男だ。

「フン、馬鹿め……我々がギンチキが来ることを予想してないと思つたか？」

そう、全ては予想の範囲内のこと……。

「まあ、対策は何もしてないがな……」

「ええー！？ ボスー！？」

「野郎ども逃げるぞ！」

計画の初期段階で、銀河治安維持機構のことも頭にあつたのは確かだった。しかし、計画を練っていくうちにすっかり忘れてしまつていたのだ。自分で掘った落とし穴を悔やみつつ、ヒゲリーダーと部下達は逃走を始めた。が……

「そこまでだ！ 全員動くな！」

「や、やべえ、サツだ！」

突入してきたヒジリナ率いる特殊部隊によって、テロリスト達は敢えなく御用となった。

「まったく、どいつもこいつも勝手な行動をしゃがって……」

「フン、銀河治安維持機構の力を思い知ったか？」

「馬鹿を言え。こんな無理な突入、下手をすれば人質が死んでたぞ……」

事件解決後、ヒジリナとTMはしばらく口論を続けたが、しかし  
終わり良ければ全て良しということで、役人の管轄争いもひとまず  
の決着を見た。その後、ヒジリナは犯人グループを連行、そしてT  
Mは……

「それじゃあ、そろそろお前の刑を執行するか……」

この場にいた、もう一人の悪党の処分に取りかかった。

「な、何だと！？ 私が何をした！？」

「マイニティークラウンをスズカさんから盗みました」

「しかも軍事利用しようとしてたわね」

「魔法舐めてんじゃねーよ、バーカ」

「貴様らあゝ……シヴァア！」

「シヴァ君なら、事情聴取のために警察に行きましたよ」

「な、何！？」

「覚悟は良いか？」

迎賓館に響いたブルボンの叫び声を最後に、騒然としていた現場  
に平和な時間が戻ったのだった。

続く

## 24・悪を倒しに来た悪（後書き）

二日連続投稿です。

つてことでこのストーリーは決着。

今回はどんな話になるやら……。

それはそうと

今朝、すごいことがありました。

私は今日、ちよつと寝坊したんですが

そんな私を眠りから呼び覚ましたのは、なんとまさかの

ドリルの音

何だ、何だ！？

と、飛び起きて見ると

知らない男の人が私の部屋の壁に妙な装置を付けていました。

「誰だよあんた！ どうやって入った！」

と、前回の外務大臣さんのようなセリフを吐く私……。

するとその男は……

「おはようございます。管理会社の者です。火災報知機を取り付けに来ました」

と……。

何だ、管理人さんか……

合いカギで入ったそうですが

ビックリするし、倫理的にあれなのでやめて欲しいです。

## 25・もう一つのブルボン帝国

ミホの目から涙がこぼれた。彼女の視線は携帯電話の画面に突き刺さったまま動かない。たかが電話機なのだが、しかし、その小さな画面に表示された文字列によって、ミホは泣かされているのだ。「何を泣いているんだ？」

そこへやって来たブルボンが聞いた。ミホはグスグスと鼻をすすりながら、まだ涙に潤むその瞳で、ブルボンの方を見た。

「いえ、この小説があまりに悲しいので……」

ブルボンは「はてな？」と、首を傾げた。ミホの手にあるのは携帯電話で、本ではない。

「どの小説だ？ 貴様が持っているのは携帯電話機ではないか」

「だから、その携帯で小説を読んでいるんです」

「なに？ 携帯で小説だと？」

いわゆる、ケータイ小説と言う奴だった。ブルボンはミホの差し出してくる携帯の画面を、まじまじと見つめた。確かに、小説と思しき文章が並んでいる。

「今は、こうやって色んな人がインターネット上に小説を投稿できるんですよ」

「ふん、下らん……」

ブルボンは鼻で笑った。素人の書いた稚拙な文字列など、読むに値するものではないと、そう思ったからだ。しかし、ミホはムツとした表情を浮かべると、それに反論した。

「今はこういう素人の作品が流行ってるんです。陛下が時代遅れなだけです」

「なんだと？ それ、流行っているのか？」

ミホは大きく頷くと、また携帯の画面に目を落とした。そしてまたグスグスと泣き出す。馬鹿にはしてみたが、どうもミホを泣かせる力があるらしいその「ケータイ小説」とやらの、ブルボンは少し

興味が芽生えた。そして、何を思いついたか、シヴァを呼びつけた。  
「お呼びですか、皇帝陛下」

「シヴァ……貴様、ケータイ小説と言うものを知っているか？」

「ケータイ小説ですか？ ああ、携帯電話の発達と共に確立された、新たな表現手段ですね。存じております。携帯電話機さえあれば、誰でも執筆でき、誰でも読める上、その軽めの内容から中高生の、特に女性に人気のようですね」

「なるほど、人気なのか……」

ブルボンはそれを聞くとニヤリと笑った。

「ですが、批判もあります。執筆者の多くが中高生であるため、どうしても文章が稚拙になってしまったり、若年での妊娠や、ヒロインへの強姦などの内容を盛り込んでおけば受けると言う安易さもあり、おおよそ文学とは言えない代物かと……」

「フン！ 知的だとか高尚だとか、そんなことは求めていない。私を知りたいのは、それが『人気であるか否か』だ。人気ならオールOKだ」

その言葉を聞くと、ミホは涙を拭いて顔を上げた。ケータイ小説への評価を、突然180度変えたブルボンの言葉に、良からぬ企みを感じしたからだ。

「陛下、何を企んでいるんですか？」

「『企み』とは失敬な！ ただ創作意欲を掻き立てられただけだ」  
「まさか……」

「うむ、このブルボン帝国を主人公としたケータイ小説を著し、若者を中心に、我が帝国の支持層を拡大するのだ」

「そう言うのを……『企み』って言うんですよ……」

と、そんなわけで、ブルボン帝国は「帝国支持層拡大用のケータイ小説」の執筆を始めたのだが、しかし、ミホもブルボンもシヴァも、物語を書くことなど初めてだったので、なかなか良いものが書けずにいた。

「やっぱ、こう言うのには才能が必要なんですね……」

「チツ……なぜ我が帝国には、小説書きの才能のある奴が一人もおらんのだ！」

「国民が三人だからです……」

そんな感じで、企画会議も次第にグダグダになり、結局行き着いた結論は……

「プロに頼むか……」

「やっぱり、そのパターンなんですね……」

さて、しかし、プロに頼むとしても、それは「ブルボン帝国の頼みを聞いてくれる」プロでなくてはならない。三人は、今度は「そういう人材がいないか？」という議題で会議を始めた。しかし、頼みの外務大臣、シヴァの人脈の中にも、小説家は一人もいなかったと言う。仕方なく、ブルボンも自分のコネクションを探ってみるが、文学に精通した人物はいない。ミホの知り合いにも、そんな人物は一人も……と、そう思ったが、ミホは一人の男を思い出した。

「幽霊屋敷のタニノチさん！ あの人確か、ホラー作家でしたよ！」

「しかし、ホラー小説は受けるのか？」

「中高生への受けは微妙かと……。しかし、その方なら、誰か別の小説家を紹介して下さるかも知れませんか」

そこで、三人はタニノチの元へ相談に向かうことにした。

三日後、三人はタニノチの家ではない、別の家にやって来ていた。そこは小説家マルセ・ミツキ……デビュー作、『クロスズメバチの逆襲』や、『レオ・ダーバン將軍』など、数々のヒット作を生み出してきた、いわゆる売れっ子作家の家だ。彼をタニノチから紹介されたのだ。

「いらつしゃい」

中から出てきたのは三十歳くらいの小綺麗な男。しかし、服装などは若者趣向といった感じで、凡人ではなさそうな雰囲気は醸し出していた。

三人は客間に通されると、テーブルを挟んで、ミツキと向かい合

う形でソファ―に座った。用意された紅茶を飲みつつ、三人はミツキに事情を説明した。彼は笑顔でそれを聞いている……。

『クセのある男だから、コミュニケーションは難しいぞ』

ミホは話しつつ、タニノチのそんな言葉を思い出していた。しかし、今のところ、ミツキに変わった様子は見られない。若干警戒していただけに、ミホはホッと胸を撫でおろした。そもそも、幽霊の格好をして、ぼろぼろの屋敷に住んで、人を脅かしながら生活しているタニノチに「コミュニケーションは難しい」などと言われても、説得力に欠けるが……。

「なるほど、事情は分かったよ」

そうこうしているうちに、説明も終わり、ミツキは「うん」と頷きながら言った。が、続けて放たれた言葉は、ブルボンの希望に沿うものではなかった。

「君たちの帝国はなかなか斬新で面白いし、力になってあげたいけど、でも、僕はノンフィクション作家だから、新しくストーリーを考えるのは苦手なんだ」

三人とも、同時に首を傾げた。ミツキに会いに来る前に、彼のことをある程度調べたのだが、彼はノンフィクションなど一度も書いたことがないはずなのだ。そもそも、彼の作品の魅力は、その非現実性にあるのだから。

「ああ……今まで書いた作品のこと？ 一応フィクションにしてるけど、全部本当に僕が体験したことだよ。登場人物の名前を変えてるだけで、主人公は全部僕なんだ。僕の体験をまとめただけなんだよ」

ますますわけが分からない……。ミツキの話が本当だとすると、彼の作品は全て「実際にあった出来事」と言うことになるのだが、しかし、『クロスズメバチの逆襲』の中では、宇宙空間に出てパワーアップしたクロスズメバチが地球に再来し、人類の半数を抹殺す



るというシーンが存在する。そんな大事件、ミホやブルボンの知る限りでは起こっていない。と、すると、ミツキは一体どこで、そんな体験をしてきたというのか？ ミホ達には想像もつかなかったが、しかし、それはすぐに分かることとなった。

「あ、ごめん……家内が呼んでるから、ちょっと席を外すね」

「あ、はい」

しかし、そう言ったミツキはまったく動くことなく、ソファアに座ったまま口を開けて、ぼーっと始めてしまった。そして、時折「愛してる」だの何だのと、ぶつぶつ独り言を口にする。そこで、シヴァは状況を把握した。

「どうやら、『脳内嫁』という奴のようですね」

「なに？　じゃあ、さっきの話は……」

「この方の、妄想の産物ということでしょう」

『クセのある男だから、コミュニケーションは難しいぞ』

もう一度、ミホはタニノチの言葉を思い出した。どうやら、タニノチはミツキの、この「妄想癖」のことを言っていたらしい。

「で、どうするんですか？」

「うゝむ……こいつの妄想の中に、我が帝国のことを入れることができる良いのだが……」

しかし、目の前のミツキは相変わらず、よだれを垂らしながら脳内嫁との甘いひと時を送っている。入り込む余地など……と、思ったときだった。ミツキが突然、バツとソファアから立ち上がった。

「る、ルーシー！」

脳内嫁の名前だろうか？ それを大声で叫んだ。ミホ達はあまりのことに、びっくりしてソファアごと倒れてしまった。

「ど、どうかしたんですか？」

「大変なんだ！　ルーシーが、家内がさらわれた！」

「誰にだ……？」

「分からない……特殊部隊のような連中に。早く助けに行かなきゃ！　そうだ、君たちも協力してくれ！」

「ば、馬鹿を言うな！」

脳内エネミーから脳内嫁を助け出す……そんなことを手伝えと言われても、無理に決まっている。が、丁重にお断りしたはずなのに、ミツキは嬉しそうに笑った。

「そうか、協力してくれるのか！　ありがとう！」

「待て、待て！」

「脳内変換されたみたいですね……」

ミホ達は啞然とするしかなかった。

が、それは好都合なことだった。協力することになったとは言っても、それはミツキの脳内のミホ達の話で、現実の三人は、ソファに座って、黙ってミツキの馬鹿面を眺めていれば良いだけだった。たまに聞こえてくる独り言によると、どうやらブルボン帝国はそれなりに活躍しているらしい。うまくいけば、ブルボン帝国を好印象にアピールできる作品を生み出してくれるかもしれない。

「ど、どうということだ！」

しかし、突然様子が変わった。

「お前ら……協力してくれていたんじゃないのか？　それなのに、お前らがルーシーを捕らえているとはどういうことだ！」

「陛下、何かあったみたいですよ」

「放っておけ。脳内ブルボン帝国が何とかするだろ」

ブルボンは興味なさそうに言った。が、その瞬間、ミツキがまた立ち上がった。そして、その目ははっきりと、現実世界の三人を見据えていた。

「裏切ったなあー！」

「うぎゃあああああああああああああ！」

本当に突然だった。ミツキは怒声を上げながら、両の拳を振り回し、ミホ達に襲い掛かった。三人はわけも分からないうちにボコボコにされ、気がついた時には、ミツキの家の外に放り出されていた。

どうやら、ミツキの脳内では、ブルボン帝国は協力者のフリをただけの、実は黒幕だったらしい。

一ヶ月後、ミホは書店に行ったとき、新書コーナーでミツキの名前を発見した。

『ブラボー帝国の恐怖』

と、表紙にはそう書かれていた。

続く

## 25・もう一つのブルボン帝国（後書き）

久しぶりにミホを更新しました。

本当はもう少し早く更新する予定だったんですが

先日、実家に帰ってきた私を待っていたのは

突然の停電。

書いていた分やキャラ設定などが一瞬にしてパーに……

実家の涼しさに、調子こいて保存してなかったのがいけませんでした。

馬鹿野郎！ 自分、及び落雷の馬鹿野郎！

つてことで、書き直しているうちに日にちが過ぎ

今日をもって、何とか更新することができた次第です。

まあ、一番の原因は停電ではなく

書いていた分が消えたことによる精神的ショックですね。

## 26・幼女襲来

それは、ミホが外で洗濯物を干していた時のことだった。ザーッと地面を滑るタイヤの音を、彼女は耳にした。ミホの家に続く道は、ミホの家にしか続いていない。つまり、その道を車が走っていると言うことは、その車はミホの家に用事があるか、道を間違えたか、そのどちらかということになる。果たして、その車を運転する人物はどちらなのか？ 洗濯物を干す手を止めてミホが見ていると、ついにその車は彼女の目の前までやって来た。

「よっ！ 久しぶりだね」

車から降りてきた女は、タバコの煙を一吹きしながら言った。

「ヒサエさん！ 依頼料は完済したと思いましたが……」

「ははっ！ そうだね、ちゃんと頂いたよ……いやね、今日はそのことじゃないんだよ。実は折り入って頼みたいことがあってね」

「頼みたいこと、ですか？」

「ああ……」

ヒサエはまたタバコの煙をフーッと吐き出して、そして話を切りだした。

それは数日前のこと……ヒサエは、彼女の数少ない友人の一人が、突然入院することになってしまったことを知った。まあ、入院と言っても重病と言うわけではなく、ちょっとした良性腫瘍の除去手術を受けるためのものだったのだが……。とは言っても、そこで一つの問題が生じた。その友人には娘が一人いるのだが、シングルマザーの彼女が入院している間、「その子の面倒をどうするのか？」というものだ。そこで、ヒサエはその友人に頼まれ、二つ返事でその子を預かることを了承したのだが……

「それがねえ、急な仕事が入っちゃってね……私もしばらく、家を空けなきゃいけなくなっちゃったんだよ」

「つまり、ヒサエさんが帰ってくるまでの間、その子の面倒を見て欲しいってことですか？」

「そう言うこと！ 私ってこういうこと頼める知り合いが少なくてね。それで、ここに来ただけ……ダメかい？」

ヒサエが聞くと、ミホは首を横に振って、そして笑顔を作ってみた。

「いえ、私で良ければ！」

「そうかい！ いや、悪いね……」

ヒサエは嬉しそうに、またタバコを吹かした。そして、それから車に乗り込むと、窓から顔を出し、ミホに「明日連れてくる」とだけ告げて走り去っていった。

「……ってわけで、その女の子をしばらく預かることにしたんで」

洗濯物を干し終えて家の中に入ると、ミホは、居間でゴロゴロしていたブルボンにそう告げた。事の次第を聞くと、ブルボンは横にしていた体をダルそうに起し、そして溜息を一つつくと、チヨイチヨイと手招きをした。

「……？ 何ですか？」

不思議そうに近付いたミホ……の頭に、すかさずゲンコツが落ちた。

「何で叩くんですかぁ!？」

「この馬鹿め！ この私に無断で、厄介事を引き受けおって！」

「良いじゃないですか、女の子一人預かるくらい!……ねえ、シヴァ君？」

頭を押さえて、目に涙を浮かべながら、ミホは近くで新聞を読んでいたシヴァに助け舟を求めた。シヴァはそれを聞くと、読んでいた新聞を折りたたみながら口を開いた。

「まあ、私是一向に構いませんが……ちなみに、どんな女の子なんですか？」

逆に、シヴァが聞いた。それに答えようとして、しかし、ミホは

「うん」と言っただけに手を当てた。

「可愛い……女の子……？」

とりあえず、言ってみた……が、すぐにゲンコツ第二撃が頭を襲う。

「適当なことを言うな！ どうせ聞きもしなかったのだろう、まったく……とんでもない奴が来たらどうする気だ？」

「『とんでもない奴』って……来るのは女の子ですよ？」

「分りませんよ、ミス・コジマ？ 女の子と一言で言っても、世の中には色々な女の子がいます。ひょっとしたら、身の丈二メートルぐらいの……」

「シヴァ君……そんな女の子、めったにいないよ……」

とにかく、もう引き受けてしまったので、今更断わるわけにもいかない。ミホは何とかブルボンの説得すると、しかし、やって来るであろう可愛らしい少女の姿を思い浮かべながら、その日は床にいた。

そして、次の日……

「じゃ、頼んだよ！」

そう言っただけ、ヒサエはミホ達に向かって手を振りつつ、乗って来た大型ダンブに乗り込んで去っていった。昨日は黒のセダンだったが、今日は大型ダンブだ。その大きなタイヤが巻き上げる砂埃にまみれつつ、ブルボンはやって来た少女に目をやった。

「……さて、私の目の前にいるこいつは何だ？」

「女の子です」

ブルボンの質問に答えたミホ。しかし、スーッと息を吸うと、その後に付け足した。

「身の丈、三メートルぐらいの……」

「しかも『筋肉の鎧』のおまけ付きです、皇帝陛下」

ヒサエが、昨日のセダンでは来れないわけだ。目の前の少女は、確かに戸籍上は少女なのだが、しかし、長身のブルボンですら見上

げるほどの大きさで、さらにその肉体は鍛え上げられた美しい筋肉によって覆われていたのだ。ブルボンはその中世の彫刻のような少女の、しかし不釣り合いな幼い顔を見つつ、また溜息混じりに口を開いた。

「……ミホ、何か質問してみる」

「えっと……お嬢ちゃん、名前は？」

ミホが聞くと、少女は大きく息を吸い込んだ。

「ハレノ・ラン！ 五才です！」

大気が爆発したような衝撃……ランの放った声は、ミホ達の骨の髄までも揺さぶった。

「ただの自己紹介なのにビリッて来ましたね、皇帝陛下」

「そうだな……」

そう言って、ブルボンはまだビリビリと衝撃の余韻が残る体を動かし、ミホの所まで行くと、すかさずその耳をつねり上げた。

「なんて奴を預かったんだ！」

「痛っ！ だつてえ……」

「『だつて』も『あさつて』もない！ 貴様の責任だぞ！」

怒鳴るブルボン……その手から何とか開放されると、しかし、ミホは涙目になりつつ返した。

「大丈夫ですよ。ちよつと大きいですけど……きっと良い子ですよ」が、ブルボンはそれを聞くと、またミホの耳をつねり上げた。そして強引に彼女の顔をランの方に向けさせると、また怒鳴り声を上げた。

「ちよつと？ 『物凄く』の間違いだろうが！ 大体、どうやってこいつを家に入れるつもりだ？」

「どうやって、って……そりゃあ、玄関から……」

ミホはそう言いつつ、ランに家の中に入るよう促した。しかし、ランは身長三メートル近い体に筋肉の鎧をまとっているのだ。当然玄関から普通に入れるわけもなく……

「ランちゃん……こういうとき、普段はどうしてるの？」



「こうしてるの！」

次の瞬間、凄まじい轟音と共に、ランは何とか家に入ることができた。

「皇帝陛下、家の玄関が広くなりました」

「……素晴らしいリフォームだな」

玄関に空いた大穴とひしゃげた扉を見ながら、ブルボンは無言でミホにゲンコツを落とした。

さて、家に入ることはできたが、やはり狭いものは狭い。ランは天上に頭をぶつけないように、リビングの隅で丸くなっていた。と言っても、その巨体……リビングの半分以上を占領してしまったが……。

「ミホ、その猛獣から目を離すなよ！」

さっきの玄関のくぐり方と言い、こんな少女に暴れられてはブルボン帝国未曾有の大惨事になりかねない。そう思って、ブルボンはミホに釘を刺すように言った。

「大丈夫ですって……ランちゃん、こっち来ておやつ食べよう」

大きいと言っても、まだ年端もいかない少女相手に……ランを危険にするブルボンの大人気なさに溜息をつきつつ、手に持ったドーナツを差し出しながら、ミホはランに言った。しかし、ランは首を横に振る。

「いない。自分で持ってきたのがあるもん」

「自分で持ってきたの？」

ランはそう言って、袋を取り出した。何やら、ガタイの良い男がポージングを決めている写真がパッケージになっているが……何のおやつだろうか？ ミホが不思議そうにそれを手に取ると、横からシヴァもそれを覗きこんだ。

「プロテインのようですね……」

子供のおやつではない……ミホは軽く引いたが、ともかく、今はランが大人しくしていてくれるに越したことはない。とりあえず、

台所でプロテインの粉を牛乳に溶かして、それをランに与えてやることにした。

「そんなもん飲んどるから、そんな体になるんだ！ くそ……この私が世界を握った日には、プロテインなど抹消してくれるわ」

相変わらずブーブー言うブルボン。その非難の視線から逃れたくて、ミホはランの相手をすることにした。

「ランちゃん、お姉ちゃんとトランプして遊ぼうか」

しかし、その誘いにも、ランは首を横に振った。

「うっん、しない。トレーニングするから……お姉ちゃんもする？」

「うっん……しない……」

何もかもが規格外だった。ミホはただ呆然と、少女の腕立て伏せを見守るしかなかった。

しかし、その腕立て伏せがいけなかった。

「おい、何かミシミシ言ってるぞ？」

何と言っても、ランの巨体が行うスーパーヘビー級の腕立て伏せだ。壁や柱はきしみ、天上からはパラパラと埃が落ちてくる。それを迷惑そうに見ていたブルボン……を、悲劇が襲った。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

叫び声に驚いてミホを見ると、ブルボンは倒れてきたタンスの下敷きになっていた。

「大丈夫ですか？」

ミホとシヴァがタンスをどける。その下では、ブルボンが鼻血を出しながら怒りの形相を浮かべていた。

「くそ……あの筋肉たるまめ……！」

起き上がると、ブルボンはランをキツと睨みつけ、しかし、まったく腕立て伏せを止める様子のない彼女の方にゆっくりと近付いていった。

「許さんぞ！」

ついに怒ったブルボンは、ランの体めがけて全力でパンチを繰り出した。しかし、いくら年齢的、戸籍的には少女と言っても、ラン

は筋肉の鎧に身を包んでいるのだ。ブルボンごときの打撃が効くはずもなかった。それでも、一応トレーニングの邪魔にはなったらしく、それ相応の不快感を覚えたのか、ランは腕立て伏せをやめるとブルボンの方に向き直った。

「ぶへえんツ！」

そんなわけの分からない悲鳴を上げて、ブルボンは吹っ飛ばされると壁にめり込んだ。ランの平手打ちが炸裂したのだ。その一発で完全にノックアウトされてしまったブルボン……しかし、ランはブルボンを壁から引きずり出すと、なおも攻撃を加えようとその体を抱え上げた。

「おじさん、ランのトレーニング邪魔した悪い人！　悪い人、嫌い！」

そう言ったランの姿は、次の瞬間、ミホとシヴァの目の前から消えてしまった。その代わり、天上には大きな穴……ランがジャンプしたのだ。ジャンプして、ブルボンの頭が下になるように抱えて、そのまま落下……超ド級のパイルドライバーが炸裂した。

……………

「ミス・コジマ、大丈夫ですか？」

気がついた時、ミホの目の前にはシヴァの顔と、そして青空が映っていた。

「あれ？　私……どうしたの？」

家の中にいたはずなのに……ミホが考えていると、シヴァは目の前にある瓦礫の山を見ながら口を開いた。

「残念ですが、家が倒壊してしまったのです」

「ええ！？」

ランのパイルドライバーは、ブルボンだけでなく、ブルボン帝国をも破壊しつくしてしまったのだ。

「どつするのこれ……」

「知りません……」

続く

## 26・幼女襲来（後書き）

実は、もう少し早く更新する予定だったんですが、なぜかスランプ気味になってしまっていて……。

ミホとブルボンが書けなくなってしまったので、書きませんでした。まあ、多忙って言う理由もあったんですが、そっちは八月の話でしたからね。

ってことでお待たせしました。

待ってた人がいたかどうかは分かりませんが……。

でも、それを考えると、ハンター×ハンターの富樫先生はすごいですね。

いろんな人が続きを待ってるんですから。

あんなに休んでるのに。

私も、あれぐらい休載しても待ち望まれる物語が書きたいですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2495d/>

---

帝国臣民ミホ

2010年10月8日21時27分発行